

ソシオンの一般理論 () トリオンからソシオスへ

木 村 洋 二

Toward a General Theory of Socion ()

Trion Model and the Communication Dynamics of Socion Network

Abstract

“Socion” is a unit of the social communication network of the semio-weight, the expect-potential termed “semion”. The positive semion is named “posion”(P) and the negative one is “necron”(N). Socionet is a multi-layered inter-crossing network system of communication loops and actions of socions. “Trion” is the internal model of socion triad mapped in the second layer (sub-level) of a socionet. The trion transduces the semio-potential into the due output expect, through triangular operation. Trions with two negative relations(N) are stable for operation. Four types of trions (PPP, PNN, NNP, NPN) are significant. Being given the directions and the turns of operation, 96 types of different trion operations are discussed. Each type of semio-potential operation represents meaningful experience in terms of love and hate.

At the last part, the self-boundary-maintaining network system of socions is illustrated. “Socios” is the term given to this kind of socionet armed with social immunity resulting in the collective selfhood or identity as well. The mediative generation of the hyper semio-potential is discussed in terms of the sacred.

Keyword: socion, trion, socios, triad, balance theory, communication, network, social system, semion, posion, necron, the sacred

抄 録

ソシオンの荷重動作をサブレベルで制御すると想定される2項ユニットをダイオン、3項ユニットをトリオンと呼ぶ。2者関係のメカニズムとダイオンの荷重変換論理は前稿で論じた。トリオンはその荷重変換動作によって一定の予期ポテンシャルを発生する。論理的に可能な96種類の回路動作パターンから、考えられる荷重変換ロジックと体験される感情を体系的・網羅的に演繹する。関係性のなかにおける人間の感情のパターンとその変化の道筋を、可能な限り論理的に思考するための概念道具を構成することが課題である。トライアッドの3階層が識別され、階層間の「くり込み・くり出し変換」が議論される。トリオンの多重ループ複合によって駆動されるトライアッドの力学が検討され、あわせて関係における不幸の誕生のメカニズムが瞥見される。最後にトリオンの多重合成動作によって編み上げられるソシオネットのパターンとソシオスの構成を展望する。

キーワード：ソシオン トリオン トライアッド コミュニケーション バランス理論 ネクロン
ポジオン 祈り 呪い 分裂結合 トリオンロック ソシオス 聖なるもの

もくじ

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 0 . 序 : ソシオン理論の骨子 | 6 . 感情のキューブ |
| 1 . ダイアッド | 7 . ソシオンのループ (以上前号) |
| 2 . 交差と階層 | 8 . <u>トライアッド (本号)</u> |
| 3 . コミュニケーション | 9 . <u>ソシオス (本号)</u> |
| 4 . 自己システム (以上前々号) | 10 . 終章 : ソシオンの箱舟 (次号) |
| 5 . 他者の構成 | |

8 . トライアッド

8.1 ソシオンのトライアッド

- | | | |
|-------------|---------------|-----------------|
| 8.1.1 荷重の交換 | 8.1.2 トリオンの階層 | 8.1.3 コミュニケーション |
| 8.1.4 メタループ | 8.1.5 思考の環 | 8.1.6 サブワールド |
| 8.1.7 不在の他者 | | |

8.2 トリオンの概念

- | | | |
|-------------|--------------|--------------|
| 8.2.1 基本図式 | 8.2.2 変換チャート | 8.2.3 トリオン安定 |
| 8.2.4 感情の演算 | 8.2.5 ソシオン変換 | |

8.3 パターンの構成

- | | |
|-------------|---------------|
| 8.3.1 動作の次元 | 8.3.2 順序による拡張 |
|-------------|---------------|

8.4 トリオンのマトリックス

- | | | |
|---------------|---------------|---------------|
| 8.4.1 PPPトリオン | 8.4.2 PNNトリオン | 8.4.3 NNPトリオン |
| 8.4.4 NPNトリオン | | |

9 . ソシオス

9.1 ソシオスの形成

- | | | |
|----------------|--------------|---------------|
| 9.1.1 ソシオカテゴリー | 9.1.2 連結ユニット | 9.1.3 プロトソシオス |
| 9.1.4 ソシオス | 9.1.5 排除と免疫 | 9.1.6 分裂結合 |
| 9.1.7 中心の媒介者 | | |

8. トライアッド

ソシオンは個人、法人、組織体、国家など社会的行為主体を指す私たちの造語である。ソシオン(socion)は互いに自他を表象としてとり込み、これに荷重する(「くり込み変換」)、荷重(semio-weight)はデキゴトに対する重みづけで、プラス マイナスの分極性と、強さの次元をもつポテンシャル量である。ソシオンAのサブスペースにおける表象への荷重は、その表象によって指示されるソシオンBが、選択的に到来させうるデキゴト(event)に対する一定の予期(expect)を生み出す。この予期ポテンシャルは、ソシオンAを励起して、一定の選択性/自由度のもとで自他に対する行為(action)を誘導する(「くり出し変換」)¹⁾。

ソシオンはこの荷重コミュニケーションと行為の交換の環で横に結ばれながら、それぞれの「くり込み くり出し変換」を自己回帰的に重ねていくなかで、自他にたいする荷重を学習・調節し、社会的ネットワーク(socion network, socio-net)を自己組織化(生成・制御・更新)する。

8.1 ソシオンのトライアッド

8.1.1 荷重の交換

ソシオンは、他者の像に荷重する。この他者に対する信-不信の荷重を私 とよんだ。ソシオンは自己の鏡像に同一化するので、他者のもとに自己の分身(私)をもつことになる。ソシオンAの自己荷重(私)は、この分身つまり他者BのもとでのAの鏡像(私 、Bが見ている私Aの像)にたいする他者Bの荷重動作に連動して変動する。他者(自己)の荷重動作に連動対応して自己(他者)の荷重量が変動したとき、一定の微小荷重(交換荷重子 sociotron/semion)が交換された、と便宜的に考えることができる。プラス方向の変動

1) ソシオン理論は当初よりコンピューターを用いたシミュレーションへの展開の可能性を展望しつつ、主に両宮・藤沢・木村の3人の共同研究と議論(木村1990、藤沢1991、両宮1993)を通じて発展してきた。現在、科学理論としてソシオン理論が備えるべき基本的特性および現在のモデル(特に木村のキューブモデル)の有効性さらに今後の展開方向についての、それぞれのディシプリンにも起因する見解の相違によって、研究の連携は緩められている。木村としては、サブ、メタ、オブと異なった階層を縦断して畳み込み変換(くり込み くり出し)をおこなうソシオン・ネットワークの多重構造と、これを制御/駆動する中枢ユニットの構造と機能を十分に解明しないままのシミュレーションは、部分的にヒトの社会ネットワークの特性を写すことはできても、ヒトとその社会の核心部を解明するまでには至らないだろう、と考えている。この「一般理論」で展開しようとしているのは、まさにこのたたみ込み変換を制御するコアユニットのモデル構成である。

本稿は3者関係における創発特性を検討するための試論であり、トリオンと命名した3項モデルは、3者3項関係を制御あるいは駆動する中枢的な荷重変換ユニットとして仮説的に構成されたものである。現段階ではまったく仮想的な回路でしかないが、そのような比較的単純な回路動作を仮定することで、他の仮説では説明できないような事象や事実をもし体系的整合的に説明できるとすれば、人間科学にとってそれはそれなりに将来検討に値するひとつの理論仮説となろう。

をもたらすポジティブな仮想荷重子をポジオン (posion)、マイナス方向の変動をもたらすネガティブな仮想荷重子をネクロン (necron)²⁾とよぶ。

ポジオンは他者やデキゴトにたいする「在レ」と祈る意識の志向動作、つまり愛や希望とよばれる荷重の交換子であり、ネクロンは「無クナレ」と呪う意識の志向動作、つまり嫌悪や恐怖といった荷重の交換子である。ポジオンはフロイトの「リビドー」(エロス)に、ネクロンは後にタナトス(モルチドー)とも呼ばれる「死の欲動」に近い(フロイト 1920=1970)。ちなみに、予期ポテンシャルとしての荷重は、E.レヴィナスがその哲学的存在論へ組み込んだフランス語の「イリヤ」(il y a=アル)とも符合する概念である(E.レヴィナス 1974=1990)。

ポジオン、ネクロンとも、コミュニケーションによる荷重の変化量で測られる仮想の交換荷重量であり、当事者の意図と解釈に多重に依存する不確定量である(木村 2000)。あえてこのような用語法を用いることで、他者Bから拍手や花束など肯定的な評価を送られて私Aはとて「元気が出た」、と日常的に表現されるような事態を、Bからポジティブな荷重つまりポジオン (posion) がAに贈られた、と記述することができる。貶されて気が滅入った場合はネクロン (necron) をふり込まれた、ということになる。

8.1.2 トリオンの階層

3個のソシオンからなる多層荷重ネットワークをソシオンのトライアドとよぶ。トリオンは、トライアドの第2階層で構成される3項回路で、3つの表象を荷重的に連結し予期ポテンシャルの変換動作をおこなう基本ユニットである。トリオンは、サブネット上で予期ポテンシャルを生成変換しながら、トライアドの「くり込み-くり出し」運動を誘導制御するソシオンの中枢回路である。ひとつの3者関係には3つのトリオンが構成される。ソシオネットは、このトリオンおよびダイオンのループの複合動作をつうじて、ネットワーク自身の荷重構造を生成・制御・更新する。

A、B、Cの3項(3者)からなるソシオンのトライアドを考える。それぞれ他のソシ

2) 前号木村2000参照。この無機的な用語法は思考を促進する上で重要である。「呪い」や「憎しみ」や「愛」という強い荷重が備給された言葉によっては、私たちの存在を駆動するメカニズムについて平静に自由に思考することは容易でないからである。嫉妬や僻みや恨み、呪い、渴望、希望といった言葉は、字を見ただけでかなりの人間の気を重くさせる。思考は、恥ずかしさや嫌悪感、冒感といった否定性の感情のなかで歩みを止める。価値にまみれて重い荷重を負った言葉が、荷重空間に内在する意識が記号連鎖を紡ぎだす自由な運動を妨げるのだ。私たち近代人が神聖だ、と考える「愛」や「希望」について、あるいは「恨み」や「呪い」「僻み」といったおぞましい言葉で語られる、いやむしろ語られることを禁じられた一群の感情について、聖感を感じずに明晰に思考するためには、荷重やP/N、ネクロン/ポジオンといった無機的な用語を敢えて造語することが必要であり、それなりに有効であることを読み終えたあとで納得されるだろう。

オンを表象としてサブスペースにくり込むので、図のように、各ソシオンの第2階層に、それぞれ3個のソシオンがたたみ込まれる。これら3つのサブソシオンが荷重連結されて1個のトリオン・ユニットが構成される(図8.1a)。

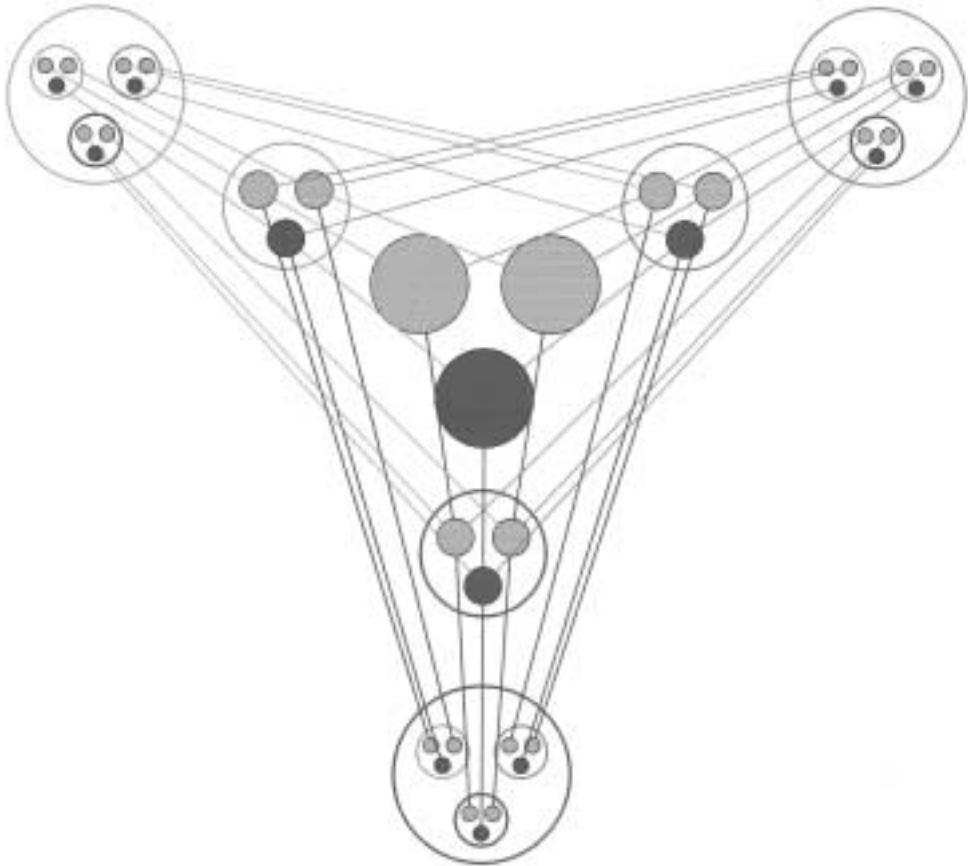


図8.1a トライアド全図

図8.1aはトライアドの展開図、8.1bはサブレベルのトリオンとその連結ループ、8.1cはメタレベルのコミュニケーションを表わす。中心の大きな3つの円が下から左まわりにソシオンABC、その外に3つずつ描かれた中円がそれぞれのソシオンがサブレベルにくり込んだ3つのサブソシオンをあらわす。さらにメタレベルにくり込んだ9つのメタソシオンがその外に描いてある。

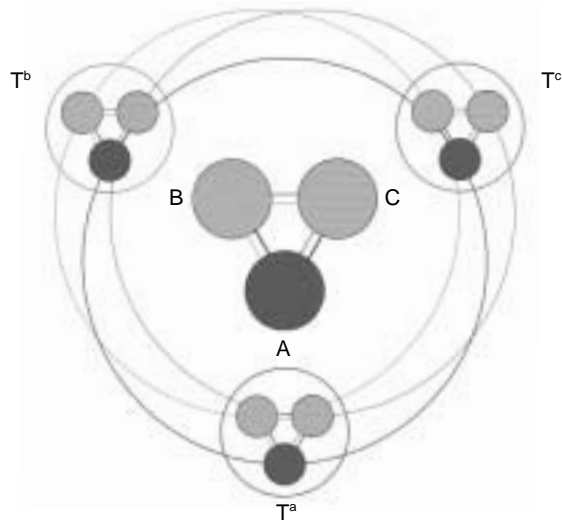


図 8.1b トリオンの階層

ソシオンAが構成するサブソシオンA^a、B^a、C^aの連結体がトリオンT^a、Bが構成するA^b、B^b、C^bのトリオンT^b、CがつくるA^c、B^c、C^cのトリオンがT^cである。こうして、ひとつのトライアッドに3つのトリオンが構成されることになる。

8.1.3 コミュニケーション

ソシオンがサブレベルでトリオン（あるいはダイオン）によって形成した予期ポテンシャルは、同じ第2階層で他者のサブソシオンに直接情報として出力されうる。トリオンは、ソシオン間のコミュニケーションをつうじてたがいに連動する。

図 8.1bにおいて、それぞれのサブソシオンを結ぶ大きな3本の円周がこのサブレベルのコミュニケーションのループをあらわしている。泣き顔を見ているうちに泣けてきたり、笑顔や笑い声で笑いが移ったりするのは、目や声の表出と知覚をつうじて情動や予期の波がサブスペースからサブスペースへ個体を超えて連結されたことを意味している³⁾。情動の共鳴や引き込みを伴うこの「原初的コミュニケーション」(正村 1997)は、ふつう感情や気分として意識されるが、無意識の感応や共鳴も発生し得る。

3) ノンバーバル・コミュニケーションのおおくが、このサブレベルでの荷重表出と引き込みによる共鳴作用をもっていることはすでに前稿で述べた通りである。3者のネットワークでは、この共鳴性がいっそう高まり、情動が超個体化しやすい。顔のほころびや弾んだ声をメディアにして、一種の超個体的な「場」、緊張した、あるいはうちとけた「雰囲気」が構成される。しかも、いったん構成されたその場の「雰囲気」は、個別ソシオン（の注意）の離脱を超えて、2者のあいだで（キャッチボールの 패턴のように）保存される。この関係の超個別性がトライアッドにおける荷重連結の大きな特徴である。

ちなみに、言語意識的に分節される第3階層メタレベルと、この感情 雰囲気的でしばしば前意識的な第2階



図 8.1c メタレベル

8.1.4 メタルーブ

鏡像への同一化と鏡像帰還を通じて自他が構成しているサブソシオンについてのメタ意識、つまり2次の変換と思考が発生する。図 8.1aの一番外側の小さな3つの小円のクラスターは、この第3階層にたたみ込まれたソシオン(=メタソシオン)のユニットを示している。ソシオンはそれぞれ自他のサブソシオンの3項ユニットつまりトリオンをメタレベルへたたみ込むので、各ソシオンのメタレベルには、すくなくとも3つのトリオン(メタトリオン)が入れ子状にたたみ込まれて、トライアッド全体としては曼荼羅的パターンが発生する。

第3階層メタレベルでは、ソシオン間で言語シンボルを介した固有のコミュニケーションが発生する。その様子をとりあえず図示したのが図 8.1cである。それぞれのソシオン

層サブレベルのコミュニケーションの荷重(ポジティブ/ネガティブ)のズレが、G.ベイトソンのいうダブルバインド(1972=1990)のポイントであるが、私たちの語法では、「メタ」の使い方が逆になっている。「かわいい坊や!」と呼びかける時、母の顔が不安で引きつるとすれば、その気配の表出は、メタというよりむしろサブレベルにちかい。

のなかのそれぞれのメタソシオンが、対応する他者のメタソシオンとコミュニケーションのループで結ばれている。たとえば (A^a) 、 (A^b) 、 (A^c) の3つの小円をむすぶ超個体的なループは、AとBとCの3人が、AがA自身をどう感じているのか、Aの自己イメージ A^a について情報を交換している、つまり会話していると考えることができる。さらに図には示していないが、たとえば、 (A^a) 、 (A^b) 、 (A^c) の3つを結ぶループを考えると、A、B、Cの3人がそれぞれに「私はAをこう思う！」とまくしたてている状態に対応する⁴⁾。

なお、トライアドでは、A自身を除いてBとCがAについて話し合うということが可能になる。これはAの鏡像がAの知らないところで社会的にリアルなものになることを意味する。Aの鏡像がBとCによっていわばタライまわしにされ、他有化される。トライアドのコミュニケーションでは、原理的に鏡像の自己疎外が起こり、私の知らない私のうわさや伝説が誕生する(木村 1995)。

8.1.5 思考のループ

ソシオンの内部のメタレベルに描かれた3つの小さなトリオンは、各ソシオンがサブレベルで構成したトリオンが、それぞれ2次の変換をうけて第3階層にたたみ込まれたものを示している。それぞれのソシオンにおいて、これら9つの小円のうちそれぞれの対応するメタソシオンを結ぶループが3本書き込まれている。これらのメタスペース内部のイントラループは、ソシオンの内的な会話、つまり思考を表わしている、と考えられる。たとえば (A^a) 、 (A^b) 、 (A^c) の3つを結ぶループは、ソシオンAが自分が見ている自分 A^a と、Bが見ている自分 A^b と、Cが見ている自分 A^c の3つの像(とその評価荷重)について、ズレと合致を検出するA内部の作業の環(社会的な自己意識)を表している。

このメタスペースの思考の環が、外部を回る会話・コミュニケーションの環と合致して、問題となっている対象についての荷重が合致したとき、メタ符合の括弧がはずれてメタソシオンがサブレベルにくり出される階層降下が起こる、と考えられる。思考の対象となっていた表象が、備給を獲得してリアリティを獲得する。ふつう私たちが「人間」や「鬼」や「魔女」とみなしている存在は、表象荷重体に備給された予期ポテンシャルがオブジェ

4) 図ではきれいな9本の円周が描かれているが、実際のコミュニケーションでは、逸らしやズラシ、切断や途絶をふくめてはるかに怪しい複雑な配線図となるだろう。当てこすりや、ほのめかしは、誰の何について語っているか(ループがターゲットにしているか)をそらしたり、転換したりすることで、荷重の防衛や攻撃の効果をねらったものである。分裂病者の家族には、そうした病理的なコミュニケーションが観察されることが報告されている。なお、この話題や括弧(言及階層)の急激な移動は、それによって予期荷重に不意の落差を、したがって「笑い」を産み出すユーモアの重要な技法でもある。備給を停止する笑いの無化機能によって、記号・表象系との対応がいったん解かれて荷重出力が余剰化し、「愉快な無」と化した余剰荷重がループの固着と繯れをほどこき、感情と思考の貼りつきを防止すると考えられる(木村 1982)。笑いは、思考や会話を初期化して認知機能を「リスタート」させる重要な役割を果たしている可能性がたかい。

クトレベルに投影・実体化されたものである。ソシオンの思考は会話による共同主観的な妥当性の確認を経て、メタレベルの可能空間から、サブレベル、オブレベルへとくり出され、その対象は同一性と実体性を獲得する、つまり現実的なもの、リアルなものとしてソシオンに意識されるようになる、と考えることができる。

なお、逆にソシオンのメタレベルへのくり込みは、一種の「エポケー」(フッサール 1954 = 1974) 判断中止の操作になり、これによって荷重成分を切断された表象とその関係がメタ空間にくり込まれて可能な「自由変容」をうける。

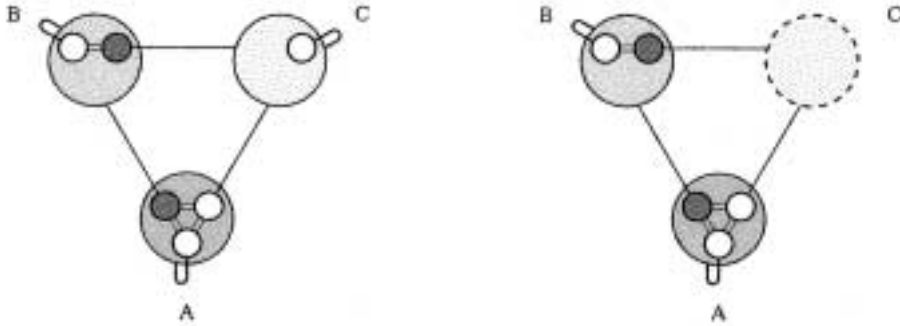
8.1.6 サブワールド

3者がオブジェクティブに集合しているからといって、すべてのソシオンがトリオンの3項連結を構成するわけではない。それぞれ他者とどこまでかわりをもつか、その範囲と深さがソシオンの視界、主観的世界を構成する。そのサブレベルのスペースに取り込まれた限りにおいての関係を、ソシオンのサブワールドとよぼう。ソシオンは一般に、その視界の範囲で他者との関係をリアルな配慮や心配をもって生きる。

図 8.2aは、A、B、C 3人がいて、Cは単独の回帰ループを、BはCを巻き込んで2者のループを、Aは3者の関係するループをそれぞれ構成している様子を表わしている⁵⁾。それぞれのサブレベルで構成された荷重体のうち、単独体をモノンmonon、2者の荷重連結体をダイオンdyon、3者の連結体をトリオンtrionとよぼう。それぞれオブジェクトレベルでのモナッド、ダイアッド、トライアッドにそれなりに対応している。モノンは自己回帰によって同一性をつむぐと同時に、自己荷重を増幅もしくは減衰する。ダイオンは、相手他者との荷重差を検出して、愛と欲の荷重動作を誘導する(前稿の「キューブモデル」)。トリオンは、荷重変換動作によって、第3項とのあいだに一定の予期を発生する。

5) この図は「宿場の3人」として見ていただくとわかりやすい。例えば、ある宿で3人が同室したとする。Cは独り旅の者、BはCのほうにチラチラと目をやり、Aはそういうふたりの様子が気になっている。Bの不穏な意図に感づいたAは、Cのことを心配しながら、どうしたものか様子をうかがっている。係わりあいになるのを懼れたAは、あたかも何事もないかのようにBやCのことを無視して、(しばらくは)我関せず、とモノンを決め込むこともできる。在ルもの・ことを無いかのように無視・否認・軽視することは、くり込み変換の重要な一面である。

図 8.2 サブワールド



8.2a モノン・ダイオン・トリオン

8.2b 不在のソシオン

8.2aでは、A, B, C 3人が一緒にいるが、Cは自己回帰でモノン、BはCを指向しながらダイオン、AはBとCの関係を気遣ってトリオンを構成している。8.2bでは、オブジェクティブには現前していない「不在の他者」CがAとBのサブスペースに構成されている。

8.1.7 不在の他者

また、オブジェクティブには存在していないのに、サブジェクティブにはもうひとりのだれかが表象として現前し、その不在の他者の表象に対する荷重動作が現に発生している、ということがしばしばありうる。図 8.2 bに示した破線のソシオンが、問題の不在のソシオンである。

不在の恋人Cを思う独り者Bや、後妻のBを尻目に先立たれた先妻Cのことを想いつづける夫Aなど例示にはことかかない。ソシオン理論的には、表象はオブジェクトとしての対応物をもたなくても、荷重動作をひき起こすかぎりにおいて社会的な存在である。ナイもの・ことをアルかのように重視・幻想して荷重動作を展開することは、不在の対象や死者と深い関係を生きる人間のもっとも重要な特徴である。

しかし、それらは単なる妄想や幻想ではない。主観的な情報構成体は、現実の行動を導き得る、という点で現実的なもの（の可能態）であり、そういうものとして経験的な実在の一種である⁶⁾。

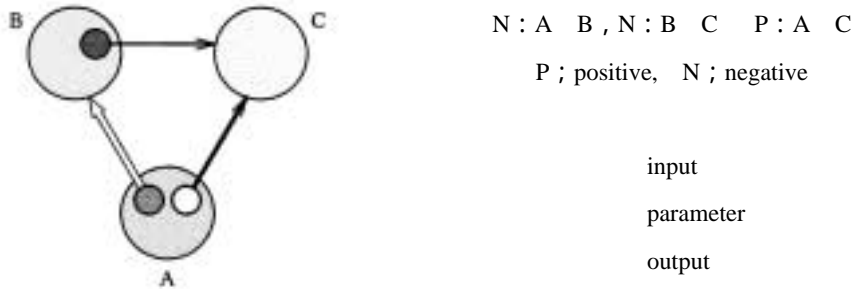
6) ソシオンの意識主体としては、サブレベルでトリオンが出力する荷重ポテンシャルを、しばしばオブジェクティブな存在よりもリアルな他者性として経験する。記憶と予期によってインターフェイスの間合いをひろげた人間は、オブジェクトレベルとダイレクトなインターフェイスを希薄化したその分、この荷重とよぶ予期ポテンシャル

8.2 トリオンの概念

8.2.1 基本図式

トリオンは、主体のサブスペースで構成された荷重表象の3項回路であり、このトリオン回路上を正負の予期ポテンシャルが還流する、と仮定する。変換論理を解析するために、ひとつのトリオンを考える。A本人が自分について構成したサブソシオンA^aを下に、左上にBについて構成したサブソシオンB^aを、右上にCについて構成したサブソシオンC^aを配置したモデルを基本にする。

図8.3 トリオグラフ



3つの大きな円はソシオンAがサブスペースに構成したサブソシオンA^a、B^a、C^aを表わし、内部の小さな円と矢印は、それぞれのサブソシオンに対するAの荷重動作を示している。白黒が荷重の正・負、つまり好・悪・愛・憎もしくは信・不信を、矢印は荷重動作の方向に対応する。矢印の種類で動作順序を識別している。白抜き矢印が第1入力、普通線が第2入力、太い矢印線が第3最終出力である。

基本となる変換動作は; 1 P×P=P, 2 P×N=N, 3 N×N=P, 4 N×P=Nの4つで、それぞれ1友の友は友、2友の敵は敵、3敵の敵は友、4敵の友は敵、となる。動作の方向を区別するので、32種類の変換が問題となる。

ルを(意識主体からみて)外部的な「現実」として構成し、「リアリティ」として経験することになったと考えられる。

古来より人間が神と信じる表象の前で打たれたようにしびれるのは、意識にとってもつこの荷重の他者性とそのリアリティの1次性によるものであろう。この荷重の1次性が、トリオンの産み出す予期を「妄想」と呼ばれるほどにリアルに生きることになる理由である。

ちなみに、生きたヒトだけを「実在」の人間と捉える実証心理学は、「死者」を探求の対象にふくめる術を知らない。精神分析的な「対象関係論」がこの「死者」を内的な「対象」の一種として扱っただけであろう。ソシオン理論においては、「死者」は「対象」であるだけではない。第2階層のサブスペース、つまり、脳内部の表象×荷重空間においては、私を護りあるいは怯えさせる一種の「主体」でありうる。トリオン動作との関連で後に論じられる。人間には、もうオブジェクトには存在しない他者、不在の人や死んだ人が表象×荷重のソシオンユニットとしていわば公然とあるいは隠れて棲みついていると見るべきであろう。この見えない他者が、いろいろなレベルで「予期」を投射して現実の關係に干渉してくるとき、対人關係にやっかいな面倒事が起きやすい、と考えることができる。トラウマ体験の反復強迫などもその一例であろう。

図8.3はソシオンAが構成したトリオンの基本動作を図示したソシオグラフである。AからBへの矢印は、AがBに負の荷重(N)をおいている、あるいは送り出していることを示している。これを、 $N:A \rightarrow B$ とも表わす。逆にAからCへの矢印は、AがCにプラスの荷重(P)を送っていること、Cの視点から見ると、Aから信頼や援助をうけられるだろう、という受動的な予期をCが形成していることを示している。式で、 $P:A \rightarrow C$ とも表記する。(サブスペースでの変換なので、能動だけでなく受動性の予期もAの内部で発生し得ることに注目されたい。)

またBからCへの矢印は、BがCへネガティブな荷重を送っている、とAが見ていることを表わしている。本来ならばすべての式に添字をつけて、 $N:B^a \rightarrow C^a$ のように表記すべきだが、簡単にするために省記する。

このような表記法をモレノに因んで前稿でソシオグラフ(sociograph)とよんだが(なお、モレノの有名な対人ネットワーク表記法はsociogramである)、この2階層間の「くり込み-くり出し」を内包する図表記によって、ソシオン間の志向動作の方向と畳み込みの構造/パターンを一挙に目にすることができると同時に、関係自体をループユニットとして思考の対象とすることが可能になる。

トリオンの回路を還流する予期のうち、マイナスのポテンシャルをもつものをネガティブの頭文字をとって単にN、ポジティブなものをPと略称する⁷⁾。前者は、対象にむけられた「ナクナレ」という思い、つまり「呪い」の心的動作に対応し、後者は「アレ」という思い、つまり「祈り」の志向作用に対応する。

7) 前稿でものべたが、「荷重」(semio-weight)とよぶポテンシャルの操作的定義でもっとも明確なものは、「笑いによって吹きとぶ=無化されるもの」である。荷重は、未だ脳内の実体(というより実態)は不明であっても(快感神経とよばれる脳幹のA10神経がかかわっていることはほぼ間違いないだろうが)、それが、懼れや期待、威厳や威厳さ、深刻さの感覚や感情として意識に与えられるおなじみの量もしくは強度であり、その威厳や深刻さが笑いによってリアリティを脱失し、空っぽの無と化するのである。おそらく、「笑い」の回路メカニズムと伝達物質などの本体が解明されたとき、ソシオン理論が荷重とよぶもの(ひいてはフロイトのリビドー=カセクス)の機能的対応物(というより現象)が、神経回路上で科学的に特定されるだろう。いずれにしても本稿は、荷重ポテンシャルを、いまだ未知ではあるが、脳内の神経回路によって担われている回路現象として仮定するのであり、オカルトの実体でも宗教的神秘的概念でもないことを、敢えて強調しておきたい。

なお、この荷重は、個体の外部に対しては、誰でも知っている快・不快・好・悪・愛・憎の表情から拳や罵声、抱擁や握手として、さらにプレゼントや呪いのワラ人形として、(より正確にはそれらを通じて)社会空間にふんだんに放出されていることも付言しておきたい。予期ポテンシャルを「意味されるもの・シニフィエ」とよべば、それらを予期させるこれらの記号要素は「意味するもの・シニフィアン」と呼ぶことができよう。望ましいデキゴト(幸)を予期させる(というよりも、そのような予期ポテンシャルを起動する)記号が吉兆であり、負のデキゴト(禍)の予期ポテンシャルを起動する記号的入力凶兆と呼ばれるシニフィアンである。

幸にせよ禍にせよ最大級のデキゴトをもたらしうると信じられてきた他者がシニフィアン-神であり、その最強の予期ポテンシャルが神のシニフィエ、つまり内容そのものであった。さらに付言すれば、われわれ資本主義社会における予期ポテンシャルは「貨幣」によって繋われる「信用」である。崇めてやまない預金・資産(といっても今日ではコンピューター内のデジタルパターンにすぎない)はなにか慶事(=幸と福)のシニフィアンであり、借金や負債は何か凶事のシニフィアンとして、あまねく(インフレ国をのぞいて)信頼・信仰されている。

8.2.2 変換チャート

トリオンの動作パターンは、A、B、C 3 項のあいだの荷重関係がPかNかでPPP、PNP、PNN、PPN、NPN、NPP、NNP、NNNの8つの類型を区別できる⁸⁾。それらのパターン・シフトの構造を論理的に整理したものが図8.4aトリオンのシフトダイヤグラムである。右回りに上から1PNP、2PNN、3PPN、4NPN、5NPP、6NNPの順に配列してある。手前の中心がPPP、奥の方がNNNである。変換を問題とするときは六角形として議論することが多いので、番号をそのように付した。

PあるいはNどれかひとつの動作を変更することで互いに隣接するパターンへシフトしていき、どこから出発しても最後はまた出発点にもどる。ひとつおいた隣のパターンどうしは、NもしくはPの個数が同じで、すぐあとで見るように動作特性に共通性がある。対角線に位置するトリオンは、正負の符号がちょうど逆転した対称的なパターンであり、関係における文字通り「反対」の世界をあらわしている。3者関係における感情の演算を制御する基本的な変換の構造を視覚化したモデルである。

図8.4aは8つのパターンのシフトダイヤグラムである。外の六角形に位置するトリオンは互いに隣接するトリオンへワンアクションで順にシフトすることができ、6回目の変換で一巡する。頂点PPPは、1のPNP、3のPPN、5のNPPのいずれかのパターンへワンアクションでシフトする。これに対しNNNは、2のPNN、4のNPN、6のNNPと連続である。

図8.4b、cは頂点を中心に、シフト可能なパターンを経路ごと四面体として切り出したものである。図8.4bのNNN以外の3つのトリオンはNが2個(偶数)で動作が安定している。図8.4cは中心のPPPをのぞいてNが1個(奇数)で不安定となる。

8) これらは荷重動作が双方向に対称性をもつと仮定した分類であるが、さらにその荷重動作の向きを区別すると全部で2の6乗で64通り区別できる。さらにどれを入力としどれを最終出力にするか、という動作順序を区別すると、少なくとも384通りのパターンが発生する。これにそれぞれ2者のあいだの優劣関係を入れると、さらに3072という膨大なパターンが生成する。今回は自己帰還をモデルに組み込めなかったが、それを入れるとさらに24576とおりの3項関係が生まれることになり、これは現実の人間関係の複雑さに見合う数字である、といえよう。しかし、その場合の数は明らかに思考の容量を越えており、何らかの圧縮が必要である。このダイヤグラムは必要な単純さと論理性を与えるための試みである。

図 8.4a トリオンのダイヤグラム

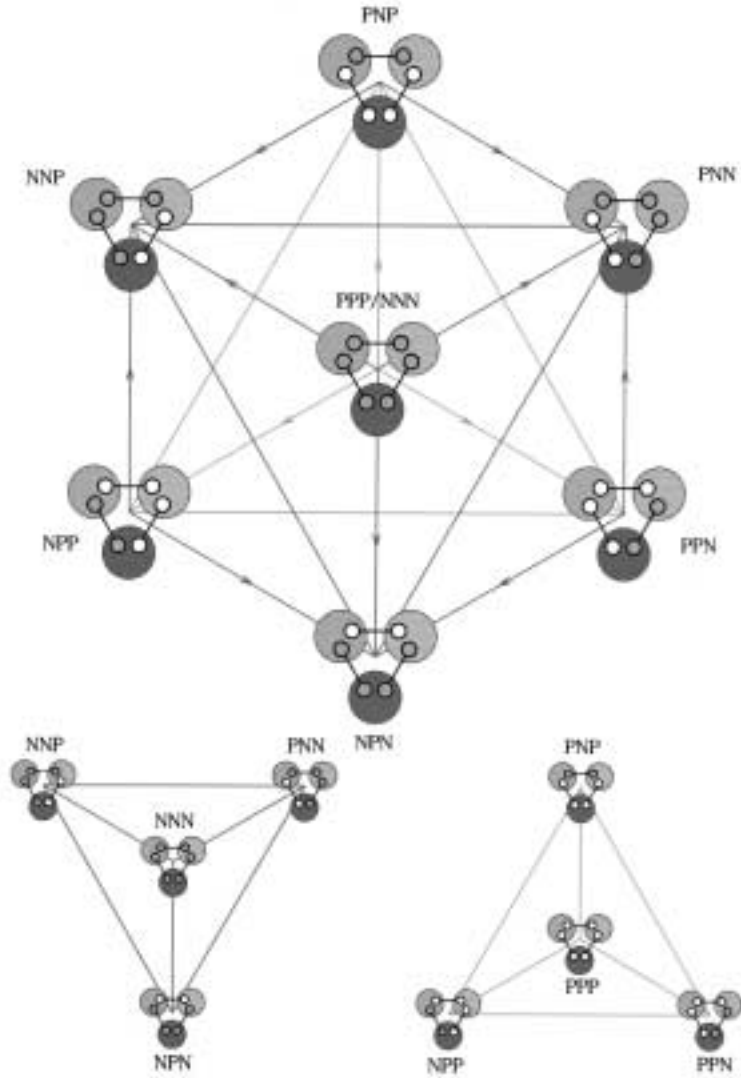


図 8.4b 安定トリオン

図 8.4c 不安定トリオン

8.2.3 トリオン安定

トリオンのチャンネルに入力された予期ポテンシャルは、媒介となる回路結合が正か負かによって、ほぼ自動的な変換をうける、と考えられる。負の方向への荷重変化の反対動作は、正の方向への変化である。したがって、正のN変換は負であり、その負をさらにN変換した荷重は正に転換する。たとえば、図8.3において、AとBの間がネガティブ(N:A B)で、BとCの関係がネガティブ(N:B C)ならば、トリオンの自律動作にゆだねるかぎり、AとCの間にはポジティブな予期ポテンシャルが発生する(P:A C)と仮定できる。マイナス×マイナスはプラスであり、プラス×マイナスあるいはマイナス×プラスはふたたびマイナスとなるからである。

この際、トリオンはループにNが2つ(偶数個)あるとき、備給動作が安定する、と大胆に仮定しよう。逆に、Nが奇数個のときはトリオンによる表象備給は安定しない、と考えられる。この単純極まりない変換法則は、トリオン・パターンの演算を、したがって3者関係の力学を支配する核心的仮説である。

安定ループは同一の荷重備給を保存する。はじめにP:A Bであったとすれば、ループを一巡したポテンシャルは、ふたたび時間をくりぬけて同一の状態P:A Bへ回帰する。つまり、一巡すると同一の対象に同一符号の荷重動作がふたたび振り向けられる。PなりNなりの荷重(予期ポテンシャル)が、ループのなかを正負反転して巡りながらふたたび同一の定性的状態へ回帰する、と考えられる。

逆に、一巡したあとに、荷重値が正から負へ、ポジティブからネガティブへ変わったとすると大変である。信頼が不信へと反転するからだ。トリオンが回るたびに、備給が反転し、意識に混乱が発生する⁹⁾。たとえば、Cに対するはじめの「好き」Pが、ループが一巡することで「嫌い」Nになる。「愛」が「憎悪」に反転するのである。想いをめぐらせてループを回転させるたびに予期が正負逆転するので、他者に対する態度もアンビヴァレントで、関係自体も不安定なものにならざるをえないだろう。

9) たとえばABC3人の同僚がいるとして、BとCの仲が悪いが、AとB、そしてCとAは仲よしという3人組の関係は不安定である。BとCが仲なおりしてみんな仲よしPPPになるか、それともAがBの側についてCと対立するPNNか、あるいはCと友好を深めてBと気まずくなるNNPか、いずれかの状態へ結果的にシフトしていく可能性がたかい。そして、いったんNがふたつになった関係はちょうどポテンシャルの穴に落ち込んだかのように安定する。3者関係は、結局そのような「バランスのとれた」関係にたどりつく傾向がある、つまりそのように動かす力が働いていることを洞察し、社会心理学の理論的・経験的研究に主題化したのがF. ハイダーである(注10)。

これに対し、ふたつの否定結合で結ばれた3項変換回路は、ループを一巡すると同定の定性的な状態へ回帰する。回帰するループは変換に対して同一性を獲得し、表象備給が正負どちらかに安定する。たとえばソシオンAのサブスペース上でつくられるNNPのトリオンでは、B、C、Aに対する予期ポテンシャルは、循環に対してそれぞれに対する正負の符号を変えない。意識の志向が感情をともなって A^a から B^a へ、 B^a から C^a へ、そして C^a から A^a へと巡るとき、それぞれの好き嫌いや信-不信が変わらない。はじめがNで嫌いならば、なんと考えなおしてもやっぱりNで嫌い、いや、ますます嫌いになるだろう。むしろ、予期が同一状態へ回帰することで、「なるほど!」「やはりそうだったのか」、という着着や納得感つまり信憑性を獲得する、と考えられる。荷重ループが回転すればするほど備給が強化されて、表象のリアリティが自明化するのである。

こうして安定ループのトリオンでは、2辺の正負が決まると、もうひとつの辺の正負も自動的に決まってくる。NNP、PNN、NPNと、もうひとつPPPの4種類のトリオン回路では、それぞれの対象に対する好き嫌いやNかどどちらかの感情が、同一のまま変わらず保存される。むしろ時間のなかで強化されていく、と考えられる。まさにF. ハイダー¹⁰⁾のいうとおり3者関係における「等終局性 (equifinality)」が実現する、つまりトリオンの力学が働いて同一の最終状態へ到達するのである。人間関係が、脳内部のある3項回路の動作の結果として、本人の意志や希望を超えたところで、あるひとつの関係パターンへとまわっていき可能性をこの仮説は物語っている、といえよう。

10) 3者関係の重要性は、人間科学のバイオニアたちによって早くから注目されてきた。スピノザの卓抜な議論をはじめ、社会学ではG. ジンメル、心理学ではS. フロイトの「エディプス複合」や、K. レヴィンの「場の理論」、少し下ってR. ジラールの欲望の三角形の議論など、枚挙に暇が無いほどである。それらの学説史的検討はまた別に十分な準備と精密な知性による慎重な探求を必要とし、荒削りながら一貫した理論の骨組みをつくることを目的とする本稿の課題ではない。

ただ、もっとも多くを負うものは、「バランス理論」として知られるF. ハイダーの議論 (1958 = 1978) であり、発想であったことはここに断わっておくべきであろう。F. ハイダーは、3者関係は、Nは2個あるとき結果的に安定する、という問題の理論的重要性に正確な洞察をもった稀有な人間科学者であった。彼は、3人関係を人間関係の基本的なユニットと考え、それぞれ相手に対する正負 (好悪) の2値のベクトルをあたえることによって3者関係のパターンを論理的に分類した。そして、それぞれの2者関係のうち、2つが負であるばあいに、3者の関係はある種の安定状態 (「等終局性」) を達成する、と考えた。マイナス (つまり仲の悪い対立関係) が2個あるときに、3人関係は最終的にバランスのとれた安定状態に至る、つまりそれ以上変化しない同一の等しい結果に到達する、というハイダーの着眼は、人間のネットワークがもつシステムダイナミクスを考える上で、極めて重要な洞察であり発見であったといわなければならない。彼は、3項関係における「推移性」や「誘導性」についてもすでに議論している。後に展開する本稿の「循環型」「誘導型」のトリオン動作に相当するものであるが、トリオンとよぶ明確な回路ユニットの動作としてまでは推定しきれなかったように思われる。(ちなみにバランス理論における「ユニット」はプラス結合した2項関係である。) 本稿は、「ユニット」ははじめから脳内において3項回路として構成されている、と仮定することによって、果たしてどのような推論と説明の地平が開かれるか、その可能性を偵察する試みにすぎない。

8.2.4 感情の演算

Nが1個のトリオンループでは、A、B、Cのそれぞれについて一周するごとに荷重符号が反転する。たとえばAがBと仲良しで($P:A-B$)、Cとも友人である($P:A-C$)としよう。このとき、もしBとCの仲がひどく悪くなったとすると($N:B-C$)、この関係をサブスペースにたたみ込んだAのトリオンPNPは、不安定となる。回路上の演算では $[P \times N-N]$ で、Pの否定Nは、否定NになってPにはならないからである。事実、仲良しのBとCが言い争うのを見たAの内部(サブスペース)では、Cにたいする不信や嫌悪など一定のN感情が発生するだろう。それにもかかわらず、AはCを個人として信頼しているとする、ダイオンからくるCに対するP感情(好感)と、トリオンからB経由で生まれるN感情(疑惑)の間で、Cにたいする荷重が正負に振動する、つまり不安定化することになる¹¹⁾。

AのCにたいする信頼の方がBにたいする信頼よりもすこしでも上回ると、このPNPループは、Nが左に移動してNNPとなるだろう。つまり今度はCがいいやつで、Bが冷たい人間におもわれてくるのである。この場合も $N \times N$ でPという安定状態にはいるわけだ。もちろん、ひとつのNもない安定状態PPPをめざしてAがBとCが仲良くするように祈ったり、世話をやいたりということも十分ありうる。

なお、後の楔のトリオンでもみるが、Bもきらい、Cも変、などといってAが友人不信に陥っているうちに、BとCが仲直りする、という事態が生まれると、これまたNPNでNが2個なので安定する。つまり、嫌いなBと嫌いなCが仲良くすることは、残念で腹立たしいが、いわば「あたりまえ」のこととして納得される。はじめからあの人たちはグルだったとか、2人とも裏切ったという風にひとりでに納得する、というよりトリオンのループの回帰によって、納得させられるのである。

以下、しばらくのあいだ、トリオンのダイナミクスについての具体的なイメージを得るために、日常から小さな思考実験を試みたい。理論的テーマにもっぱら関心のある読者は読み飛ばしていただいて結構である。

11) Nを1個もつ不安定パターンは、PNP、PPN、NPPの3つのあいだをぐるぐる不安定に回りつづけるということになりやすい。いつもだれかとだれかが仲たがいで、しかもその仲の悪い関係がころころ動いているののような関係がたまに見つけられるのは、おそらくそうした力学的事情による。

8.2.4.1 楔のトリオン

A子、Bちゃん、Cちゃんの仲良し3人組がいたとしよう。図8.5aではそれぞれの頂点に書き込まれた3つの小円からなる三角形の下の小円が本人A子のサブソシオンA^a、左上がBちゃんについてA子が構成したサブソシオンB^a、右上がおなじくA子がたたみ込んだCちゃんのサブソシオンC^aをあらわしている。

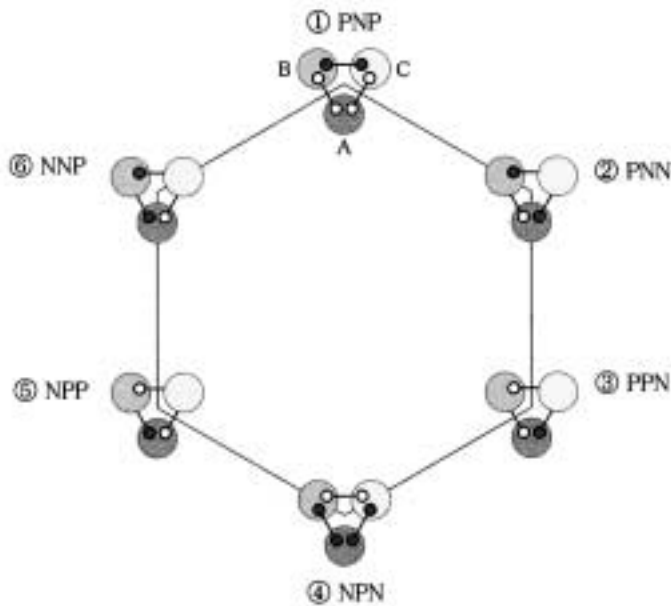


図8.5a 楔のトリオン

0) PPP : はじめA子とB子とC子の3人はとても仲良しであった。しかし、A子は、自分のいないところでBちゃんとCちゃんが仲良く遊んでいたりと、つよい不安に取りつかれる。A子は、B子もC子もそれぞれ大好きだったが (P : A B、P : A C) その分B子の友情もC子の好意も自分一身に向けてほしい (P : B A、P : C A) とおもう気持ちが出るのである。自分の大切な友人の友情が、自分に与えられるべきであるにもかかわらず、もう1人の友人のところへ行く、ということが「理不尽」に思え、「許せない！」という気がしてくるのである。この嫉妬性の感情に取りつかれてしまうと、A子は次のような行動をとるかもしれない。

1) PNP : たとえば、たまたまB子とC子の2人が仲良く遊んでいる姿をA子が目にしたと

しよう。A子は、ふたりの間に割り込んで「2人だけで遊んじゃイヤ!」というようなことを言ったり、したりする可能性がある。あるいは、ひとりひそかに、2人が「仲たがい」をすることを祈る、などということもあるかもしれない(N:B C、C B)。

2) PNN: そんなA子の意地悪におどろいたC子が、「なんで?」と不服そうに反問したりすると、A子のなかでC子に対する反感が発生する(notP:A C)。自分の意思に従わない「C子は生意気やから嫌いや!」などと思うかもしれない。一度そう思うと、トリオンのPNN論理にしたがってどんどん嫌いになる可能性がある。

A子は、Bちゃんが大好きなのに(P:A B)、その大切なB子ちゃんが自分の好きなもうひとりの友だちC子ちゃんとふたりで仲よくするのも(ダイオンの嫉妬によって)イヤだが、自分の嫌いなC子と仲良くするなどということも(トリオンの安定論理によって)あってはならないことなのである。

どっちにしても、A子は、Bちゃんのそばへ行って、「Bちゃん、C子は生意気やから遊んだらアカン!」(notP:B C)などと囁く可能性が大である。もしA子が権力をもっていれば、B子に対して「C子ちゃん、もうアンタとは絶交や!」と言いに行かせたり、なにか意地悪を「させたり」するかもしれない(N:B C)¹²⁾。

3) PPN: A子の黒い願望にもかかわらず、もしB子がC子と相変わらず仲良くしていると(P:B C) A子のなかでは、C子にたいする恨みすら発生してくる可能性がある。「私の大切なB子を盗ったあのC子が憎い!」(N:A C)というわけである。A子がこの思いを(オブジェクト・レベルの)行動で示したりすると、C子にとっては晴天の霹靂のような受難になるかもしれない。ともあれ、A子としては、Bちゃんへの好意は変わらないので、こころはいつも穏やかではない(Nがひとつのトリオンは不安定である)。

4) NPN: そのうちA子のところの中で、嫌いなC子といつまでも遊ぶのをやめないB子に対しても怒りの気持ちが湧いてくるだろう(N:A B)。そしてA子はB子にたいしても「もうアンタらとは絶交や!」と告げるかもしれない。「どうせ私は嫌われもんや、ふたりとも勝手にしたらいいやん!」といった具合に、僻んだトリオンが一個できあがる。

5) NPP: おもしろいことに、いったんBちゃんが嫌いになると、今度はCちゃんがよい子に思われてくる、ということもありそうである。昨日まで仲たがいをしていたC子のところへ遊びに行くA子を見て、「おやおやどうしたの?」とお母さんが問うのはそんな時だ。

12) 転校を経験した学生Bのレポートに次のようなものがあった。新しい学校で親しくなった友人Aを自宅に招いた。以前の学校で仲よだった友達Cのアルバムや手紙を見せた。しばらくしたら自分Bが差し出し人になっている旧友Cに宛てた悪意にみちた絶交の手紙が宛先不明でBの家のポストにもどってきた。AがBを装ってCあてに悪意の二セ手紙を秘かに投函したのである。

子ども心にそんな揺れをもたらすのは、トリオンの演算によるパターンシフトなのである¹³⁾。

6) NNP: ここですこし意地悪が混じると、今日からはアンタが親友や、とC子に宣言したA子は、「Bちゃんと遊んだらあかん！」とやはり不安を表明するかもしれない。この「黒い祈り」は、「お願いだから遊ばんといて！」というかわいい依頼から、「もう遊ばな！」という命令、さらにこれにある種のよこしまさが加わると、「Bは嫌な子や」とか「Bがアンタの悪口いうとったよ」(N: B C) といったたぐいの悪口・中傷へと発展するだろう¹⁴⁾。

以上は、トリオンのP結合に対して仲を引き裂くようにはたらく楔(クサビ)型のトリオン動作である。ダイオンの正の双結合が十分に形成されていない場合、嫉妬とよばれるこの種のオペレーションに捉えられる可能性が高くなると思われる。

8.2.4.2 鋸のトリオン

この節では、仲の悪い夫婦とその子どものトライアドを考えてみよう。図はケンカばかりしている両親のあいだで板ばさみになりながらカスガイの役割を果たしているけなげな子どものトリオンである。

0) PPP: A太はお母さんBが大好きである(P: A B)。お父さんも尊敬している(P: A C)。ふたりとも仲好しの夫婦である(P: B C、C B)。

1) PNP: なのに、ある夜怒鳴り声に目覚めたら、ふたりが言い争いをしている(N: B C、C B)。A太は、お父さんもお母さんもやめて！と泣きながら間に入るかもしれない。大好きなふたりにはいつまでも仲良しでいてほしい(P: B C、C B)からである¹⁵⁾。

13) PNNからNNPへのシフトは、いうまでもなく「裏切り」であるが、ある日ある夜突然「天啓」(というより「悪魔の囁き」というべきだろう)のようにひらめくのではないだろうか。それはネットワーク自体が可能な安定解を意識へ投射するのもかもしれない。もうひとつの安定解であるNPNへのシフトも同様に起こりそうである。ダイヤグラムの中のシフトはそれ自体の自己励起的な無意識の運動であり、その運動の結果としての解が意識へ送り出されるのかもしれない。

14) 他者の自由に対する不安が、疑心暗鬼をよび、この疑心暗鬼がネクロンと権力の発動をもたらす。意地悪を生み出すのは不可能な愛への渴望であることが多い。ちなみに、そのような邪悪なトリオン動作に馴染みすぎると、仲のいい人を見るとき一方で他方の悪口をいい、他方で一方の陰口をたたき、という信用できない人間になるリスクが発生する。本人としては、NNP PNN NNPの振動にとらわれやすいだけで、Bは信用できん、とCはひどいヤツだ、というふたつのトリオン動作の間で振り回されているのかもしれない。

15) お父さんとお母さんのことなのよ、あなたには関係ないんだから、あっちへ行って黙って寝なさい! などというのは勝手な親の無理解か、「個人主義」の倒錯である。おさない子どもの世界=サブワールドでは、3人はそれぞれ「個人」などではない。浜口恵俊の用語を借りれば「間人」(浜口恵俊 1977)である。それぞれの関係はトリオンとして一体のユニット・ループをつくっているからだ。そのループに生まれたひとつのN動作がこどもの小さな胸を痛めさせるのである。

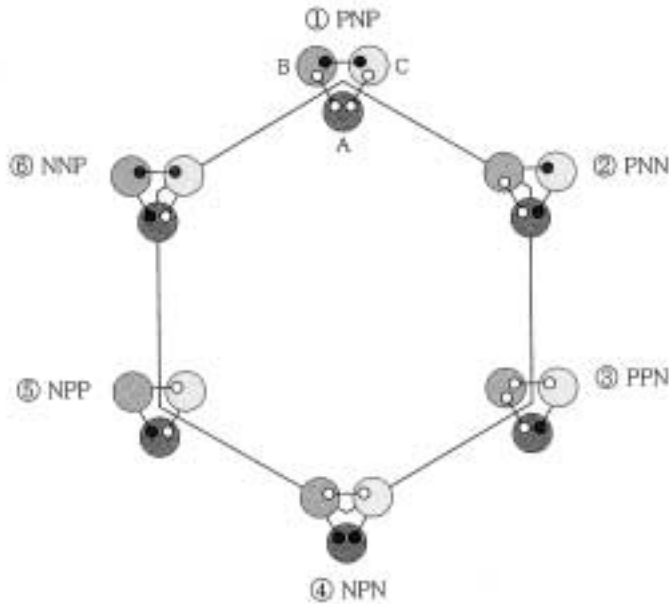


図 8.5b 鋸のトリオン

2) PNN: 自分の懇願にもかかわらず母を罵ったり殴ったりするのをやめない父にたいしてA太はつよい反感を覚えるだろう (N: A C)。「大切なお母さん (P: A B) を虐めるお父さん (N: C B) なんか大嫌い (N: A C) !」ということで、ふとんをかぶったA太の頭の中では、PNNのトリオンループが高速で回転するだろう。

3) PPN: 翌日の朝、けなげに笑顔でお父さんを送り出すお母さん (P: B C) をみたA太には、お父さんに対する嫌悪感だけが残るかもしれない (N: A C)。なお、この嫌悪感是一種の不協和音のように残響するだろう (Nが一個のループは安定しない!)。

4) NPN: あるいはA太のなかに、母親にたいする不信感が芽生えてくることもあるかもしれない。「あんな父親とどうしてむつまじそうにできるのか信じられない(notP: A B) お母さんなんかもう嫌いだ (N: A B) ふたりで勝手にしたらいいんだ (P: B C、C B)」というわけである。

5) NPP: お父さんにももっともな理由がある (P: A C) と思えるような場合には、お母さんのわがままがいけないんだ (N: A B) と思われてくるかもしれない。

6) NNP: あるいは、両親の仲が相変わらずで、ふたりは口もきかないとしよう。見方し

だいで、母は父に冷たすぎる(N:B C)、ふたりがうまく行かないのはお母さんのせいだ、と覚えてくることもあるだろう。そうすると、母の理解を求めて得られないお父さんがかわいそう、と父へ同情(P:A C)が生まれてくる可能性がある。

以上、仲の悪い両親のもとで小さな胸を痛めるやさしい子どものトリオン動作について考えてみた。あくまで例示として考えられるシナリオに過ぎないが、それでも1人の人間の心のなかで、実際にトリオンと呼ぶ3人関係が身をもって生きられる、ということは理解いただけたものとおもう。私は私、アナタはアナタという「個人主義」の考え方は、このトリオンを無理やりに「割り切る」ことによって初めて可能になるひとつの文化的な達成であり、装置であると考えべきであろう。

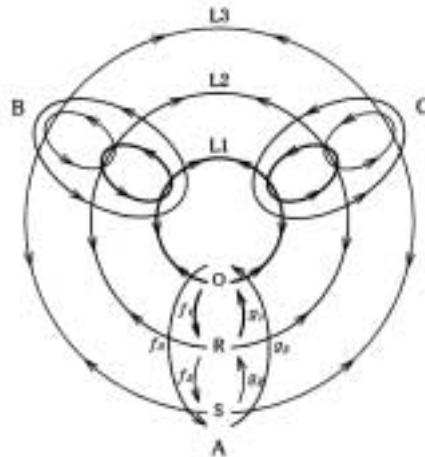
8.2.5 ソシオン変換

次章からトリオンのひとつひとつの動作についての思考実験にはいる。その前に、ソシオンのネットワークとその動作について基本概念をまとめておこう。

ソシオンは自他の行為にたいしてオブジェクトレベルで連結されることで、社会的な生活を営む。援助や救援といったポジティブな出力による正の連結と、収奪や襲撃のようなネガティブな出力による負の連結が可能である。ソシオンは、ある自由度のもとで他のソシオンにたいして一定の行為を選択的に出力する。ソシオンは、他者が自己にたいしてどのような種類の行為を出力しうるか、その可能性についての「予期」を形成する。この予期のポテンシャル量を荷重とよぶ。荷重は、正負のデキゴトにたいする期待値を含む一種の情報量であり、強さとプラス マイナスの分極性をもつ。正の荷重はなにかよいデキゴトへの予期であり、一般に希望や期待をもたらす。負の荷重はなにかわるいデキゴトへの予期であり、不安や恐怖を生む。

予期と予期がそれなりの対応を形成しながら一定の選択性のもとで互いに調整されることで、ソシオンの社会的な連結のありかたが相互選択的に制御される。予期の調整はサブレベルあるいはメタレベルの荷重コミュニケーションによって、社会連結はオブジェクトレベルの資源の交換や行為の結合によって行われる。ソシオンは、主体の選択的な荷重動作によって自他の資源と行為を再帰的にたたみ込みながら、サブおよびメタレベルの記号空間とオブジェクトレベルの資源空間をいわば垂直に往還し、しかもそれらを交換とコミュニケーションによっていわば多元多層に連結することによって、社会とよばれる複合シ

システムをひとつの生きた構造としてダイナミックに編み上げていく¹⁶⁾。図 8.6 はソシオンの「多重くり込み変換」の簡単な概念図である。



L1	オブジェクト・レベル (Organism 生体)	f_1	L1	L2	1 次のかくり込み変換
L2	サブ・レベル (Representation 表象)	f_2	L2	L3	2 次のかくり込み変換
L3	メタ・レベル (Symbol 記号)	g_1	L2	L1	1 次のかくり出し変換
		g_2	L3	L2	2 次のかくり出し変換

図 8.6 ソシオン変換

メタレベル、サブレベルのコミュニケーション・ループで超個体的に連結されたA、B、C3個のソシオンが、それぞれオブジェクト・レベルからサブ、メタレベルへ<くり込み変換>を、逆方向に<くり出し変換>を行いながら、再帰的にシステムを自己組織化するトライアッドの様子を示している。各ソシオンは、L1身体、L2感情、L3思考を個別に回帰制御しながら、それぞれの階層で他のソシオンと超個体的に連結された情報と資源の循環系を構成している。なお、 g_3 : L1 L3は合理的な「認識」、 f_3 : L3 L1は貨幣など抽象的な「記号」から行動への<くり出し変換>と考えられる。

16) メタ/サブレベルのコミュニケーションによって超個体的に連結されたサブネットワークによって、オブジェクトレベルの物質エネルギー的資源の連関が社会的に制御される、この「くり込み くり出し変換」の運動総体を、集合的に「ソシオン変換」(ニックネームを、カオスを生成する「パイコネ変換」に因んで「もちつき変換」とよぶことにしたい。「文化」は主にメタ/サブレベルに属する記号-情報現象の共有可能なシステムであり、「文明」はオブレベルに属している物質・エネルギー的資源と技術の総体である。メタレベルとオブレベルのあいだを往還する情報-資源処理の回帰動作によって、社会システムが自己を多重に組織化していくこの「ソシオン変換」の発想は、吉田民人の「情報資源処理パラダイム」とくに複合主体による社会システムの情報の制御という捉え方(吉田民人 1967, 1991)に多くを負っている。

8.3 パターンの構成

8.3.1 動作の次元

まず、3項関係のかたちを思考の俎上にのせられるようにトリオンの次元を整理しよう。もっとも基本的な次元は、荷重動作がP：ポジティブか、N：ネガティブかである。8つのパターンが生成され、そのシフト構造は8面体のダイアグラムで記述できた。そのうちNをもたないPPPと、Nを2個もつPNN、NNP、NPNの全部で4つのパターンがループ変換に対して安定であった。ここでは、4つの安定トリオンの動作方向と動作順序に注目してさらに類型論を拡大する。

サブソシオン A^a を中心に、 B^a を左上に、 C^a を右上に配置したAのトリオンをモデルに考える。トリオンはAB、BC、ACの間がたがいにP結合かN結合かによって基本的に区別される。

それぞれの関係は、荷重動作についてそれぞれ2つの指向性をもつ。 $A \rightarrow B$ 、 $B \rightarrow A$ ； $B \rightarrow C$ 、 $C \rightarrow B$ ； $A \rightarrow C$ 、 $C \rightarrow A$ の動作方向の組み合わせによって8つのトリオンの回路パターンが生まれる。

自己であるAからみて、ABとACの関係が能動か受動かに注目すると、1．AB能動 AC能動、2．AB受動 AC能動、3．AB能動 AC受動、4．AB受動 AC受動の4つのパターンに分類できる。とりあえず、BC関係は双方向的として向きを区別しない。能動をs、受動をrと表わそう¹⁷⁾。

P/N × s/rで構成したトリオンのパターンマトリックスが図8.7である。P/Nの結合様式を上からPPP、PNN、NNP、NPNの順で配列し、s-r、能動 受動による区別を左の列から順にタテのコラムに配列した。

17) 能動送り出し型の接合部をセンドーsenderとよび、頭文字sをとってたとえば Ps と表わそう。受動受け取り型の接合部はいわばソシオンの荷重結合のレセプターreceptorに相当する。頭文字のrをとってたとえば Nr と表記する。荷重の正・負(P/N)に動作の能動・受動(s-r)の軸をくみあわせて表現すると、たとえば、能動型P結合は Ps と簡潔に表記され、正の荷重(ポジオン)が送り出されていることを示すことができる。受動型N結合は Nr と表記でき、負の荷重(ネクロン)が他者(のサブソシオン)から振り込まれている、ことを示すことができる。もちろん、神経細胞のシナプスのように実際に何か伝達物質のようなものが放出されたり受容されたりしているわけではないことはいうまでもない。思考を促進するための記述のスタイルと受け取っていただきたい。

なお、この図8.7では、他者Bと他者Cの関係は双方向的と考えて区別しないが、次節の拡張マトリックスではその方向が区別される。表記としては $B \rightarrow C$ は無記、 $C \rightarrow B$ については \leftarrow を付して区別するが、特に必要が無い限り省略する。

		S - S (A→B)-(A→C)	Γ - S (B→A)-(A→C)	S - Γ (A→B)-(C→A)	Γ - Γ (B→A)-(C→A)
PPP	J H Y				
PNN	J H Y				
NNP	J H Y				
NPN	J H Y				

図 8.7 トリオンの基本類型

基本トリオンにおいて、ABの関係をはじめにACの関係を最後に表記することになると、たとえばABが能動P結合でACが受動N結合のトリオンをPsNrと表わすことができる。PsNrのトリオンでは、ソシオンAが、サブスペースの中でA^aからB^aへポジオンとよぶプラスの荷重、つまり愛情や信頼を送り出し、C^aからはネクロンの負の荷重を送られている、つまり嫌悪や不信感を受動的に感じとっていることになる。

各欄に記号表記を付したトリオグラフを記載した。なお、それぞれの結合類型は、すぐ後でふれる動作順序の違いによって、循環型J、反射型H、誘導型Yに区別される。左隅にJ、H、Yの記号があるのはその記載である。

以下しばらくの間、能動 受動 (s-r) 別の分類軸にそってPPPを中心にもうすこし具体的に検討してみよう。

1) s-s

はじめは、AB能動AC能動のトリオン動作パターンである。PPPタイプでは、AからBへのポジティブな微小荷重 (ポジオン、posion) を「送り出し」(sender) AからCへもおなじくポジオンを「送り出す」ので、PsPs (Posion-sender=Posion-sender) 型と略称する。グラフ表示のトリオンでは、Aの内部から矢印つきの小さな円体がBに向かってのびている。式でP: A Bとも記述する。Cに対しても同様に正の微小荷重をしめす白抜きの小円がAの内部から送り出されている。s-sタイプのトリオンを1列目のコラムに配列する。1行目が、このPsPs型である。2、3、4行目が順に、PsNs、NsPs、NsNsに対応する。

2) r-s

AB間の関係が逆向きになるパターンr-s型を第2列目に配置する。ABの間がAにとって受動 (P: B A) で、AC間と同じ能動 (P: A C) である。トリオンのグラフでは、Bの内部からAにのびるベクトルによってAにとっての荷重入力の受動性を表わしてある。記号PrPsの表記rはreceptorのrである。この第2列のトリオンPrPsとはじめの第1列のトリオンPsPsは、ともに、Cに対して能動的なP動作を出力する、という点で共通しており、他者にポジオンを送りだす愛のトリオン (posion-sender) といえる。

3) s-r

3つ目の類型として、ABは能動だが、反対にACが受動になるパターンが考えられる。Cからポジティブな荷重を送られる (P: C A) つまり受け取る (receive) ので、PsPr (Posion-sender = Posion-receptor) と表記する。Cから愛を送られて、Cの友人であるAに愛を送りだす、という変換パターンである。このタイプをトリオンマト (トリオンの配列表トリオン・マトリックスの略) の3列目に配列する。Nrならば、ネクロン・レセプター (necron-receptor) となる。

4) r-r

最後4つめの類型は、AB受動、ACも受動のタイプである。PPPトリオンでは、Bからポ

ジオンを送られ、その友人のCからもポジオンを送られる、というタイプ、正確には送られることを予期あるいは期待するタイプである。どちらからも送られるのでPrPrの表記となる。3列目PsPrと4列目PrPrは、どちらもトリオン変換の最終出力として他者Cから受動的に愛されることを予期する、という点で共通しており、他者Cからの愛や救援を期待するいわば甘えたトリオンである。NPNタイプのNrNrならば、どちらからも負をふり込まれる迫害のトリオンとなる。

これらPsPs、PrPs、PsPr、PrPrの4つのタイプのトリオンは、それぞれ他者と構成したループの記憶がP/N・能/受4種類の荷重として内蔵されたものである、と見ることができ(18)。他者と関係することで体験したデキゴトの記憶が、ちょうどシナプス荷重のように学習されて、他者との接合面つまり他者の表象に備給され、この荷重が類似の場面や表象の再現に際して正負強弱の「予期」を能動的あるいは受動的なかたちで起ち上げる、と考えられる。トリオンとは、3者関係のダイナミックな関係を、表象と荷重の3項関係にたたみ込んだ関係の記憶装置であり、この記憶を予期として他者との接合面に投射する一種

18) ソシオマトのタテの系列で表されるこれらの類型は、ネットワークのなかで「刷り込みimprinting」をうけつつ形成したヒトの対人関係のダイナミックなパターンを表わしており、それぞれ陰/陽と能動/受動に関する性格類型に対応している、と見ることでもできる。

PPPトリオンのタイプ1PsPsは、たとえば、皆にポジオンを放射する元気のある陽性能動タイプ、2PrPsはポジオンをもらおうとあげるきっちり型の互酬性タイプ、3PsPrはあげたらもらうことを期待するしっかりタイプ、4PrPrはもらってもらっちゃっかり貪欲タイプである。2PrPsと3PsPrはよく知られた「互酬性reciprocity」の規範を担うタイプで、ダイアッドの互酬性原理の延長による社会的性格として交換理論的に理解しやすい。1と4はすこし交換理論ではあつかいにくい、しかし社会に遍在する重要な性格パターンである。たとえば、1PsPsが無償の献身ボランティア型、4PrPrが「甘え」(土居健郎 M.バリオの「受身的対象愛」)主導の対人依存型である。ついでながら、この両者がいっしょになると、それはそれでループのバランスがとれるのかもしれない。

これらセンター/レセプターによるトリオンの分類は、次節以降で検討するPNN、NNP、NPNの各トリオンについて同様に適用される。PNNトリオンでは、Bとのあいだにポジティブな微小荷重・ポジオンが授受され、Cとのあいだでネガティブな荷重・ネクロンがやりとりされる。同じように、1PsNs、2PrNs、3PsNr、4PrNrの4タイプがある。NNPでは、授受される交換荷重子ソシオトロン(の種類がBとCでPN反対になり、1NsPs、2NrPs、3NsPr、4NrPrの4種類の類型を区別できる。NPNでは、AはB、Cどちらにも負の荷重ネクロンをふり込みあるいはふり込まれる。この全否定型トリオンは、1NsNs、2NrNs、3NsNr、4NrNrの4タイプである。

それぞれは独特の対人的態度と対応しており性格分類学として興味深い。簡略に例をあげておこう。わかりやすさのためにBとCは仇どうして敵対しているものとする。PNNとNNPのBC間のN=否定関係で、AにとってBとCは友とその敵、あるいはその逆となる。

PNNトリオンのタイプ1PsNsは、友あるいは正義や真理を愛してその敵悪を攻撃する闘士型、2PrNsは味方に愛を贈られて敵を攻撃に出かける受動激励型の攻撃者、3PsNrは誰かを愛してその敵から攻撃をうける能動受難型、4PrNrは誰かから愛されてその敵から攻撃をうける純粋受難型、である。

NNPトリオンに移って、1NsPsはまず敵を攻撃して味方に愛をおくる突撃型、2NrPsは敵の攻撃をうけて友に愛を贈る防衛と信型、NsPrは敵を攻撃して味方から愛される武勲褒賞型、NrPrは敵の攻撃をうけて味方の救援を求める依存防衛型である。

NPNはすこしパターンが変わって、BとCの間がP結合となる。これはAからみると結託である。2のNrNsと3のNsNrは負の互酬性で、NrNsはやられたらやり返すタイプ、3NsNrはやっつけてやり返されるタイプである。1のNsNsは八つ当たりの攻撃者、4NrNrは受難の生贄タイプである。

この4つのタイプは、ソシオンがそれなりのネットワークのループのなかで荷重結合を反復することで、その動作に一定のレディネス、関係における反応のしやすさのようなものが蓄積されたもの、と考えられる。ループの記憶でも呼ぶべきこの荷重特性は、新しい対人的な相互作用場面において、記憶した過去のループをより容易に反復再現するように働くと考えられる。つまりこれらの16のパターンは、3者関係における対人結合様式、性格特性を示している、と動くことができる。

この種の社会的結合特性、ソシオン特性とでもよぶべき社会連結の動作特性は、子どもひとりひとりの性格をはじめ、大人やその集団、さらに国家のようなソシオンにも、観察できそうである。精密な類型構成は後の課題に残して、本文にもどらう。

のプロジェクターであるといっている。それは、関係のなかで他者の出方を予期し、接合に先駆けて自己の対応を起動するための認知・感情的な回路構成体であり、無意識のレベルも含んで他者を把捉し他者に対応するための基幹ソフトである。

8.3.2 順序による拡張

PPP、PNN、NNP、NPN 4つの安定トリオンでは、これが本稿の基幹仮説であるが、AB、BC、ACの3つの関係（グラフでは左辺、対辺、右辺の3つの辺）のうち、2辺の入力の正負が決まると、トリオンのループ全体でNが2個もしくはPが3個となるように最後の1辺の正負が決まる（ $P \times P$ P、 $P \times N$ N、 $N \times P$ N、 $N \times N$ P）。さらに、初期条件となる入力と、ターゲットとなる予期出力を固定することによって、3つの動作類型を構成することができる。

はじめのタイプJは前提となる第1入力が左辺のAB、媒介条件となる第2入力がBC、最終の予期出力が右辺のACという動作順序をもつトリオンである。左から一巡するので循環型とよぼう。トリオグラフでは、この動作順序を、まずはじめの前提となる入力を白抜きの矢印線で、媒介条件となる第2入力を普通の矢印で、最後のターゲットとなる予期出力を太い矢印線で示してある。

ふたつめのタイプHは、はじめの入力が対辺でBC、媒介条件の第2入力がAB、第3の予期出力がJと同じく右辺のACである。最後のタイプYは、第1入力ははじめのタイプJとおなじく左辺のAB、媒介が右辺でAC、最終出力が対辺BCとなる。前者を反射型、後者を誘導型と名づける¹⁹⁾。

図8.8aは、図8.7を動作順序について拡張したものである。1、2行目が循環型、3、4行目が反射型、5、6行目が誘導型となっている。BとCの動作方向を区別してそれぞれ上下に分割したので6行となった。以下では、これをPPP、PNN、NNP、NPNのパターン別に、順に検討していく。

J循環型は、AB、BC、ACと順に入力、条件、出力が右まわりに循環するもっとも基本的な類型である。動作順序がAB BC ACと左から右へ時間的に循環するので、循環型と名づけた。CとAの関係が、変換の結果出力されるトリオンの最終出力である。

19) 循環型、反射型、誘導型の省略記号をそれぞれローマ字の頭文字をとって、J、H、Yとし、それぞれPPPやPNNのあとにハイフンを介してPPP-J、PNN-Hのように付加して識別符合とする。Jは循環の、Hは反射の、Yは誘導のイメージを思わせなくもないので、記憶するのにも多少便利である。

H反射型は、はじめにBCの関係が固定されているとして、ABの関係が入力として与えられた場合、ACがどのような予期を出力するかを検討する。BCが負の関係で喧嘩などを行っている場合は、傍観者・ヤジ馬型のトリオンにもなる。やはり、s-s、r-s、s-r、r-rの4つのタイプがあり、それぞれがBCの向きで2つに区別されるので8つのパターンが発生する。配列は循環型に準じている。

Y誘導型は、ABが所与でACが条件として入力された場合、BとCのあいだの関係についてどのような予期が出力されるかを見るための類型である。Aから見ると、この予期はBとCという他者どうしの関係のあり方を心配したりすることになるので、誘導型と名づけた。おせっかいトリオンと考えるとわかりやすい。

8.4 トリオンのマトリックス

拡張された動作表 $4 \times 6 \times 4 = 96$ 全種類のトリオンについて、いささかアドホックになるのはお許しいただいて、わかりやすい事例を網羅的にひろって行きたい。これら演繹的に導かれた各トリオンの動作パターンに対応する具体例が果たして存在するかどうか、理論の網羅性と索出力を思考実験によって検討するのが目的である²⁰⁾。

8.4.1 PPPトリオン

まずPPPトリオンの動作パターンから始める。最初に、循環型Jを、PsPs (AB能動AC能動)、PrPs (AB受動AC能動)、PsPr (AB能動AC受動)、PrPr (AB受動AC受動)の順に検討し、その後に反射型Hの動作類型を同じ順序で説明しよう。最後に誘導型Yについて調べる。循環型Jは第1入力がAB関係、第2がBCの関係、最終出力がAC関係となるような動作順序をもつ。反射型Hは、時間順序的に第1入力がBC、第2がAB、最終の第3出力がACとなり、誘導型Yは、第1入力がAB、第2がAC、第3の最終出力が対辺のBCとなる。

20) 以下の議論は、トリオン図式の網羅性と整合性をテストするためのものであって、科学理論としての有効性と妥当性を打診する試みであるが、最終的検証を意図するものではない。ソシオン理論は、人間のネットワーク動作について科学的に考えるための思考の枠組みと概念道具の作成を目標としている。本稿はその中核を占めるであろう3項動作に関する仮説とモデルの構築を課題としている。その科学理論としての価値は、まずは第一義的に仮説の整合性と網羅性、そしてなによりもその索出的発見的機能の有無によってテストされる。本格的実証は、理論がまずは仮説としての説明力をテストされたそのあとの問題であり、それなりの準備や手続きを必要とする。説明力のない命題や理論を実証する意味などないのである。人間科学の理論図式と経験的事実のあいだにはまだ(本来というべきだろうが)かなりの距離があり、しかも両者のあいだには相互作用まで存在する。本稿は、仮説がなければ見えないような事実を拾い集めてそのつながりを薄明かりの中で見ようとする自覚的な冒険であり、いまのところそれ以上のものではない。素朴実証主義との無用な混乱を避けるために付言しておく。

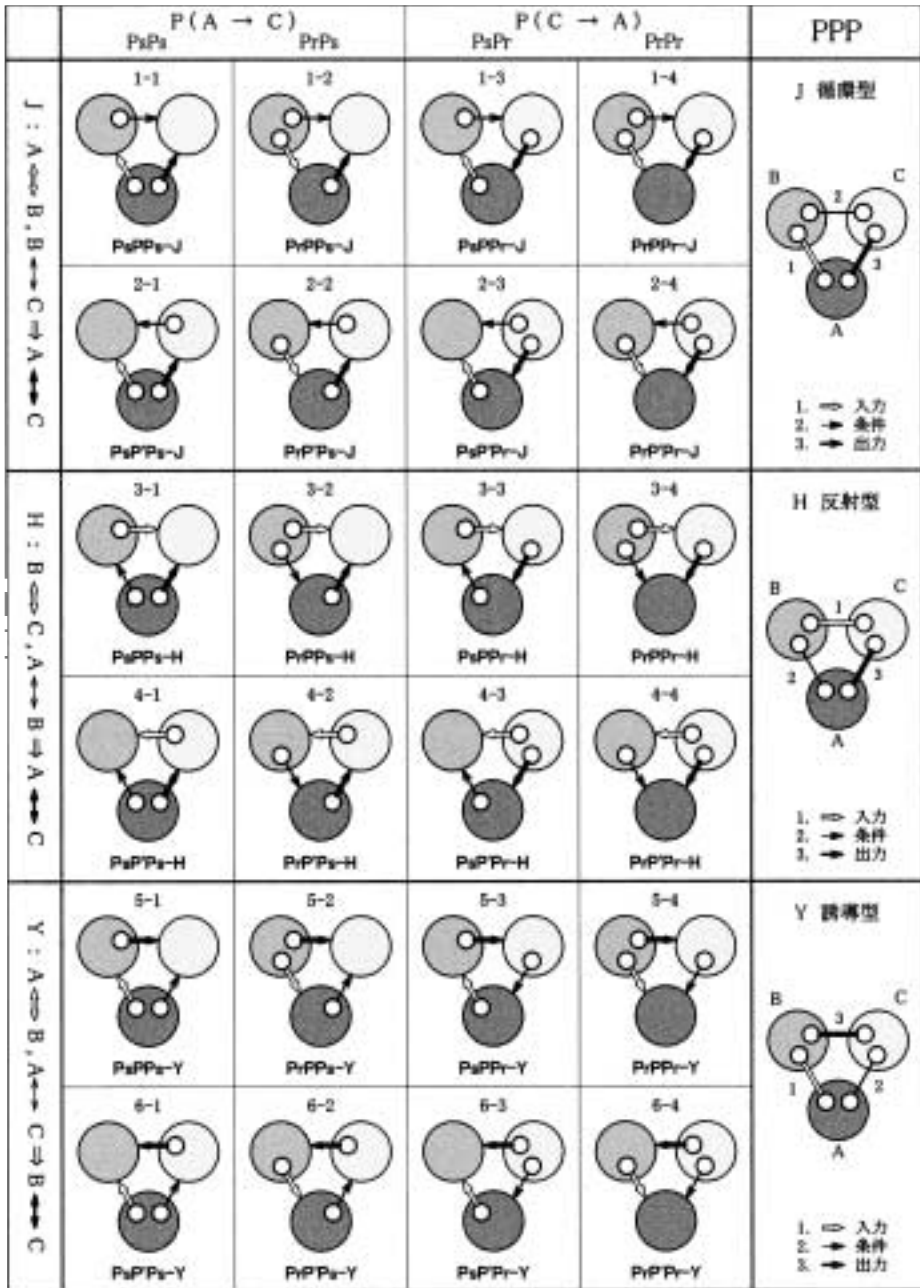


図 8.8a PPPのトリオンマット

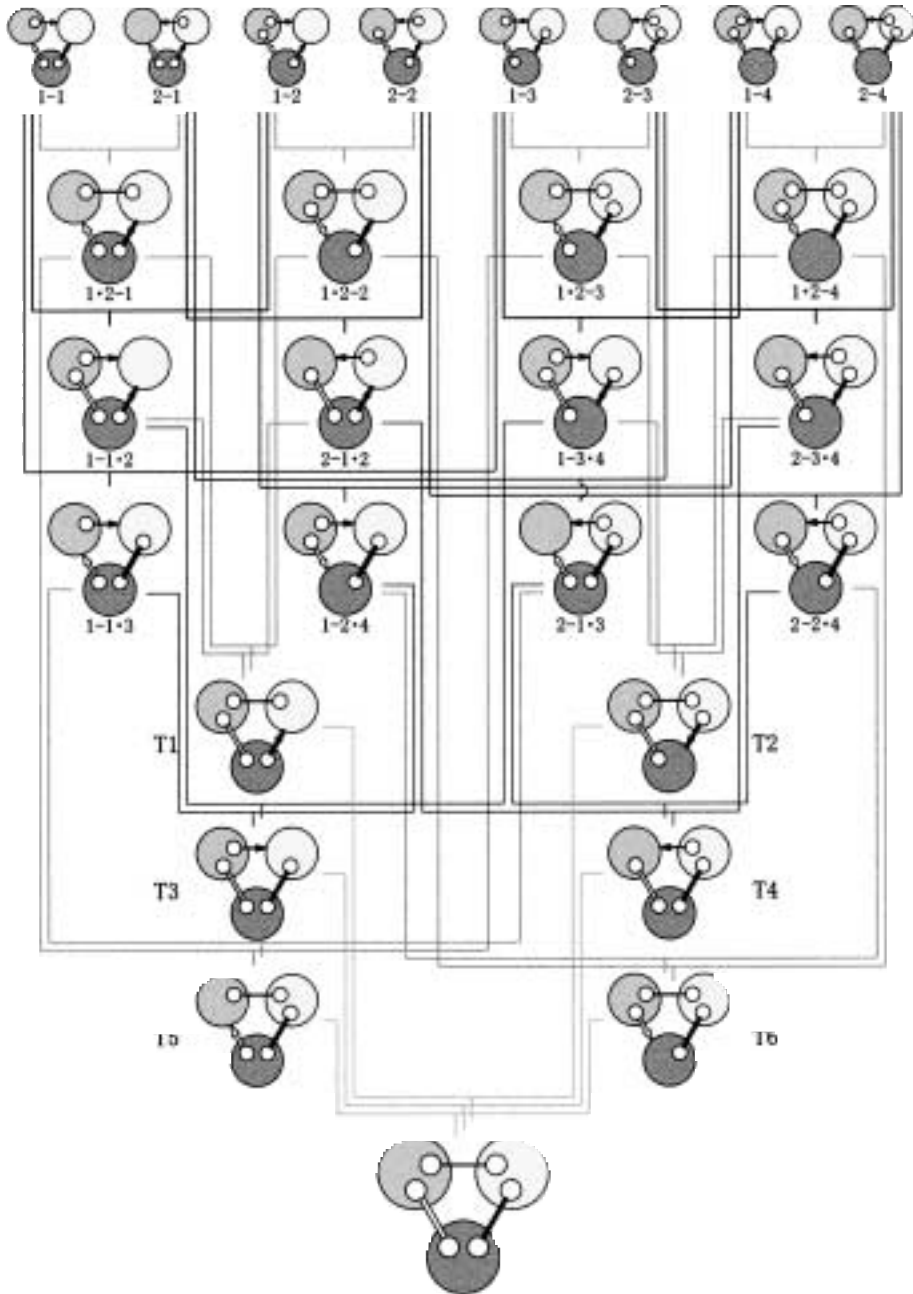


図 8.8b PPPのトリオン合成

8.4.1.1 循環型PPP-J

1 . PsPs-J

1) PPP-J.1-1 ; P : A B、P : B C P : A C



まずPPPの変換表 8.8 a左上端 1行 1列目のコラム、1-1のパターンのPPPトリオンをごらんいただきたい。このパターンは、私Aが好きなBさんがいて (P : A B)、そのBさんが好いている人Cさん (P : B C) がいると、その人Cさんを私Aは好きになる、というもっとも基本的な変換パターンである。尊敬する父が敬愛しているその父、つまり祖父には自然に尊崇の念が生まれる。大好きなお姉さんが好きだというモノやコトは私も好きになるだろう。信頼している先輩や先生が評価する人物には敬意をもってしまう。直列の媒介作用によるポジティブな荷重の転移が根底にある。なお、このトリオンの直列陽性転移が起こるためには、嫉妬(クサビのトリオンを参照)を生み出すダイアッドの干渉は排除されるか、乗り越えられている必要がある。

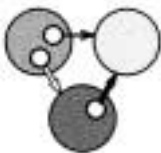
2) PPP-J.2-1 ; P : A B、P : C B P : A C



その下 2行目のパターン 2-1に移ろう。私Aが好きな人Bを好きな人Cは好き、という変換である。基本的に能動入力P : A Bと能動出力P : A Cは1-1と同じPsPs型だが、BとCのあいだの矢印つまり動作の向きがP : C Bで、1-1のP : B Cとは反対になっている点がちがいである。1-1は直列、1-2は並列になる。このサブソシオンBは自分から出力しないので、レファレントはモノやコトでもよい。ファンクラブや同好会のメンバーが仲良くなるのはこの並列変換の結果である。

2 . PrPs-J

1) PPP-J.1-2 ; P : B A、P : B C P : A C



1行目の 2列目に移る。私Aを好きな人Bが好きな人Cは好き、という変換である。このパターンでは左辺が能動から受動へ変わって、AがBからポジティブな荷重の入力Pを受けている (P : B A)。私Aに好意を寄せてくれる人Bさんがいるとき、このすばらしいBさんに可愛がられているCさん (P : B C) には、私も好感をもつ (P : A C) だろう。あるいは、お世話になった先生と同じ先生に教わった人には、同門として特別の親しみが湧いて

くる。母の惜しめない愛を注がれた兄弟姉妹の同朋愛もこの並列変換によると考えられる。ただし、ダイアッド性の「嫉妬」とらわれなければ、ということが条件である。

2) PPP-J.2-2 ; P : B A, P : C B P : A C

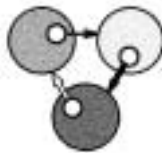


2行2列目のこのパターン2-2は、私Aを好きな人Bを好きな人Cは好き、という変換である。まずAはBからポジティブな受動入力を受け、そのBがCからP入力を受けるといふ順序である。たとえば私Aを慕ってくるBさん(P : B A)を、先輩として慕っているC君(P : C B)には、自然と好意を感じてしまう(P : A C)だろう。祖父の孫に対する愛情や、大先生の孫弟子に対する思いなども、この変換の成果が入っているであろう。

以上ふたつは、私Aが他者Bから好意を寄せられたときに、Bの友人であるCに対して好意をもってしまふ、という点で共通しており、PPPの入力受動出力能動型PrPsの並列型と直列型のふたつのサブタイプである。

3 . PsPr-J

1) PPP-J.1-3 ; P : A B, P : B C P : C A



1行3列目のパターンは、私Aが好きな人Bが好意をもっている人Cには好かれない、という変換である。1列目の1-1に近いが、トリオンの最終出力である第3辺が、Aからみて能動(Ps : 好きになる)から受動(Pr : 好かれる)に変わっている。自分Aが好意をもっている友人B(P : A B)のそのまた友人だというその人C(P : B C)にたいして、私Aはつい自分への好意や友誼を期待してしまう(P : C A)といった感情の動きはだれしも経験するだろう。先輩の先輩だということで就職のお願いなどにでかけたりするのもそのひとつかもしれない²¹⁾。

21) なお左斜め下の2-2とこの1-3はどちらも矢印がきれいな直列のループをつくって、それぞれ反対方向に一巡している。「情けは人のためならず」といふ直列の一般交換の輪ができるのは、このトリオンによってである。それは、恩や人情の時間差一般交換をしかるべき予期によって駆動する荷重エンジンの役割を果たしている、とみることができよう。

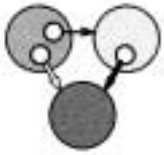
2) PPP-J.2-3 ; P : A B, P : C B P : C A



2行3列目は、私Aが好きな人Bを同じように好きな人Cに私は好かれるだろう、という変換で、PsPrの並列バージョンである。私Aが尊敬している人物B (P : A B) を同じように尊敬している人C (P : C B) からは、友情を期待できるかもしれない、できるだろう、できるはずだ (P : C A) といった具合にこの予期ポテンシャルはループの回転とともに増幅する。おなじプロ野球チームが好きだということで、一杯おごってもらったりするのはこの並列動作が働くからである。この場合、こちらからもおごり返すとパターン2-1となり、これが交互に繰り返されるとAとCの関係が対称化して、一緒に肩を組んだり歌ったりするファンの結合紐帯ができてあがる。Bは個人でもいいし、共通の趣味でもいい。この並列結合の紐帯は数万の規模まで容易に膨れ上がる。

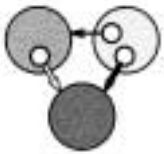
4 . PrPr-J

1) PPP-J.1-4 ; P : B A, P : B C P : C A



1行4列目は私Aを好きな人B (P : B A) が好いている人C (P : B C) から好かれるたい、好いてくれるだろう (P : C A) という変換で、1-2並列受動型・同窓会モデルのバリエーションである。会合で出会った人が同窓生ということがわかって「どうぞよろしく」と甘えてしまう、つまり好意や友誼をあてにしたくなるのもこの変換による。私もお姉さんも同じお母さんの子なんだから私にも同じだけ遺産を下さい、といった平等主義的な要求の根底にはこのPrPrの並列型動作があるかもしれない。同門の誼みで、世話を焼いたり焼かれたりすると、1-2と1-4が加算合成されて、Bを中心とした並列の相互結合のタイプ(1-2・4)ができあがる。

2) PPP-J.2-4 ; P : B A, P : C B P : C A



その下は、PrPrの直列型で、私Aを好きな人B (P : B A) を好きな人C (P : C B) に私は好かれるたい、好かれるだろう (P : C A) というトリオン動作である。弟子の弟子に尊敬されることを期待する先生や、後輩の後輩に献身を要求したりする序列重視型の期待や要求はこの動作による、と言えそうだ。上下関係を入れずに考えれば、私を慕ってくれる人を信頼している人のご好意に素直に甘えさせていただく、といったケースも考えられ

る。

以上8つの基本パターンを見た。向きや順序の小さなちがいで、かなり大きなちがいが生まれてくることが理解されたものとおもう。具体的な事例は、基本動作を例示するためのものであってそれ以上ではない。AB、BC、ACの間の勢力関係や関係の歴史、指向の強度などを考慮に入れると、さらに複雑な事例のシナリオを描くこともできるが、それには作家なみの想像力が別に必要とされる。ここでは各パターンの基本動作の骨格を提示するだけで次に移ろう。

8.4.1.2 反射型PPP-H

今度は、入力出力の動作順序をかえた場合のトリオン動作のパターンを検討してみたい。主体Aが、他者Bと他者Cのあいだの関係についてはじめから一定の認識なり願望なりをもっていたとしよう。そのとき、Bとの関係にポジティブな荷重が入力されたばあい、Cとのあいだにはどんな予期ポテンシャルが結果として出力されるか、が検討のテーマである。あるソシオンAが、他者Bと他者Cの関係を目撃したばあいのトリオンによるこころの動きの簡単な思考実験である。

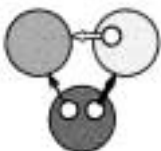
1 . PsPs-H

1) PPP-H.3-1 ; P : B C、P : A B P : A C



図表 8.8 a 3行1列目のパターンである。ある女性Bがかいがかいしく赤ちゃんCの世話をやいていた(P : B C)としよう。それを見た私Aは、まずその女性への魅力を感じた(P : A B)とする。つぎの瞬間、私Aは赤ん坊に「かわいいね」と微笑みかけているかもしれない(P : A C)。他者Bへのポジティブな荷重が、BとCのP結合ブリッジを通過してCに転移した、と考えることができる。

2) PPP-H.4-1 ; P : C B、P : A B P : A C

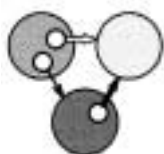


その下の4行1列目のパターンである。今度は、子どもがお母さんのお手伝いをしていた(P : C B)としよう。その母がかいにかいにも病弱そうで哀れを誘ったとする(P : A B)と、私Aはきっと子どもに好意を感じて「偉いね」と声をかけたりする(P : A C)かも

しれない。Bを汚染された地球と考えると、初めてのボランティアAが、古参のボランティアCに尊敬の視線を送る場面なども一例として考えることができる。上の3-1は直列で、この4-1は並列である。

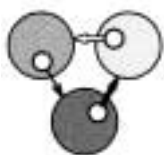
2 . PrPs-H

1) PPP-H.3-2 ; P : B C、P : B A P : A C



3行2列目に移る。AB入力が3-1では能動だが、ここでは受動型 (P : B A) である。飢えた子どもたちCの世話を女性Bがしていたところまでは左隣のパターンと同じである。その女性Bがなんと私Aの方をみてにっこり微笑んだとしよう。私もいっしょにその子どもたちのために何かしてあげたい気持ち (P : A C) になるにちがいない。子連れの物乞いに請われて施しをしてしまうばあいもおなじトリオン心理がはたらくだろう。

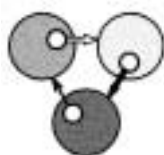
2) PPP-H.4-2 ; P : C B、P : B A P : A C



4行2列目のパターンである。たとえば老人Bが自宅で若いCさんに献身的な看護をうけている (P : C B) としよう。その病床の老人Bから、ひさしぶりに便りが届いたとする (P : B A)。それを読んだ旧友や家族のAは、やさしいCさんの苦勞を思って、ねぎらいの言葉をかけたい気持ちになる (P : A C) だろう。

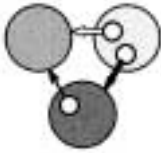
3 . PsPr-H

1) PPP-H.3-3 ; P : B C、P : A B P : C A



以上は、私AがCに好意を感じるAC能動出力型のパターンである。私AがCから好意を期待する出力受動型に移ろう。たとえば母Bがかわいがっている子どもCがいる (P : B C) としよう。そのことを知っている私Aが、たまたま (あるいは意図的に) その母親の世話をやき (P : A B) それを理由に子どもを奉公に出すよう要求したりする (P : C A) 論理が、この3行3列目のトリオンである。親の借りを子に返せというこの論理は、子どもにとっては不条理な押し付けとなりうることはいうまでもない。

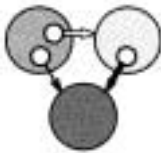
2) PPP-H.4-3 ; P : C B、P : A B P : C A



4行3列目は母と子のあいだの関係が逆転している。子どもCの方がいつも母Bを気づかう (P : C B) 孝行者で、その母に私Aがなにかお世話をする (P : A B) 機会があったとしよう。孝行息子の子どもは、きっと私Aに感謝するにちがいない (P : C A) という予期が私の脳裏に浮かぶだろう。上のパターンと同じように、この予期が、「恩返し」の押し付けになる場合も十分に考えられる。

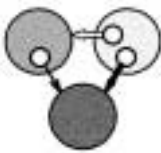
4 . PrPr-H

1) PPP-H.3-4 ; P : B C、P : B A P : C A



4列目は入力も出力も受動型である。同じ例で考えると、子どもCをかわいがっている母親Bがいて (P : B C)、その人が私Aにとても気をつけてくれる (P : B A) としよう。能天気な私は、その人Bの子どもCも自分になつて当然である (P : C A) と思いきも可能性が高い。どうして自分になつかないのか！と虐待したりするのは、このトリオンによる愛の予期の反動なのかもしれない²²⁾。

2) PPP-H.4-4 ; P : C B、P : B A P : C A



その下の4行目のパターンは、BとCの関係が逆転している。子どもCの方が母親Bのことを心配している場合 (P : C B) である。その子Cの母Bが病弱でありながら、わがままな夫Aの世話をかいがいしく焼いてくれている (P : B A) としよう。勝手な男である私Aは、おまえもいっしょに手伝え (P : C A) などと宿題をしている子どもに期待したり命じたりするかもしれない。PrPrは他人に世話されることを「当たり前」に育った甘えたトリオンのパターンである。

以上、まず他者Bと他者Cの関係が分かっているとき、その一方であるBに私Aが能動あるいは受動の動作をとったとして、その場合Cとの間にどのような予期が形成されうるか、

22) ちなみに、子どもが母とつよいダイアッドをつくっていることに気づけば、もうすこし子どもの気持ちの思いやることもできるだろう。Aはトリオンで、Cはダイオンで3人の関係であるトライアッドをそれぞれ自分のサブスペースに写してサブワールドをつくっているのである。感情の動きはこのそれぞれのソシオンの視界のなかに限られるのだ。ちなみに、私Aもダイオンでいこう、ということになると、Cとのあいだで母にして女性であるBの取り合いとなり、PPNあるいはPNPさらにNPPの不安定トリオンがまわるやっかいなトライアッドとなる。

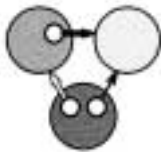
そのパターンを検討した。入力順序のちがいは小さなことのように見えるが、実際には動作の選択特性に大きなちがいを生み出す²³⁾、という点が重要である。

8.4.1.3 誘導型PPP-Y

図8.8aの最後のセクション、5行目と6行目はもうひとつのPPPの変換パターンで、最初にAとBつぎにAとCの関係が入力されたとき、対辺になるBとCのあいだの関係についてどのような予期が出力されるか、という視点で整理したものである。BとCのあいだにある荷重動作を誘導する、という点で誘導型と名づけた。いわゆる「おせっかい」が生まれるのは、この誘導型トリオン動作によってである。

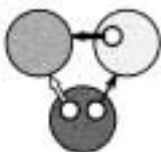
1 . PsPs-Y

1) PPP-Y.5-1 ; P : A B, P : A C P : B C



誘導型トリオン5行1列目は、私AがBに好意をもち (P : A B) Cにも好意をもった場合 (P : A C) BにたいしてCにも好意的であってほしい (P : B C) とおもうような3項変換である。変換の最終出力が対辺のBとCの関係になっているところが循環型、反射型とのちがいである。このトリオンは、Bに対してCを援助するようにAに要請させる典型的な「おせっかい」のトリオンとなっている。Aがよく知っている友人Bに紹介状を書いて新しい友人Cに手助けをお願いしたりするのは、このトリオンの動作による。神にお供えをしてだれか愛する人の加護を願う、といった「祈り」のオペレーションを司るのは、まさにこのトリオンであろう。

2) PPP-Y.6-1 ; P : A B, P : A C P : C B



その下の欄にある6行1列目のトリオンでは、BとCの動作の方向が入れかわっている。同じ友人紹介であっても、あたらしい友人Cの方にたいして、古くからの友人Bに挨拶に行くように要請したりする (P : C B) ばあいは、こちらのトリオンが働いている、といえよう。教団への献金要請などもこの一種かもしれない。5-1と6-1が合成されると、

23) とくにこの反射型では、最初にBとCの関係がAの目に見える分だけ、Aの動作の選択にある種の計算が働きやすい。たとえば、BとCがたがいに信頼しあう深い仲、つまり親子や兄弟、親友どうしだったとしよう。Aがそのことを知っているとする、Aの脳裏には、Bの面倒を見ておくと、P×P Pで、いずれCからお返しを期待できる、といった計算づくの予期が発生しやすい。つまり、Cからの返礼を期待してBに好意的にするというふうに、予期のループが発展する。

2人の友人にたいして、どちらが世話をやくということではなく、おたがいに仲良くするように祈ったりお願いしたりするやさしい祈りのオペレーションとなる。ふたりとも善い人だから、と仲人を買ってでたりするのも、この合成トリオンの働きによる。

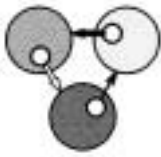
2 . PrPs-Y

1) PPP-Y.5-2 ; P : B A、P : A C P : B C



2列目の類型に移ろう。5行目のトリオン5-2は、私Aのことを大切に思うならば(P : B A) 私の大切なC(P : A C)を可愛がってやってほしい(P : B C) とBに願うような変換である。私に恩義があると思うなら、私に対してではなく、私力がになってあげたいと思っているCに返してやってくれ、といった要請がそれで、ポジティブな予期荷重(ポジオン)をソシオネットに循環させる働きがある。人が思いがけない好意や援助に恵まれるのは、だれかが思わぬところで「真心」を送り出しているからであろう。

2) PPP-Y.6-2 : P : B A、P : A C P : C B



同じく6行2列目のパターンは、CとBの関係が逆になっている。私Aがお世話になった人Bがいる(P : B A)としよう。私Aが何かの縁でCの面倒を見た(P : A C)とき、Cに対してお返しはBの方へ(P : C B)と、願ったり求めたりするトリオン動作である。このトリオンは、図からも分かるように、B A、A C、C Bときれいな荷重の循環ループを形成する²⁴⁾。Cから思いがけない好意がBに返ってくると、BのAに対する信頼が強化されて、ふたたびAに友情が示される公算が高くなる。

このループの先取りによる介入は、計算と洞察の源泉となるが、次のPNNやNNPでは、しばしばヤジ馬根性や日和見主義の温床となる。一般に、ループの周回遅れは「だから動機」、先行は「ために動機」(A・シュツ)を生む、と考えられる。

24) このループは直列にD、E、Fと連鎖していくことができるので、友愛や誠意というポジオンがそれぞれのトリオンに誘導される形で、実際に人々のネットワークを循環することが原理的に可能になる。トリオンポンプの加圧誘導によって「真心」の一般交換が可能になる、といっていいたいだろう。

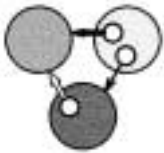
3 . PsPr-Y

1) PPP-Y.5-3 ; P : A B, P : C A P : B C



3列目の類型は、AとB、AとCの関係が、能動受動で2行目と反対になっている。たとえば、私Aが昔からB先生を尊敬しており (P : A B)、最近後輩のCが慕ってくる (P : C A) とすると、AはB先生にC君のことをよろしく願います (P : B C) と紹介して、指導や援助をお願いするかもしれない。このトリオンでも援助や尊敬、感謝といったポジオンが、ループをつくって一方向に循環する。

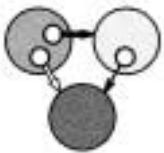
2) PPP-Y.6-3 ; P : A B, P : C A P : C B



6行3列目のトリオン6-3は、上のパターン5-3とBC間の動作の方向がちがうだけで基本は同じである。弟子Cに尊敬する先生Bを紹介して入門させる (P : C B) と考えるとわかりやすいだろう。3列目の5行目と6行目を合成すると、私の好きな人Bさんと、私を好いてくれるCさんとが仲良くしてくれたらうれしい、という善意のトリオンになる。他人のお世話をするのが好きという人のなかでは、このおせっかいトリオンが働いていることになる。

4 . PrPr-Y

1) PPP-Y.5-4 ; P : B A, P : C A P : B C



4列目は、おなじく善意のトリオンであるが、Bに対してもCに対しても受動であるようなトリオンである。私Aを昔から慕ってくれる大学の後輩Bがいて (P : B A)、そのB君に新しい会社の後輩C君 (P : C A) を、「よろしく」と紹介する (P : B C) ようなケースを考えることができよう。私を頼ったり慕ってくれる人びとには仲良く助け合ってほしい、という願いで、親分肌のトリオンもこれにあたるかもしれない。

2) PPP-Y.6-4 ; P : B A, P : C A P : C B



6行4列目は、上の例で、会社の後輩Cさんに、大学の後輩B君を紹介して、いちど電話して挨拶にいけ(P : C B) などと伝えるパターンである。上下合成して足しあわせると、よく遊びにくる2人がいるから一度お見合いをさせよう、といった企みに発展するかもしれない。左辺右辺ともにPポジティブならば、対辺であるBとCのあいだもポジティブな結合であってほしい、というのがこのトリオンの願いなのである。

ちなみに、BとCが喧嘩したり仲間割れを起こしているような場合は、このトリオンの出番である。ふたりとも喧嘩などせずに、私Aの「顔」をたてて(つまり私Aへの信頼荷重(A^b, A^c)の強さと固さにおいて)ここで「手打ち」をしる、と仲裁するようAを促すだろう。子はカスガイの例でも見るように、人間はひとりでも、ふたりでさえもなく、じつは3者の関係をひとつのこころのなかで生きている存在であることを示す格好の事例である²⁵⁾。

8.4.1.4 トリオンの合成

もうひとつのチャート型のトリオンの図8.8bをご覧いただきたい。ここには、各トリオンのユニット動作が、双方向化した場合の合成パターンと合成にいたる経路を示してある。

これまで検討してきたPPPトリオンの8つの基礎パターンは、ユニットを構成する関係動作が一方向に限定されたものであった。実際には、AのBに対する荷重動作は、BのAに対する返報をひき起こして、両者の関係は双方向的なものになることが多い。他者の反応や返報によって予期が相互に対称化されたとき、それぞれの2項関係は一定の安定性を獲

25) 嫉妬の乗り越えは、2者関係を3者関係へ開くための条件である。エディプスの物語はその乗り越えの不可能性の物語として読まれてきたといえるだろう。ともあれ、この乗り越えが不十分である場合、クサビのシミュレーションでみたAちゃんのように、意地悪のトリオンのトラップにはまることになる。一般の男女関係のように、ダイアッド結合への傾向を内在しているものは、俗に嫉妬と呼ぶこの不安定動作PPNに陥りやすい。私Aを好いている人Bが好意を寄せる人Cなんて許せない! というパターンである。

いわゆる嫉妬は、トライアッド3人関係において、ダイオンの2者結合を希求する動作と、トリオンの動作とが競合するところからくるもので、ふたつのループの競合によって他者への荷重が不安定化し、しばしば正負反転する現象である、と考えられる。なお、この競合の可能性はこの表で示したすべてのPPP結合がもっている。3人以上の人間の関係には、常にダイオンとトリオンが競合あるいは重合するリスクが潜在している。おそらく、このことが、なぜすべての人が愛し合い、信頼しあう明るい環によって社会全体が満たされることがむづかしいのか、を説明する。

次章でみるN2個の変換パターンには、この嫉妬による否定性(妬み、嫉み)と、愛と正義による否定性(糾弾や追及、処刑)が同時に混在している可能性がある(より正確に、混在しうる、というべきかもしれない)。嫉妬がしばしば正義で武装するのは、この二重性、ダイオンとトリオン動作の重合や振動によるのだろう。ひとつのループを同じ中身=媒質が回っているのならば、後はどう名づけるかの違いだけである。3者以上のネットワークでは、嫉妬の鬼は正義の戦士に変身できる可能性を(いつも、原理的に!)秘めている。ともかくだれか(この場合C)を非難・攻撃した上で、あとは同じ動作を「正義」の名において自他に物語れば、それがそれなりのリアリティを帯びてきてそれなりの「社会的現実」となりうるのである。

得する。

たとえば、AがBに好意をもつだけでなく、BがAに好意を示すならば、ふたりの間には相互的な信頼や友情が成立して関係が安定する。同じように、BがCを慕うだけでなく、CもBに愛情をもてれば、(あくまでAのサブスペースのなかの話だが)トリオンの2つの辺が「互酬性の原理」によってさらに堅固なものになる。

このように個々の関係が対称性をもって双方向的に連結されていくことで、トリオンの構造はさらに拘束性のつよいものになり、したがって強い確度で予期を発生するようになるだろう。おたがいのかわり方に対する予期が相互に対称化され、そしてその対称化された予期が共有されることによって、ダイアッドやトライアッドがより安定的に機能していくための社会的ベースが形成される、と考えることができる²⁶⁾。

単位トリオンの荷重動作が対称化されることで双結合が形成され、トリオンの動作構造が安定性を増していくプロセスは、トリオンの8つの基本パターンがいわば足しあわされて、新しい合成パターンを生成していくプロセスに対応する。合成トリオンマト図8.8bは、トリオンが双結合を形成していくその経路を上から下へ流れ図として視覚的に示したものである。

PPP、PNN、NNP、NPNのそれぞれにトリオン合成の流れ図が示してあるが、本稿では、PPPトリオンを代表としてとりあげて、その対称化へのながれを追跡してみる。1行目に基本図8.8aでみた8つの基礎パターンを示し、2行目からはその合成パターンを順次配列した。

2行目の4種類のパターンは、同じ縦の列の1行目と2行目(基本図では上下、合成図の1行目では左右)のパターンを足しあわせたもので、BとCがPの双結合たとえば仲良し

26) T. パーソズが「二重の相互依存性double contingency」として問題にしたように(1951=1980)、予期の相互依存的性格をめぐる問題は、理論社会学の最大級の難問である。トリオンは、共有価値による社会的な統制制御によらなくても、社会秩序の形成が可能なことを示しているように思われる。予期の対称化によって、最終出力の確実性があがっていく「複雑性の縮減」(N.ルーマン 1973=1990)が起こるからである。

ただし、この関係の安定性については、かならずしも望ましいものばかりではないことに注意してほしい。PPPトリオンでは出てこないが、陽性の関係だけでなく、憎しみつまり負性のN動作が相互に対称化されることで、大変安定性の高いトリオンができる場合がある。後に「分裂結合」と呼ぶような、NNP、PNNあるいはNPNの安定ループからなるトリオンの不幸な複合体が生まれることがある。

さらに非対称性を含んでいたり、N関係がひとつだけ含まれていたりして、それ自体としては安定性をもたないトリオンが、3者、4者からなるソシオネット(トリオンの複合ループ)のなかで、システムの安定性を獲得してしまうこともある。そのような負性の(不幸な、とっていいだろう)安定結合の誕生と温存のメカニズムを解明することは、ソシオン理論の重要な課題のひとつである。

これまで異常人格、狂気の果て、反社会性、精神病質などと総称されてきた人間のあり方や行いのいくつかは、負を含んだトリオンが、あるネットワーク構造のなかで安定してしまった状態と関連して分析を試みることができるだろう。理解できない、信じられない、といわれる邪悪な悲劇のある部分は、トリオンの生み出すシステム・ダイナミックスの当然の帰結として、合理的に理解できる可能性がある。後の章で、複合ネットワークにおける負の安定と振動の問題を、「トリオンロック」として取り上げる。

の友だち関係となる。左から順にそれぞれ簡単に例示して整理しておこう。

1) BC双結合型

- 1・2-1 : 信頼する人の親友は信頼する ; P : A B、P : B C・C B P : A C
- 1・2-2 : 信頼してくれた人の親友は信頼する ; P : B A、P : B C・C B P : A C
- 1・2-3 : 信頼する人の親友には信頼されたい ; P : A B、P : B C・C B P : C A
- 1・2-4 : 信頼してくれた人の親友には信頼されたい ; P : B A、P : B C・C B P : C A

2) AB双結合型

合成パターンの3行目は、AとBがはじめから相互結合している場合である。基本図8.8aでいうと、同じ行の左右つまり1列目と2列目、3列目と4列目のパターンをそれぞれ加算したものである。同じく左から順に、次のような変換のパターンとなる。

- 1-1・2 : 親友が信頼する人は信頼する ; P : A B・B A、P : B C P : A C
- 2-1・2 : 親友を信頼する人は信頼する ; P : A B・B A、P : C B P : A C
- 1-3・4 : 親友が信頼する人からは信頼されたい ; P : A B・B A、P : B C P : C A
- 2-3・4 : 親友を信頼する人からは信頼されたい ; P : A B・B A、P : C B P : C A

3) AC双結合型

次の4行目は、このトリオンの出力であるAとCのあいだの関係が対称化して、相互的な予期が発生する場合である。原図の同じ行の1列目と3列目、2列目と4列目を合成したものである。すこし例示のパターンを変えてみよう。

- 1-1・3 : 先輩の先輩と知って、親しみを感じる ; P : A B、P : B C P : A C・C A
- 1-2・4 : 同じ先生の教え子ということで親しくなる ; P : B A、P : B C P : A C・C A
- 2-1・3 : 同じ演奏家のファンだと知って意気投合する ; P : A B、P : C B P : A C・C A
- 2-2・4 : わが子の子つまり孫と遊び友達になりたい ; P : B A、P : C B P : A C・C A

以上、双方向結合をひとつだけもったトリオンについて簡単に整理した。片方向結合の基本モデルにたいし、AB、BCは相互に信頼をよせる「親友」的關係になり、ACの出力は、相互的な関係への予期(「縁」)となる。日常から例を探して思考実験するには、これらの双結合モデルの方がわかりやすいかもしれない。

なお、以上の双結合は、対称性をもったものに限られている。実際には他にも、AはB

を信頼しているのにBからは信頼されていない、と感じている場合や、AはBを信頼していないのに、Bからは信頼されている、とAが思っているような、非対称的な関係もざらにありうる。この単独のトリオン内部の非対称性に加えて、(これは、また別の話であるが) BはBのトリオンでAを信頼していたりいなかったりという複数のトリオン間の相互主観的非対称性が発生する。これらの非対称性、トリオンをめぐる志向や対称性のズレは、身のまわりをふくむさまざまな人間関係を駆動する主要な要因であると考えられるが、その整理と検討はまたつぎの課題である。

4) 2辺双結合型

AB、BC、CAのいずれかの辺を双結合で固定した場合、それぞれ4つのパターンが識別できた。これら12個のパターンをさらに合成すると、対称動作による双結合を2辺にもったトリオンを導くことができる。図8.8bの5行目から7行目に配置した6つのパターンがそれである。合成法はそれぞれ図に示したとおり、2通り考えられるだろう。

左上部のT1と記したパターンからはじめる。例えば、仲良しの仲良しに好意を感じるのはきわめて自然な感情のトリオン動作である。たがいに信頼しあう親友Bのその親友Cを私Aは信頼する、いやしなければならない、といったつよい予期が形成されるケースも考えられる。その右のT2のトリオンは、親友の親友ならばきっと私に友情をしめしてくれるだろう、歓待してくれるはずだ、といったたのもしい予期を生み出すだろう。相互結合のトリオンでは、対称動作によって自由度が狭まる分、正負ともに抜け道の少ない力強いオペレーションが期待できる。

下の行に移って、T3のトリオンは、たとえば私Aの親友Bが信用しているアナタCとはもう友だちです、さあ堅苦しいことはやめにして一杯といった展開を誘導するだろう。右のT4は、私Aの大切な家族Bに親切にいただいたアナタ様Cはもう家族も同然です、何なりと申しつけて下さい、といった場合に動作するトリオンである。

最後の2つに移ろう。T5のトリオンは、私AがいったんBさんアナタの面倒をみようとした以上、アナタの家族は、私の家族とおもってお付き合いをさせていただきます、といったタイプの変換を生み出すかもしれない。T6では逆になって、Cさん、私はアナタのご家族にお世話になった、どうぞ私を家族の一員とおもって、何なりとご相談ください、といった形になりそうである。

5)リアリティの濃度

これらTの1と2、3と4、5と6がそれぞれ一緒に合成されると、3つの関係がどれも対称的で相互的な安定したトリオンが最後に完成する。いよいよ「友だちの友だちは友だちだ」というポジティブで安定したトリオンの完成である。

ひとつの変換動作はおおくのばあい他者の側の変換動作を誘発する。内部モデルであるダイオンやトリオンはその他者の反応をモデルのなかにとり込んで、予期の精度をあげていくだろう。

トリオンの場合、3つの要素関係に双方向動作が増えるにしたがって、予期の確実性が増し、リアリティの濃度があがっていく、と考えられる。個々の関係が対称化し、その対称化した関係の数が増えるにしたがって、「かもしれない」という淡い「期待」(負のポテンシャルの場合は「疑念」)が、「だろう」「であるはずだ」「ねばならない」へといわば煮詰まって、最後は「それ以外ありえない」「考えられない」といった「確信」にいたる。

これが修正不能になるにつれて「妄想」に接近する、と考えられるが、その構造とパターンはまた別の機会に検討しよう。とりあえず、トリオンと呼ぶ3項結合の変換回路は、関係における感情の演算装置であるだけでなく、対称性の双結合を形成することでリアリティの濃度を変換するという、より深い働きをもつことが理解されたものとおもう²⁷⁾。

8.4.1.5 並列と直列

トリオンは、その連結動作によって社会的ネットワークを編み上げていくことになるが、そのネットワークの編み方にはふたつのパターンがある。直列結合と並列結合がその2種類のネットワークである。社会システムの編成において重要な問題となるので、あらかじめ両者の特性について簡単にふれておきたい。

1)直列結合

トリオンマット8.8aをご覧ください。そのなかで、1-1と2-2のトリオンは、Bを媒介にした直列の変換回路を形成している。1-1はAからBへ、ついでBからCへと好意や友愛のような正の荷重(ポジオン)が流れ、2-2はまずBからAへ、つぎにCからBへと逆順に荷重が流れる。この直列型のトリオン動作は、ポジティブな荷重の連鎖をC、D、E

27)以上検討したパターン合成は、PPPトリオンの、しかも循環型と名づけた動作に限られている。反射型、誘導型の8つの基礎パターンも、それぞれ合成して対称的な関係を生成していくことができる。その基本的な図式は、トリオンの動作順序がちがうだけで、図8.8bとまったく同じである。PNN、NNP、NPNの3つのパターン合成についても興味深い問題が見えてくるが、本稿では後出の注の余白を借りて適宜いくつかのポイントに言及するにとどめる。

……とにつないでいって、信頼のネットワークを社会的に形成していく原理的な可能性をもっている。この媒介直列型の変換動作は、「友達の友達は友達」というかたちで、多数のソシオンのネットワーク（ソシオネットsocio-net）を選択的に編みあげていく上で重要な役割を果たす。それは、父の父は祖父、子の子は孫といったように、時系列のなかで信頼の糸を紡ぎだすのにも適している変換様式である、といえよう。

なお、BとCのあいだの作用方向を逆にしたばあいの直列変換のパターンが1-3と2-4である。第3辺が、CからAへの動作になっており、最後の出力がAからみて受動型になっている点に違いがある。つまりこの受動型の直列変換では、同じ「友だちの友だちは友だち」でも、さいごにその友だちCの友情や好意を自分の方が期待する、あるいは当てにできる、という虫のいい「予期ポテンシャル」が発生する。

2) 並列結合

これに対し、1-2と2-1は、Bを中心にして並列の関係になっている。Bとの相互結合を介してAからCへ荷重の共鳴転移が発生する、と考えられる。2-1は、ともにBに信頼や愛や歓声を送ることによってAからCに友情が生まれる。アイドルに声援やプレゼントを贈るファンたちの友情はこの並列動作によるものである。1-2は逆に、Bからともになにかポジティブなもの、愛情や保護や励ましをもらうことで、AからCに向かう親近感、同朋愛のようなものを表わしている。

2-1と2-3を合成すると、Bとの関係は片結合のままAとCが強固な同志的相互結合を形成する。この並列結合は、中心のBを共有することで、D、E、F……と同心円的に増殖していく。もっと正確にいうと、Bへの思いを共有するかぎりにおいて、AとCの同志的結合とおなじ関係が、AとD、CとE、あるいはDとFのあいだに形成される。こうして中心との結合を媒介するメディア²⁸⁾さえ準備されれば、この並列結合は、万から数百万、さらに数千万規模の同心円的結合網へと発展するだろう（9章を参照）。王の名前、肖像、紋章、ミイラ、写真、ポスターなどはすべて、この中心のソシオンBを現前させ、それへのコミュニケーションの回路を開くための装置であった。

1-2と1-4を合成すると、Bからの愛を契機に最終出力がAとCの相互結合となるようなパターンが発生する。AがCに友情を感じるように、CもAに好意を感じているだろうと

28) スタジアムにおける大衆集会とラジオによる演説の全国中継という荷重コミュニケーションの集成的形態は、ファシズムと呼ばれた20世紀の大衆動員のシステムの成立と機能の遂行において、いかなるイデオロギーよりもいっそう本質的であったかもしれない。

(Aが自分のサブスペースで実感をともなって)感じられる相互的な絆の完成である。Bの被護や薫陶を受けた同窓同門どうしの連帯である。

なお、並列結合をめぐる連帯の議論は、NNPトリオンによる排除の連帯においてもまったく同じように適用可能である。媒介直列のような選択性をもたない点で、並列結合は、たとえ排除的攻撃的なものであっても、平等主義的な性質を本来内蔵していることに注意しておきたい。中心のソシオンを皆といっしょに崇め祭りさえすれば、あるいは皆とともに石をなげて排斥しさえすれば、それなりの連帯の環のなかにだれでも迎え入れられるのである。

8.4.2 PNNトリオン

PNNは私AとBのあいだがPポジティブで、BとCがNネガティブ、AとCがNネガティブであるようなトリオンの結合パターンである。このパターンは、ループのなかにNが2個あるため、変換に対してPN安定である。それぞれの表象に対する荷重動作が反復され、3項の関係が保存される。PPP変換のパターンと同じように一覧表を図8.9aに提示した。基本となる循環型の8つの類型から説明しよう。

8.4.2.1 循環型PNN-J

1. PsNs-J

1) PNN-J.1-1 ; P : A B, N : B C N : A C



まず1行1列目のトリオンPNNは、私Aが好きな人Bが嫌っている人Cは嫌い、という変換である。たとえば私が信頼する友人Bがいて (P : A B)、そのBがC君はウソつきだから嫌いだ (N : B C) などと言えば、私AはC君を知らなくても悪い印象をもつ (N : A C) だろう。Bが私の尊敬する父や先生である場合はやっかいである。Cは悪い人間であると教わると、だれもCと友人になろうなどとは思わなくなるからだ。むしろ、すすんでCを攻撃しに出かけるかもしれない。PNNのトリオンにおいては、BのCに対するN感情が、Bに対するAのP感情(の強度)に増幅されて、AのCに対する関係に転移する、と考えられる。

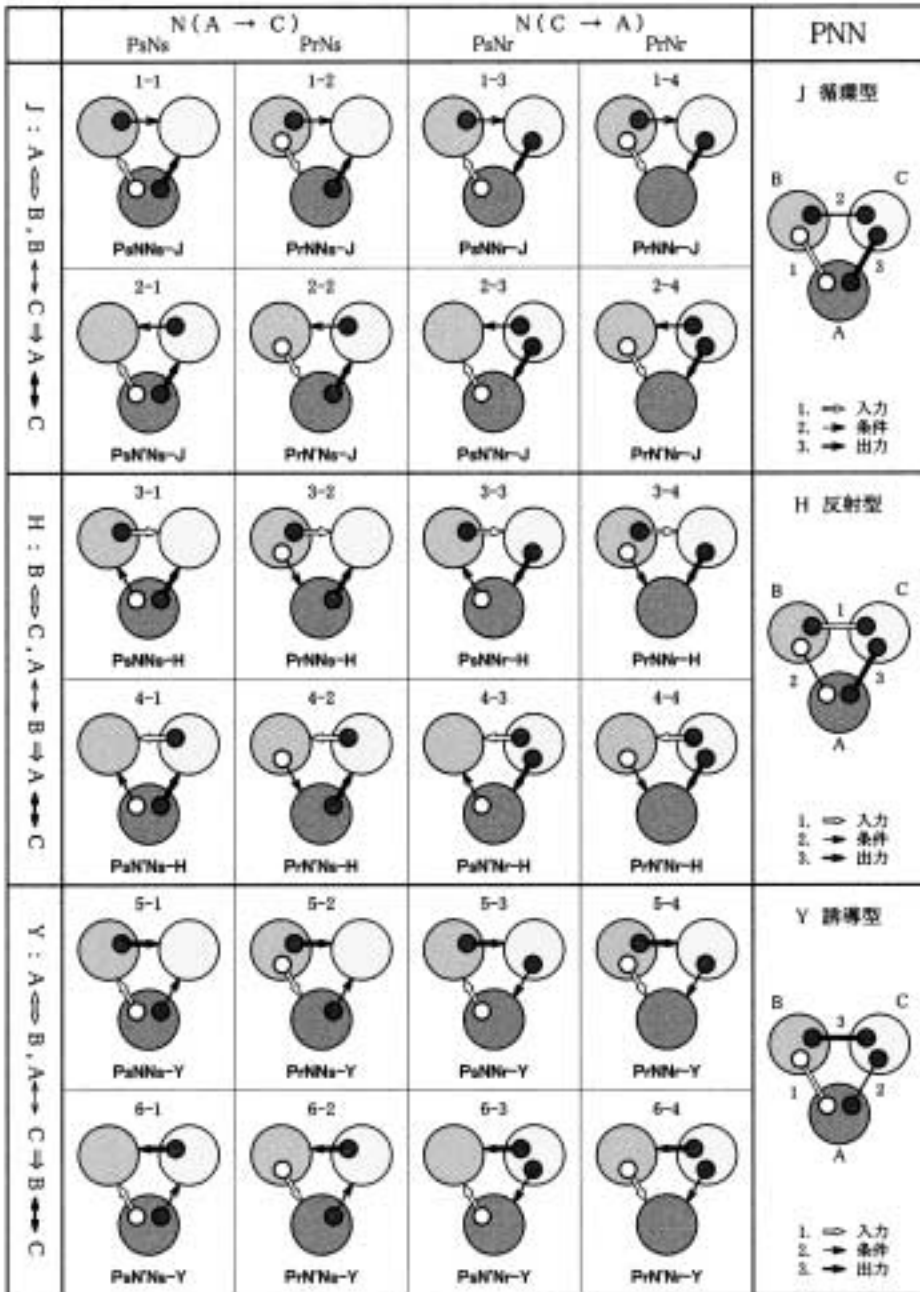


図 8.9a PNNのトリオンマット

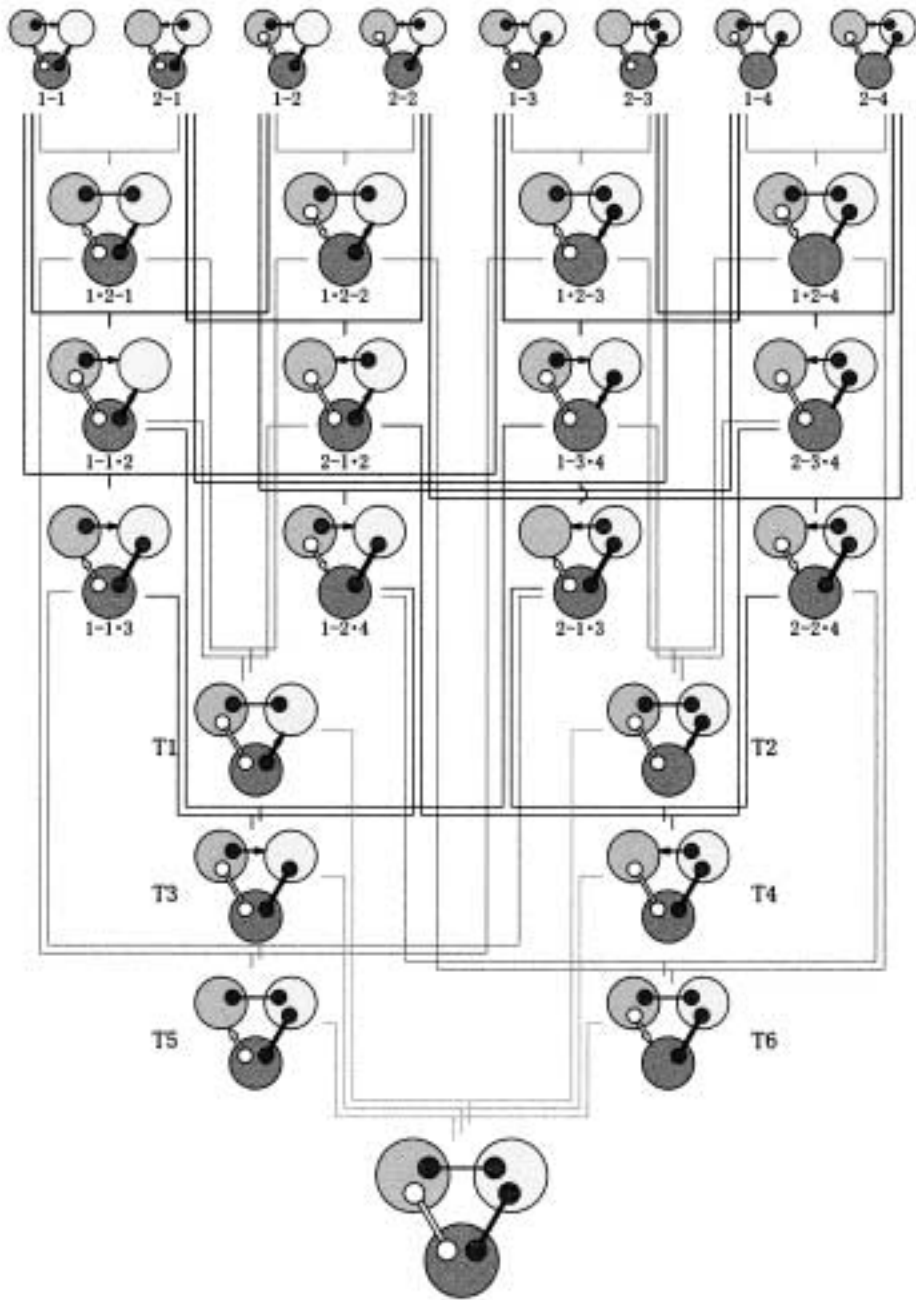


図 8.9b PNNのトリオン合成

2) PNN-J.2-1 ; P:A B, N:C B N:A C



2行目のPNNはもっとわかりやすい。私が好きな人Bを悪くいう人Cは嫌い、というN変換で、上の1-1に比べて防衛色のつよい攻撃変換である。私の愛する人B (P:A B) を傷つけた人 (N:C B) に対しては、誰しも怒りを感じる (N:A C) だろう。とりわけBが大切な家族であったりすると、攻撃者CにたいするAの怒りは、CのBに対する攻撃性に勝るとも劣らないものになる。家族への愛 (P:A B) の強さによって、Cへの怒りが増幅されると考えられる。神聖な教義や信条への批判はしばしば激烈な反応を生み出す。Bへの信仰の荷重量が、Cの与えたダメージを大きく増幅して、Cへの憤激に変換する、と考えられる。小さな批判やささいな悪戯が、しばしば大きな憤激を買う理由である²⁹⁾。

2 . PrNs-J

1) PNN-J.1-2 ; P:B A, N:B C N:A C



2列目のコラムは左辺AB間の入力能動 (P:A B) から受動 (P:B A) となったモデルである。私Aを愛している人B (P:B A) がCを嫌いだという (N:B C)。それを聞いた私AのなかでCにたいする嫌悪感が生まれる (N:A C) だろう。イアゴやサロメのささやきに惑わされる王のトリオン動作がこれにあたるだろう。なお、この種の讒言は、自分Bに対する王Aの愛情を減じるリスクもある。

Bから懇請やそそのかしを受けて、イヤといえないままCを攻撃に出かけていく、とい

29) 1列目PsNsは入力P能動、出力N能動というアクティブな変換パターンをもつトリオンであり、これを刷り込むと英雄戦士のな性格者が誕生する。Bに対する愛と忠誠を誓った1-1は、突撃隊向き、2-1は防衛派である。1と2を合成すると、信頼するアナタの敵は私の敵、となる(1・2-1)。どちらが先に手を出したかは別にして、私の愛するBと敵対するCを、私Aは許すことができない。忠臣蔵はその一例だろう。

デュルケムは、犯罪的な冒 に対する「憤激」が、社会の権威、人命の尊さを生み出し、神聖さを強化する、と指摘した(1895=1958)。そこには単なる風刺・逆説をこえたまっとうな理論的洞察が含まれている。ソシオン理論の枠組みからは、BにたいするポジティブなP荷重と、CにたいするネガティブなN荷重のあいだで、PNNのトリオンとつぎにみるNNPトリオンの往復変換による振動増幅がAの内部(第2階層・サブスペース)で起こっている、と記述することができる。トリオンにおける愛憎の振動は;

P:A B, N:C B N:A C N:A C, N:C B P:A B

となり、最後の変換で増幅されたポジオンは、ふたたびはじめの変換に入力され、振動増幅が可能になる。愛からはいとPNN変換、憎しみから入るとNNP変換になる。一般にデモクラットは前者PNNトリオンで愛から憎しみへ、ファシストはNNPトリオンで憎しみから入って(可能な場合には)愛へと荷重の変換を経験する、といえよう。

ふつう、加害者を憎むほどに、被害者に対する愛情が深まる。加害者に対する怒りN荷重が大きくなっていくにつれて、被害者に対するP荷重が強化され、(すくなくとも当人の主観=サブスペースのなかで)同情や追悼の愛の感情が高まっていく。そしてこの被害者(すでにこの世にいない場合でも)に対する愛が強まるにつれて、加害者に対する怒りが強化される。こうして、どちらかがすでに他界している「死者」、つまり「経験科学」としての心理学の「対象」としてもはや実在していないばかりでも、このトリオンのPNN変換は主体Aのサブスペースのなかで「表象」にたいする荷重変換動作として日々刻々(さらには年々歳々)増幅亢進していく。いずれこの「主観的」要素は、復讐や追悼の供儀としてオブジェクティブに実体化される時を迎えるだろう。

う一種のお人よし人間に特有の攻撃行動がこのトリオン動作によって説明できる。

2) PNN-J.2-2 ; P : B A, N : C B N : A C



2行2列目は、BとCのネガティブ動作の方向が反転している。これも上のパターン1-2よりはわかりやすい。私Aを頼りにしているB(P : B A)が、Cから意地悪をされた(N : C B)と訴えたでしょう。Aは、子分のBをいじめたCをけしからんやつだ、とばかり制裁攻撃におもむく(N : A C)にちがいない。とくにBからの信頼や愛情が厚いばあい、AはCを攻撃しやすいだろう。何もしなければその信頼や愛を失う可能性が大きいからである。このトリオンでAの立場にあるのは、力持ちの兄、Cはいじめっ子たち、Bは泣き虫の弟というケースを考えることができよう。Aはアメリカ、Bはクウェート、Cはイラクと置いてみることもできそうである³⁰⁾。

3 . PsNr-J

1) PNN-J.1-3 ; P : A B, N : B C N : C A



右に移動して3列目に注目しよう。これは1列目のPsNsとおなじく、他者BにPポジティブな荷重を入力するが、出力はCから受動的にN動作を予期する被害予期型のトリオンPsNrである。私Aの好きな人B(P : A B)がCさんをいじめたりしたら(N : B C)、私はCさんから嫌われるかもしれない(N : C A)という不安がこのトリオンの出力である。たとえば、私は先生が大好きでいつも職員室まで迎えに行く。その先生が小さなことでクラスのミンナをひどく叱ったとしたら、ミンナは私に意地悪をするかもしれない。Bを慕うことによって、Bから嫌われているCから攻撃されてしまう受難のトリオンである。トリオンでは、身に覚えのないのに危害を加えられる、ということが頻繁におこるのである。

30) 2列目の1行目2行目をタテに合成すると、AがBからPポジティブな荷重入力を受けて、CにNネガティブな攻撃性の荷重を出力するトリオン(1・2-2)ができる。BとCはNネガティブな関係で相互に否定結合をしている。私Aを頼ってきた人Bの敵は許さないぞ、という守護神や傭兵のタイプがこれに相当する。Bから送られたポジオンがお金だったりすると、私Aは殺し屋ということにもなりうる。

このトリオンによる人間の攻撃性は、直接のダイオン関係のない他人、Aが悪意をもたれたわけでもなければ恨みをもったわけでもない(しばしば善意の)他人Cに振り向けられる、という顕著な特徴をもっている。しかもC本人にとっては気づかないうちにBではなくAの標的にされている、という点で厄介なものをもっている。宿場のトリオンでも簡単に見たように、一人旅の善人が、だれかから依頼を受けた刺客の餌食になるのは、このトリオン動作によってである。依頼人が、飢えた子や死にかけの老婆であるばあい、この代行迂回攻撃はふつうの人にも理解可能となってくるだろう。獲物は持ち金であったり生き肝であったり(生体移植用の臓器はすでに地球上で獲物となっているらしい)するわけだ。このトリオン動作を国家や企業のレベルにランクアップすると、戦争や侵略を駆動するのが憎しみだけでなく(攻撃者にとっての)愛情や信義のしがらみであるらしい事情がすこし垣間見えてくる。

2) PNN-J.2-3 ; P : A B, N : C B N : C A



2行3列目のパターンは、BC動作が反転したPsNrのトリオンである。私AはBさんが好きである(P : A B)。そのBさんがCさんから嫌われて(N : C B)しまった。Cさんは私のこともよく思わずに意地悪する(N : C A)かもしれない、とAはこころの中で思うだろう。前述の例でいえば、好いていた先生が無能だったり一生懸命すぎたりして、ミンナから嫌われてしまった場合などが対応する。もし嫌われたのが先生ではなく、気の弱い友人のB君だったとすると、トリオンの持ち主でもあるA君は微妙な立場にたたされる。B君を助けると、ミンナCから自分も嫌われていじめられるかもしれない、という不安な予期がトリオンから生まれる。Cから嫌われる危険をおかしてもBと仲良しダイオンのままでいるか、それともCにいじめられないために、Bに知らんぷりをきめこむか、このA君の悩みは、昔からすべての人の悩みである³¹⁾。

4 . PrNr-J

1) PNN-J.1-4 ; P : B A, N : B C N : C A



4列目PrNrも同じ受難のモデルであるが、3列目のPsNrよりさらに悲惨である。たとえば優等生のA君は、たまたま先生Bから可愛がられている(P : B A)というだけで、その先生に叱られてばかりいる(N : B C)ミンナからいじめられる(N : C A)といったことが起こりうる。A自身は何もせずにそこに、ある関係のなかに、愛すべき存在として存在していたというだけで、意地悪や迫害の対象となりうるのである³²⁾。私を最良にするBが先生ではなく、たまたま不良のB君であったとしても同じである。B君にいじめられたC君は、今度はBの子分である私Aをいじめるかもしれない、いじめられたらどうしよう、という脅えや不安がこのトリオンから生まれる「予期」である。

31) ちなみに、聖書のなかで、鶏が泣くまでに3度私の名を知らないというだろう、という不思議な予言をされたペテロは、弾圧と追及の手が回ったキリストを、3度まで知らない人だ、と言った。迫害の手が自分にまで及ぶことに怯えて、弟子であることを否定したのである。

合成タイプの1・2・3ともに、このPsNrトリオンは、ある他者Bを愛することによって、Bと敵対している誰かCから迫害をうける、という受難の可能性を論理的に教えてくれる。いわゆるブリッコの受難はおそらくこれによるものであり、一度このような経験をトリオン回路に取り込むと、その子は、他者に好意を示すことに慎重になるだろう。ひいては他者に好意をもつこと自体を内面でおびえるようになるかもしれない。ともあれ、愛と意地悪は、不仲というブリッジによって結ばれたトリオンの兄弟何重なのである。

32) そのような経験を何度かしてしまうと、A君は他人からやさしい言葉をかけられること自体を恐怖しはじめるかもしれない。しかも、BとCは背後で結託している可能性すらあるのだ。いわゆる人間不信や被害妄想は、おそらくこうして生成された予期が、孤立したトリオンのなかで回帰を重ね、疑いようのないリアリティを帯びてきたものであろう、と考えられる。

2) PNN-J.2-4 ; P : B A, N : C B N : C A



2行4列目はCからBへネガティブな荷重が送り込まれるパターンである。この場合も、Bさんに好かれた私A (P : B A) には何の落ち度もない。ただ、そのBさんがたまたまC子から睨まれてしまった (N : C B) ために、私AもまたC子の攻撃性のターゲットとなる (N : C A) リスクが発生する。このAの立場におかれたソシオンは、子どもであれ、大人であれ、ひいては民族であれ、なかなか大変である³³⁾。

以上PNNの循環動作モデルを検討した。PsNsとPrNsは、ひと言でいえば、味方を愛し、敵を憎む戦士のトリオンである。ともにトリオンによって愛が攻撃に変換されること、愛が憎しみを動機づけることを示している³⁴⁾。さらにPsNrとPrNrのふたつは、受難と迫害のトリオンである。このトリオンは他者を愛することによって、あるいは他者から愛されることによって、自分が憎まれ迫害されるリスクが存在することを物語っている。悪意はトリオンからやってくるのだ。

8.4.2.2 反射型PNN-H

図8.9 aの3、4行目は、反射型のPNNトリオンで、ユニットの荷重動作の順序がちがうパターンである。Aははじめ一種の目撃者、あるいは傍観者の立場にいる。BとCの(このばあい負の) 関係を目の当たりにして、Aはその当事者の一方のAに同情あるいは加勢する。そのとき、Aの主観的な荷重感情空間で、もう一方の当事者であるCにどのような予期が発生するだろうか、ということが思考実験のポイントである。

33) たとえば、Aを年端もいかない幼な子で、Bを母、Cを呑んだくれの親父としよう。父が母を憎悪して暴力をふるうとき、この不幸な子どもA君は、その母によって愛されている、というそのこと自体によって、オブジェクティブに父の暴力の対象となりうる。そしてそのことに怯えだしたとき、A君の運命は相当に困難な軌道に引き込まれていく可能性が高い。

34) PNNトリオンのもとでは、愛することによって人間は鬼になる。あるいは愛されることによって鬼になる。愛のために、防衛であるにせよ襲撃であるにせよ、他者を攻撃する、できる、しなければならない、という心理的・思想的・感情的な意味変換がこのトリオンによって起こる、と私たちは仮定したい。その結果ヒトの歴史と所業についてあたらしい角度からそれなりの光をあてることができそうだが、その具体的な展開はまた次の課題である。呪われたトリオンとでもいうべきこのPNN変換の核心は、他者Bと他者Cが呪われたN結合、(Aの内部サブスペースにおいて!) ネクロン結合をしている点にある。そのようなソシオブリッジを形成して、被害妄想と人間不信に引きこんでいくトリオンは、初めての「重要な他者 (significant others)」である両親を結びつけていた不信と憎悪の関係を忠実に写しとっている公算が高い。人間は、発達の初期においてはとりわけ、ひとりの個人(モノ)ではなく、3人の連結体(トリオン)なのである。

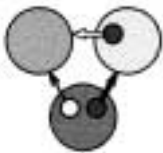
1 . PsNs-H

1) PNN-H.3-1 ; N : B C、P : A B N : A C



3行1列目のトリオンから入ろう。たとえば、小柄なBが図体の大きなCを攻撃している(N : B C)としよう。これを見たAがBにシンパシーを感じて「がんばれ」と声援をおくる(P : A B)。そのうち、声援はCに対する罵声や投石に変わる(N : A C)かもしれない。Bを応援する理由は、Bの闘う姿が魅力的だったり、弱いけれども誇らしくがんばっていたり、いかにも強そうだったりなど、いろいろでありうる。ともかく、対立する2者のうち攻撃者・強い方に味方すると、他方の攻撃されている弱い方にネガティブな感情が自動的に発生する。それが人間の品位や階級を問わないことは、競技スポーツの観客席に立てば一目瞭然であろう。

2) PNN-H.4-1 ; N : C B、P : A B N : A C



4行目は、BとCの関係が逆になって、Bは攻撃を受けている側になっている(N : C B)。攻撃されているBへ同情を感じると(P : A B)。その分だけ強い怒りが冷酷な攻撃者へこみあげてくる(N : A C)だろう。このトリオンは、しばしば被害者への同情を加害者への怒りへと変換する正義のトリオンとなる。なお、Cの攻撃が正当な理由をもつかどうかはまた別の問題である³⁵⁾。

2 . PrNs-H

1) PNN-H.3-2 ; N : B C、P : B A N : A C



2列目3-2は、加勢あるいは加担のトリオンとでもよぶべきパターンである。はじめのBC対立は1列目のヤジ馬と同じ(N : B C)だが、このトリオンではAはBから依頼や愛情を贈られる(P : B A)という点がちがう。攻撃者Bからおだてられたりして、はじめ傍観していたAがCへの攻撃に加担する(N : A C)というパターンを考えることができよう。BからAに送られるものが信頼や声援ならば「お人よし」、お金ならば「番犬」ということ

35) この4-1のトリオンで、Bが少年容疑者で、攻撃者Cが検事であったとしよう。私Aが少年Bに同情してこれをかばおうと思えば、国家権力Cにたいする怒りが生まれる。ちなみに、この少年が本当に残酷な犯罪を犯している場合には、事態はすこしややこしくなる。被害者と思っていたBが攻撃者の立場に反転して、私Aは弱い被害者の応援をしたいのに実は攻撃者の応援をしてしまっている、という騙し船のようなことになってしまうからである。

になる。

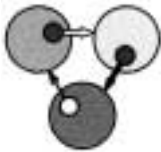
2) PNN-H.4-2 ; N : C B, P : B A N : A C



その下の4行2列目は、弱い者に味方する助っ人トリオンである。人相の悪い男Cに追いかけてられている子どもや女性B (N : C B) が逃げこんできたら (P : B A) たいていの人には、Cの前に立ちはだかって石を投げたり、人でなしなどと罵るだろう (N : A C)。被害者Bが弱い立場で、ひとりでは対抗できない悪者のCに対して代理攻撃を依頼するばあいは、私Aは弁護士あるいは水戸黄門の役まわりになる³⁶⁾。

3 . PsNr-H

1) PNN-H.3-3 ; N : B C, P : A B N : C A



3列目のPsNr型に移る。3行目のパターンでは、B君がC君を攻撃している (N : B C)。それを見ていた私Aが強そうなB君に拍手したら (P : A B) C君から恨まれて攻撃された (N : C A) という、いわばオポチュニストの受難のタイプである。いつもクラスのミンナを出来が悪いと叱ってばかりいる先生Bがいて、それを知りながら先生のよい子をするのは、ミンナから嫌われるリスクに気づけない一種のトリオン音痴である。何度かそんな目にあうと、とばっちりを恐れ過ぎて、好きな人にも近づけない「引っ込み思案」になるかもしれない。

2) PNN-H.4-3 ; N : C B, P : A B N : C A



4行目のタイプは、BC関係が逆転したトリオンである。B君がC君からいろいろ嫌がらせのN動作を受けてイジメられている (N : C B) かわいそうにおもった私AがB君を助けようとする (P : A B) 自分もCからイジメられるかもしれない (N : C A) という「予期」を生むのがこのトリオンである。かもしれない、からきつといじめられる、にいたる予期の確度や強さは、それまでの初期学習や攻撃者Cと被攻撃者Bの関係、そしてCの攻撃性の

36) 3-2と4-2上下をあわせたBC対立型についても簡単にふれておこう。互いに争っているBCどっちに非があるかはさしおいて、一方から何かをもらおうと、すぐに他方への攻撃におもむくのがこの合成型PrNsトリオンということになる。雇われ用心棒や傭兵に加えて、すぐおだてに乗る「お調子者」もそのひとりである。ヤクザやマフィア、そして国家など、このパターンで争いごとへ介入するのを好むソシオンは案外多い。

程度つまりC自身のトリオンの構造などいくつかの要因によって決まってくるだろう。

弱者を助けようとしてひどい目にあつた人は、またひどい目に会うかもしれない、という「負の到来の予期」に脅えて、「冷たい傍観者」を決め込むようになる確率が高くなりそうである。

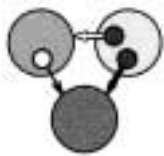
4 . PrNr-H

1) PNN-H.3-4 ; N : B C、P : B A N : C A



3行4列目のトリオンに移ろう。こちらのトリオンPrNrでは、なにもしていないのに攻撃されるリスクが発生する。私AとしてはB君がC君をイジめる(N : B C)のをただ見ていただけなのに、攻撃しているBから好意や友情を示された(P : B A)だけで、Cから恨みをうける(N : C A)。3列目のトリオンPsNrでは、予期される他者CからのN動作は、他者Bを助ける、愛する、同情するといったAの能動動作のリスクなのにたいして、この4列目のトリオンは、だれかを攻撃している人Bから好かれることが被害者Cから恨まれるリスクを生み出す。何もしていないAにとってはまったく不本意な攻撃というしかない。

2) PNN-H.4-4 ; N : C B、P : B A N : C A



4行4列目、反射型の最後は、3-4に近いパターンだが、例によって、BとCの関係が逆転している。今度はC君がB君を攻撃しており(N : C B) 私Aはその被害者のBから友情を告白された(P : B A)のである。攻撃者が多数派のミンナだったり権力者だったりするときは、Bの友情告白は気の弱い私Aにとって迷惑でやっかいな問題となる。Bの友情を受け取れば、私はミンナCの友情を失うだろう。場合によっては代わりに今度は私がいじめられるかもしれない。その攻撃の予期(N : C A)に怯えた私は、かわいそうなBの真心と、私の安全とを秤にかけて悩みながらPとNのあいだでハムレットのように振動することになる³⁷⁾。

37) だれかに可愛がられたらその人に嫌われている / を嫌っている人から何をされるかわからない、などといちいち気にしていたら、と人は言うかもしれないが、そういう人は幼い頃その種のトリオン攻撃に晒されることなくまっとうに育つた幸せな人であろう。たとえば、両親の仲が悪く、父が母に暴力をふるう、とする。父がやさしくしてくれると、母がこっそり意地悪をする、さらには虐待する、といったことはありそうなことだ。それだけでなく一般に紛争の当事者の一方から好意を示されることは、それなりの危険を招きうることであり、気が小さい人なら逃げ出したくなる危ないトリオンの事態なのである。

3-3、4-3合成版PsNrでも同様である。どちらがはじめに喧嘩を売ったかはよく分からないがともかく犬猿

8.4.2.3 誘導型PNN-Y

誘導型と名づけたトリオンは、最終出力がトリオンの対辺、BとCの関係についての予期である、という点に特徴がある。まず左辺から私Aと他者Bの関係が入力され、ついで私Aと他者Cの関係が決まれば、最後に他者Bと他者Cの関係についての予期ポテンシャルが出力される。このトリオンからBとCといういわば他人どうしの関係にたいする一定の願望や危惧が産出され、それに対応するデキゴトが他者に要請あるいは誘導されることになる。PNNなので、その予期は、危害が加えられる不安や、禍が降りかかる危惧など、いやでも否定性の強い予期とならざるをえない。

1 . PsNs-Y

1) PNN-Y.5-1 ; P : A B , N : A C N : B C

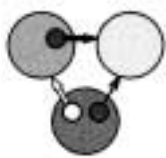


図8.9 aの5行目6行目の8個のパターンが誘導型のトリオンである。まず1列目PsNs型の誘導動作をみてみよう。5行目のトリオンは、つぎのようなストーリーになる。私AはB君に好意をもっている(P : A B)。そして私はC君が嫌いだ(N : A C)。このとき、3人がトリオンで連結されると、私のこころのなかに、B君もCを嫌いになればいいのに、という予期、黒い願望が発生する。そこまでいかなくとも、私が大切におもっている人Bさんに対して、詐欺師ではないかと疑っている男Cについて、あの人には気をつけた方がいいですよ(N : B C)などと忠告したくなる人は多いだろう³⁸⁾。

の仲のふたりを前にして一方を援助することは、その「肩をもつ」ことであり、人でも国でも他方から攻撃をうけるリスクが発生する。見て見ぬふりは卑怯だが、そのリスクを無視した援助や介入は一種の愚かさである。

3-4と4-4が合成された反射型トリオンPrNrは、3-3と4-3の合成されたトリオンPsNrと、ほぼ同じような特性をもっている。つまり、いがみあっている2人がいるとき、どちらかを好きになっても(P : A B)、好かれても(P : B A)、他方からは嫌われたりいじめられたりする論理的なリスクが発生する。このトリオンをもたないまま、愛と信頼のダイオンモデルだけで紛争地帯に飛び込むことは、せつかくの善意が実らないだけでなく、かえって不要な攻撃を誘発して事態をこじらせる、つまりソシオネットを複雑にもつれさせて結ばれを作ってしまう危険すらある。トリオンに規定された事態のもとでは、知恵をとまわらない善意や愛はしばしばかえって裏目にでる危険をもつ、と知るべきだろう。

トリオンの対辺にあたる裏側の事情を弁えない援助は、善意の援助であろうとなかろうと、敵対する側から人質攻撃を受けたりする危険がある。情報を集め分析し、BC間の対立の事情、構造やいきさつ(それはそれぞれの「物語」(歴史観、言い伝え、神話)として紡がれている!)を知った上で、可能な支援をリスクを引き受けて行う知恵と勇気が、人間関係でも外交でも3人以上のネットワークでは大切なようだ。

38) 余計なお世話だわ、ほっといて、ということにもなりそうだが、頼まれもしないのについて他人の悪口を言ってしまうのは、このトリオンの誘導力によるものである。

ふつうの子でも、仲良しのBが、大嫌いなCと仲良くしているのを見ると、どうしてあんな子と・・・という疑問が生まれて、こころのなかが不安定(PPNでN1個)になるだろう。これは嫉妬とは違う感情であることに注意されたい。嫉妬は、私AがBもCも両方とも好きな場合でも発生するし(意地悪のトリオンの節を参照)、動作順序からいっても、好きなBが私の方を振り向いてくれないのでAはCへN感情をさし向けるのである。

つまり、嫉妬はこの場合、PNP(BちゃんCちゃんだけと遊んじゃイヤ!)か、PPN(Bちゃんを盗ったCちゃんはいひどい!)というNひとつの不安定な構造をとることになる。Cを嫌いになり、BにもCの悪口を吹き込んだりして嫌いになるようにしむけたりする(=誘導する)のは、その不快な嫉妬がこころの中を不安定なまま駆け

2) PNN-Y.6-1 ; P : A B、N : A C N : C B



6行目の類型は、BC間の作用ベクトルが逆になっている。AはBを信頼して大切に思っているが(P : A B)、Cには不信感をもち警戒している(N : A C)とする。ここまではどちらもPsNsで同じだが、最終出力が5-1ではBからCへの負のふり込みなのに対し、このトリオンでは、CからBへ負の荷重・ネクロンが出力される(N : C B)。このネクロン性の予期は、BちゃんがCちゃんと仲違いしたらいいのに、という意地悪であり、いうならばトリオンの黒い希望である。それは、他者Bが他者Cに不信を抱くこと、負の動作つまり危害を加えることを期待するという点で、まさに「呪いのオペレーション」に近い³⁹⁾。

2 . PrNs-Y

1) PNN-Y.5-2 ; P : B A、N : A C N : B C



2列目の誘導トリオンは、AB受動のPrNsタイプである。5行目の欄にあるトリオンでは、私Aに好意をよせてくれる人Bがいて(P : B A)、私がCを毛嫌いしている(N : A C)とすれば、BもあのCを嫌いになってくれればいいのに(N : B C)、という勝手な予期が

巡ってたどりついたひとつの安定解なのである。

Cちゃんはひどい子だから、Bちゃん遊んじゃダメ!と考える=感情すると、Aのなかでは感情が安定する。リアリティの流れがループのなかで安定し、嫉妬からくる「認知的不協和」も消滅し、トリオン回路の「バランス」も回復して荷重供給は再帰的に同一のモードに帰することになる。つまり、「Cちゃんはひどい子や」「わざとBちゃんを私からとったにちがいないよ」「何度考えても、Cちゃんはひどい子や!」というふうに同一ループを荷重が回ることになる。

いやさらに、本人のCちゃんがいくらちがうと言っても「アンタは嘘つきや!隠しとるに決まってる!」とエスカレートしていく可能性がある。予期ポテンシャルはリアリティの感覚をサブスペースで生み出す(と仮定している)ので、このPNNトリオンの荷重回帰運動にしたがう限り、「Cはひどい子でなければならない」という予期があるべき現実として形成されることになる。じっさい幼い子どもたちのころのなかには、「ほんまにCちゃんてひどい子や、絶対ゆるしたらへん!」といったリアルな思いが(いずれ他のループの介在で簡単に破られるにしろ)しばらくの間渦を巻いてエスカレートしていくだろう。

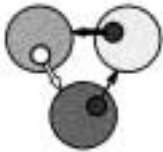
言うまでもないが、このシミュレーションはまだ洞察の足りない子どものための物語、というだけではない。立派な大人もこのリアリティ・トラップに簡単にはまる。そして一度はまると、隣人を「魔女」と称して火炙りにしてもまだあきらまないほどにそのリアリティの環は強く締まっていくのである。いわゆる「妄想」は、フィードバックを受けつけなくなったトリオン回路のループが、自己回帰を重ねて同一状態に帰するうちに、強固な安定性を獲得した荷重供給のサブスペースへの反映である。主体がこの妄想性の意識によって行為を誘導・外化するとき、他者との関係の歯車が相互に回りだして、はじめは思いつきのようなものに過ぎなかった初期状態の「妄想」がオブジェクトレベルで実体化し、その運動を社会的に自己実現していくことになる。人間の悲劇のかなりの部分が、この種のトラップに起因しているように思われるが、そのメカニズムの解明はまた後の課題である。

39) この6-1の動作は、反対にCがBに危害を加えるかもしれない、加えるだろう、という予期で、これはBを愛しているAを不安に陥れるだろう。BがCに負を加えたらいいのにという「期待」が5-1の予期で、CがBに危害を加えるかもしれない、という「懸念」が6-1の予期である。つまり、このトリオンは、愛する他者Bが嫌悪している他者Cから攻撃されるのではないが、という負性の予期、不安と心配の種を生み出すのである。

5-1と6-1が合成されると、好きな人ときらいな人が、手を切り、仲たがいすること、を期待するトリオンがうまれる。楔のトリオンでも見たように、自分Bが子どもの頃、Aちゃんから、Cちゃんのところへいって「もうアンタとは絶好や、とやうてこい!」とけしかけられた、という経験もよくありそうである。大人になって親Aになっても、自分の大切な娘Bと、自分には不良にしか思えない男Cのあいだの関係は、手を回しても仲かなければならない、不安で危険な関係である。このCがカルトの教祖だったりすると、この不安な予期出力はさらに強度を加えていくだろう(本号第2論文を参照)。

私のなかに発生する。もしAがもうすこし邪悪さをそなえていると、私を信頼してるなら、そのシルシにCに負をふり込め、いじめてみせろ、と要求するかもしれない。まさに、踏絵あるいは呪いのトリオンと呼ぶべき動作である⁴⁰⁾。

2) PNN-Y.6-2 ; P : B A, N : A C N : C B



Bが私Aを信頼してくれている (P : B A) とき、私AがCに不信を抱いている (N : A C) とすれば、私のなかに、CはBになにか悪いことをするかもしれない (N : C B) という危惧の念が発生するだろう。幼子BがAだけを頼りにしているとき、AがCを攻撃すると、悪者のCは幼いBを人質にとったりするかもしれない、というような推論は、論理的理性によって行われるのではなく、直観的といってもいいような感情のトリオン変換によって生み出される、と見る方が妥当だろう。

3 . PsNr-Y

1) PNN-Y.5-3 ; P : A B, N : C A N : B C



5行3列目はPsNrの誘導型である。私AはBを頼りにしています (P : A B) いまCさんが私にひどいことを言いました (N : C A) Bさん、Cを懲らしめて下さい (N : B C) という変換がこれに相当しよう。Cにいじめられた弟Aがつよい兄Bに言いつける場合などが考えられる。Cが強盗で、Bが警察、あるいは裁判所というもこのトリオンの一例である。「先生にいいつけるぞ!」とか「ぼくのお父さんおまわりさんだぞ!」という脅しは、このトリオンの生み出す制裁の「予期」にもとづいている⁴¹⁾。

40) この踏絵を強要するのはふつう権力者であるが、ときに弱者もこの種の黒い呪術をおこなう。私をかわいい(そう)と思うなら、あの我慢のならないCの首を切って!といった類のサロメ的誘導操作がそのひとつである。

告げ口や密告にはこの種の呪いが含まれていることを気にとめておく必要がある。
41) 上下合わせて合成したトリオンは、私Aが愛する人Bと私を憎む人Cのあいだの戦いを予期させるものになりそうである。私が希求してやまない光の国と、私を襲う暗黒の恐怖の国のあいだの戦い、善と悪の、光と闇の、神と悪魔の来るべき戦い、という神話的イメージが、弾圧を受けた教徒たちのあいだで、つまりCから迫害を受けているBの信仰者のなかで、来るべき歴史のリアリティとしてやすやすと信じられるのは、このトリオンの集合的動作に起因するのかもしれない。

2) PNN-Y.6-3 ; P:A B、N:C A N:C B



6行目のPsNrタイプは、BとCの関係が逆になる。私AはアナタBのことをとても大切に思っています(P:A B)。Cが私のことをつけねらっています(N:C A)。アナタにもCの手が及ぶかもしれませんが(N:C B)。どうぞ十分気をつけてください、などと手紙を書かせるのはこのトリオンである。ちなみに、この私Aを攻撃するCなる者は、ただの悪人である場合もあるし、秘密警察のような組織である場合もありうる。愛する者の安全を必要以上に心配する強迫症的「危害妄想」は、このトリオンの回しものかもしれない。

4 . PrNr-Y

1) PNN-Y.5-4 ; P:B A、N:C A N:B C



最後の4列目に移ろう。5-4はPrNrの誘導型で、出力はBからCに対してN; ネガティブである。私AはBから庇護されている(P:B A)。そこへCが私に攻撃を加えた(N:C A)。私のなかでは「Bさん、Cを撃退して!」という防衛的な攻撃の依頼やお願い(N:B C)が生まれるだろう。

Cちゃんにいじめられた、お兄ちゃん仕返して!と泣き虫の弟が言いつけるのもこのトリオンによる。自分でやり返して来い!といわれても、全受動型なので泣きながら庇護者に代理攻撃を祈るだけになる⁴²⁾。

42) 最後に、PrNr誘導型の合成モデルを用いて、すこしきびしい思考実験を試みる。幼い時から愛情や信頼をもって私に接し、私Aを大切にしてくれる家族や友人に恵まれていた(P:B A)としよう。たとえば、私Aが「反革命」や「反乱罪」のようなよくわからない罪で秘密警察Cから突然喚問された(N:C A)とする。もし不用意に私に接近するとBにも累が及ぶ、つまり同罪を疑われて追及される可能性は十分ある。私を愛する者がこれから危害を加えられる(N:C B)という予期は、人間として最大級の不安をひき起こす。

もしチャンスに恵まれれば、Aは何もしらないBに通報して危険を知らせ、自分から遠ざかるよう要請するだろう。あるいは、勇気をもって銃やペンをとり、凶悪なCと闘うよう要請するかもしれない。前者の行為を選択すればBはCとのトリオン連結を免れる。後者の行為によって、それまで私をダイオンのパートナーとして信頼し愛していた友人や家族は、私Aと同志として信頼の絆で互いに固く結ばれ、Cと闘うことになる。

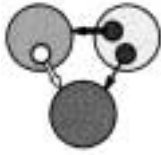
もし私が囚われの身で拷問を受けていたりすると、トリオンの事態はさらに深刻化する。私を信頼するBも逮捕・拷問され、この恐怖と苦痛を味わうかもしれない、という負の予期(N:C B)は人間としての私に耐えがたい苦痛を引き起こすだろう。この予期の苦痛を回避するには道は3つしかない。

ひとつは、私が本当にCに服従することである。自分が嫌疑をつけるような行動に加わっていたにしてもいなかったとしても、Bを人質にとられた私は、攻撃者Cへの絶対的服従を行動で証明しなければならない。Bを救うために私は信念を放棄したり、かわりに誰かあらぬ人を密告したりするかもしれない。自殺という道もあるが、多くのはあいそれは監視によって禁じられる。

あるいは、見殺しにする、つまり大義のためには止むをえない犠牲であると考えることである。Aのサブスペースでは、Bへの愛よりも大きくて重い荷重が、祖国や革命や自由といった理念Dにささげられる。Aは友人や家族よりも、祖国や自由や人類への愛を選んだことになる。というより、そのためにこの世界でもっとも愛する家族や友人を生贖にささげたことになる。ちょうどイサクを神に捧げたアブラハムのように。

さらにひどい場合は、これがトリオン理論から見えてきたことだが、Bを売る、という選択も可能である。たとえば自分を愛する(!)Bこそがスパイであった、と「密告」することによって、自分への拷問の手を緩めさせ、つかの間の苦痛からの解放を手にすることができる。この場合、トリオンはBとCにたいする荷重が正負反転する。愛する家族や友人を売って憎むべき敵に「寝返った」のである。この「裏切り」は、荷重世界と自己の母胎であるべき基本的信頼を根こそぎに転覆するので、以後ソシオンAは非常に不安定な自己像しか結ばなくな

2) PNN-Y.6-4 ; P : B A, N : C A N : C B



PrNr誘導型の6行目のトリオンは、上の5行目のものとBとCの向きが逆転している(N : C B)。やさしいBちゃんは私Aをいたわりいつも声をかけてくれる(P : B A)。Cは私にひどい意地悪をする(N : C A)。もしかしたらBちゃんもCから何かされるかもしれない、性悪のCのことだからきっとBをいじめるだろう(N : C B)。気の弱い受動型の私Aとしては、BちゃんCに気をつけて、と祈るしかないが、この種の状況にさらされつづけると、Bちゃん、もう私にかまわないで、私に近づくとときとアナタにも禍がふりかかるわ、といった悲しい予期が生み出されることもありそうである。

8.4.3 NNPトリオン

NNPトリオンは、まず私AとBのあいだがNネガティブな関係で、対辺のBとCがNネガティブであるとき、最後のAとCの関係がPポジティブとなる。はじめに否定と憎しみから入り、BとCの否定の媒介を経て、肯定と愛に終わるという興味ぶかい荷重変換が行われる。図8.10aでは、他のトリオンマットと同じように、ABとACが能動か受動かによって左から順にNsPs、NrPs、NsPr、NrNrと配列してある。それぞれの動作パターンについて、循環型J、反射型H、誘導型Yの順で対応する事例をあげながら検討する。

るだろう。裏切り者としてのAは、旧同志たちの侮蔑と糾弾の視線に怯えながら、Cのかざす「鏡像」(従順な市民?)に強迫的に同調するしかなくなるだろう、と予測できる。(裏切りの祭壇に捧げられた愛するBは、実は誠実な「私自身(の主体性)」であった、ということもありうる。)

じっさい、裏切りの記憶を消すためにも、あるいはさらに罪滅ぼしのためにも、私Aは、あたらしい主人Cを正しい偉大な愛すべき存在(表象)として祭り上げ、ひたすら崇拜しつづけるしかない。しかも、その強迫的トリオン動作は、パターンがPNNからNNPへ転換しただけで、ループのなかにNは2個あって回転に対する安定性をもつ。

それまで愛しつづけてきたところの者、父であれトロツキーであれ、を「反革命」「裏切り者」と無理やりに思い込みさえすれば、トリオンのループはますます「リアリティ」をもって順調に回転しはじめる。そのリアリティがリアルであるためには、Bは裏切り者でなければならず、Cは正統であらねばならない、のである。私Aの超人的献身が持続する限り、トリオンは封印された記憶のまわりを、怯えと怒りにまみれながら回りつづけるだろう。恐怖が希望を生み、希望が恐怖を育て、愛が憎しみへ、憎しみが愛へと変換されながら集散的熱狂へと向かう聖なる道を。

おそらく以上が20世紀の恐怖政治と個人崇拜をサブスペースで支えてきたトリオンの深層心理の概要である。共産主義とファシズムをめぐる希望と恐怖は、社会学的思考にとって最大のテーマであるとはいえ、その荷重はあまりに重い。以上は理論の射程を目測するための小さな投石にすぎない。

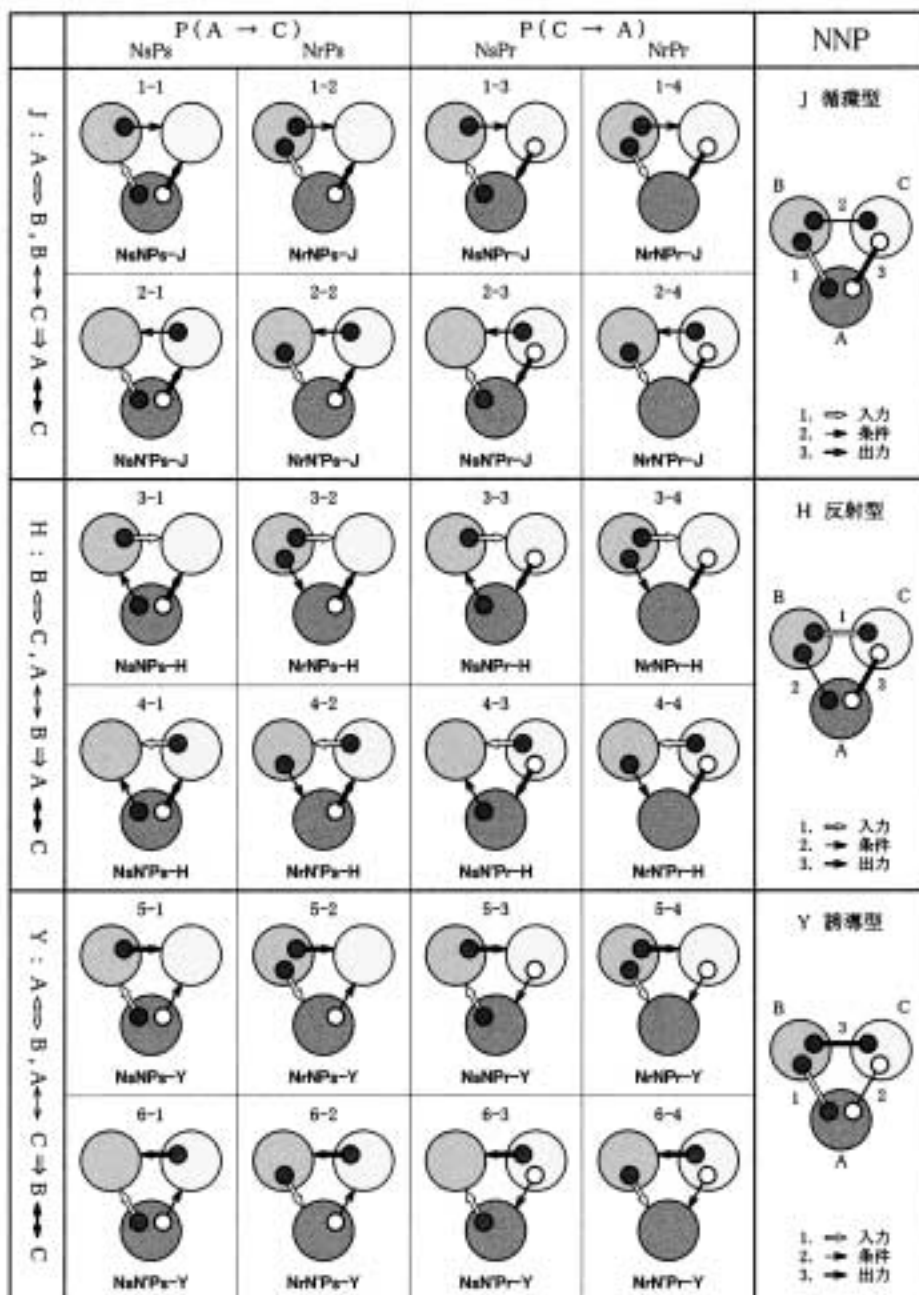


図 8.10a NNPトリオンマット

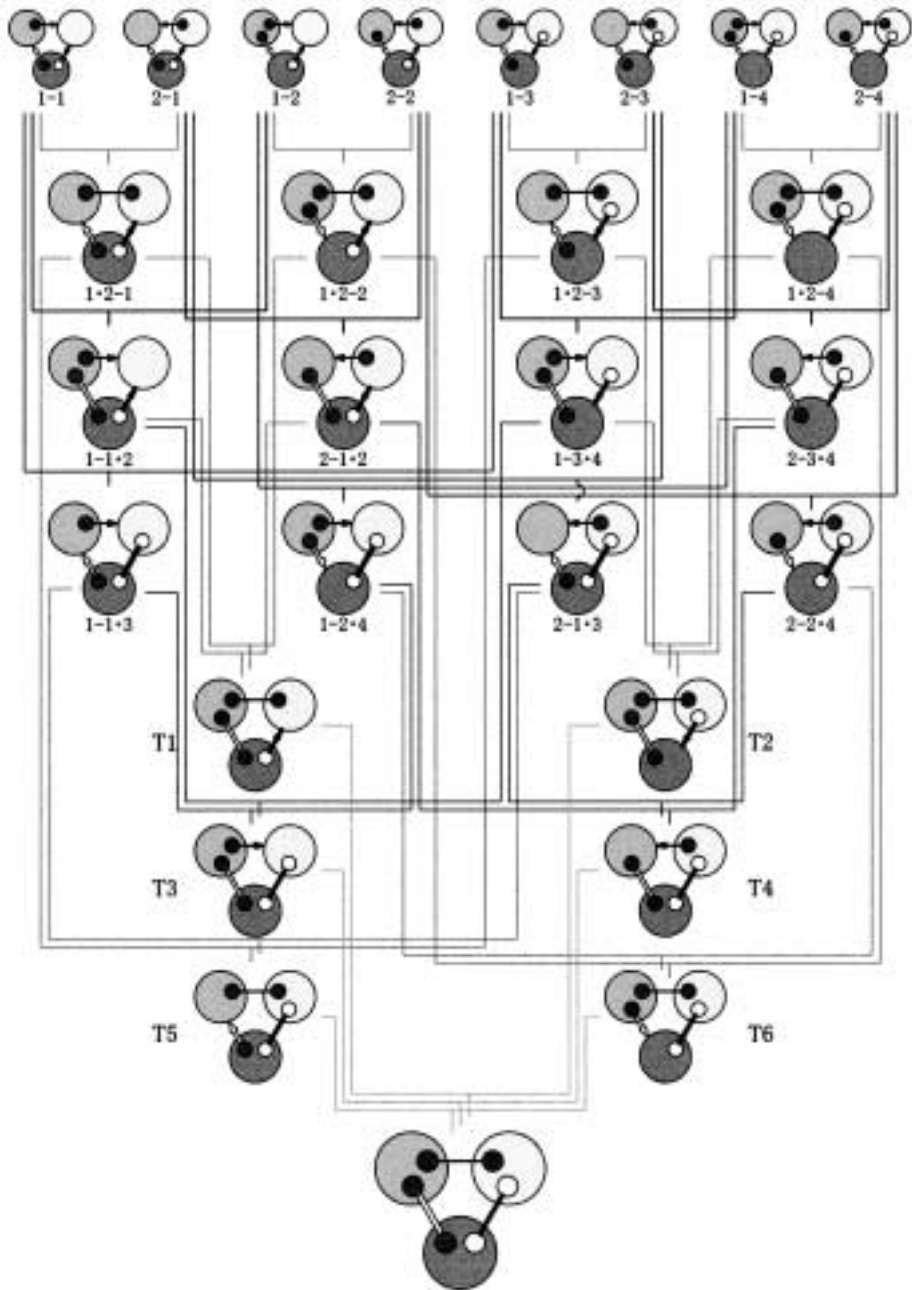


図 8.10b NNPトリオン合成

8.4.3.1 循環型NNP-J

1. NsPs-J

1) NNP-J.1-1 ; N : A B, N : B C P : A C



まず循環型。図左上端のNNPトリオン1-1からはじめよう。私AがB君に嫌悪感をもっているとする(N : A B)。このB君がCさんをいじめている(N : B C)のをみると、私AはかわいいようなCさんに同情のようなものを感じるだろう(P : A C) というタイプの動作である。

ここで私Aが、Bを本性邪悪な人間と思い込んで攻撃した、としよう。すると、このトリオン回路はほとんど自己実現してしまう。私Aから不信と排除のネクロンつまりネガティブな荷重を浴びたBが、より弱いCを攻撃する現実的可能性が生まれるからである。その結果、私Aのなかには、邪悪なBの攻撃の犠牲になったCにたいする一種の愛情、かわいそうに、大丈夫か、というようないたわりや激励、ときに哀悼のようなポジティブな荷重が発生する。そしてこのかわいそうなCを攻撃したことが、今度はBの残虐さ、性悪を証明するものとなる。NNPは憎悪を友愛へと変えるトリオンである、といえる⁴³⁾。

2) NNP-J.2-1 ; N : A B, N : C B P : A C



その下1-2は、私AがBを非難・攻撃している(N : A B)までは1-1と同じである。その時Cも一緒になってBを攻撃した(N : C B)とするなら、Cにたいして、好意的な感情が発生する(P : A C) というパターンである。ここではCが私Aとおなじ攻撃者であり、Bは犠牲者となっている。このPN変換動作は、攻撃者どうしの連帯を生み出す働きがある。だれかの悪口を言っているとき、仲間意識が盛りあがるのはこのためである。攻撃されるBは弱者やマイノリティであることもあるし、逆に権力者や有名人であることもあ

43) もちろんそれを可能にするのはAの腐りかけた頭のなかのBC否定結合でしかないが、その頭から生み出される憎悪と救済の幻想がBに対する現実の人種差別や民族浄化のN動作となって繰り出されるとき、オブジェクティブなレベルで労働や資源の収奪と階級的植民的支配の社会的円環となって、地球上に血なまぐさいNNP変換を実現することになることは、歴史が証明しているとおりである。

NNPの特性を理解するには、最初のAの攻撃の対象となるBを、たとえば性悪の不良、あるいは野蛮人などと置いてみると、もっと分かりやすいだろう。生まれながらにして根性がねじ曲がっている、などと虐待されればだれでも不良になるだろう。このトリオンは、おそらく、差別と排除のループを始動する最初の動力となる。このAによるBへの負の荷重、ネクロンの放射は、NNPトリオンのループを回るうちに、Aのサブスペースのなかで一種の救済行為のような幻想のリアリティを帯びてくる可能性が考えられる。Bへの執拗な攻撃・迫害(N : A B)が、かわいいようなCの救済(P : A C)のための戦いである、と(あくまで主観的に、しかししばしば共同主観的に)意味づけられる理論的可能性がある。人種差別的排斥暴力がしばしば「憎悪の宗教(hate religion)」とよばれるような社会運動として出現しうるとの理由であるかもしれない。なお、デモクラットや平和主義者の頭のなかでは、腐敗した権力者つまり金権政治の政権と党や奢り墮落した大金持ちがこの本性邪悪な悪魔的存在Bの役割を果たしている可能性が高い。

る。人種差別的秘密結社や、反対や粉碎を叫ぶ反政府運動の連帯は、この基本パターンの集合的バージョンである、といえる⁴⁴⁾。

2. NrPs-J

1) NNP-J.1-2 ; N : B A, N : B C P : A C



2列目はNrPs型のトリオンである。攻撃的なBが私Aに暴力をふるい(N : B A) つぎにC君もBの暴力のターゲットとなった(N : B C) としよう。このとき私Aのなかに、C君に対する同情と連帯の気持ちが生まれる(P : A C) というのがこのトリオンの動作である。被害者の連帯を可能にするのはこのトリオンである。虐げられたものの助け合いや団結もこのトリオンによって促される。このときAからCに送られるポジティブな荷重は、いたわりや見舞いのようなかたちをとるだろう⁴⁵⁾。

44) 1列目の1行目と2行目のパターンを合成すると、BとCが相互にN結合で対立しあう否定結合のトリオンができあがる。BとCはもはや敵どうしであり、どちらが先に攻撃したか、といったことはもはや問題にならない。一方が悪玉なら、他方は善玉なのである。であるはずである、いや、でなければならぬ。敵を憎むことは味方を愛することである。Cの敵であるBを攻撃することは、Cを支援することになる。どちらか一方を否定的に捉えると、自動的に、他方にたいする肯定的な指向が発生する。つまり、敵への憎しみが味方への愛に変わるのである。

この能動性のNNPトリオンは、闘う人を愛する人に変える魔法のトリオンである。その秘密の回路が、戦士の頭のなかにつくられたBとCのあいだのN結合、対立、矛盾、敵対関係である。

「否定の否定は肯定である」と宣伝した弁証法なるものがあつたが、しかし、ダメな社会をいくら否定したからといって理想の社会になるとは限らないし、悪い人間をいくら真剣に叱ったからといって善い人間に変わるわけではない。穴に穴をあけても丘にはならない。否定弁証法の「論理」は、トリオン回路のNP変換によって生まれるサブレベルの予期ポテンシャルを「唯物論」的な(オブジェクティブな!)リアリティと錯覚したものとされる。この魔法のトリオンが攻撃性Nを愛Pに変えるのは、私Aの頭のなか、サブスペースにおいての話なのだ。

45) ちなみに、この被害者AとCの結末は、襲撃者Bに対し、怒りをもって起ち上がったとき、いっそう強固になる。怒りが愛の絆に変換されるからだ。1-2 NrPs受動防衛型のNP変換に、2-1のNsPsの攻撃型の能動NP変換が加わるのである。能動型は攻撃することによって同志愛を生み出し、受動型は攻撃されることによって同朋への愛をうみだす。攻撃されることによって同朋へのいたわりや思いやりの友愛が生まれ、拳を振り上げて一緒に起ち上がることによって闘う同志への信頼が生まれる。しかも、敵を憎むことが同志を愛することにつながる、というより、なる。憎しみ・N荷重の全エネルギーがそのまま愛P荷重の強度に変換されるのだ。

一般に、AのBに対する反撃(N : A B)はBの側の反感とさらなる攻撃(N : B A)を惹起する。さらにCへの支援と友情(P : A C)は、Cからの感謝と連帯によって応えられる(P : C A)。加えて、多くの人間にとって攻撃性は愛よりも発動しやすい、とすれば、このNNP合体トリオンこそ、ヒトの社会的攻撃性を産出駆動する基本的エンジンである可能性が高い。

しかも、このNNP動作(N : A B, N : B C P : A C)は次の局面では、PNN動作となる。つまりCへの愛がこんどはBへの憎悪に変換される(P : A C, N : B C N : A B)。つまり、Bへの憎悪が強まればCへの愛が強まり、Cへの愛が深まればBへの憎しみが激しくなる、というもうひとつの振動回路が生まれる。

デュルケムが聖なるものの両義性と呼んで社会学的思考の神殿においたものは、この愛と憎悪の振動する超越荷重体であった可能性がたかい。この振動のなかで、荷重ポテンシャルが高圧化し、強烈なリアリティの感覚のなかで自他の荷重溶解が進み、一体のソシオスと化したソシオネットが栄光や救済や終末の幻想に向かっていくゆる歴史を刻んできた、とみることが出来る。

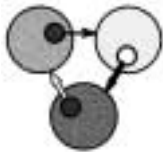
2) NNP-J.2-2 ; N : B A, N : C B P : A C



2-2は、N受動P能動NrPsのもうひとつのタイプである。BC間からBへの否定動作となっている。B君が私Aをいじめたとして(N : B A)。今度はそのB君をC君が攻撃している(N : C B)とする。私Aのなかには勇ましいC君にたいする自然な好意が湧いてきそうである(P : A C)。私Aを攻撃者や敵Bから護ってくれる人Cへの「好意」や「感謝」が最終出力である⁴⁶⁾。

3 . NsPr-J

1) NNP-J.1-3 ; N : A B, N : B C P : C A



3列目は、入力がN能動、出力がP受動のNsPrタイプである。まず私AがBを攻撃する(N : A B)。そのあとで、BはCを攻撃した(N : B C)として。すると、はじめの攻撃者Aのなかに、Cからの好意や感謝を期待する予期ポテンシャルが発生する(P : C A)。きっと感謝してくれるだろう、から、当然感謝すべきだといった押しつけがましいもの、あるいは、いつか私のことを思ってくれるだろう、というつつましいものまで、いろいろな濃度がありそうである。

2) NNP-J.2-3 ; N : A B, N : C B P : C A



2-3はBとCの間の動作方向が逆になっている。私AがBの悪口を言ったとして(N : A B)。ついでCもBのことを悪く言ったとする(N : C B)と、私はCが自分Aに好意をもってメールを送ったのかな(P : C A) などと考えるかもしれない。私の目がCの目や顔色を捉えようとするのはそんなときである。自分にたいする好意や諷刺の色彩が浮かんでいるかどうかを読み取ろうとするわけだ。私の方も目配せすると、2-1と合成されたことになり、図8.10bの2-1・3のパターン、つまり攻撃者のひそかな結託もしくは連帯が成立したことになる。

46) 上の欄の1-2と合成すると、Bから攻撃された場合、そのBと敵対しているC君のところへ逃げ込んだり、肩をもって味方したくなるという動作に対応するパターンとなる。「敵の敵は友」というよくあるわかりやすいトリオン動作である。

4 . NrPr-J

1) NNP-J.1-4 ; N : B A, N : B C P : C A



最後の4列目は、NrPrの全受動的のタイプである。まず私Aが乱暴なBから攻撃をうける(N : B A)。そのBがC君にも突っかかっていた(N : B C)とすると、私のなかに、C君が私に同情の声をかけてなぐさめたり援助してくれるのではないかと(P : C A)という期待や甘え、つまりプラスの受動的予期ポテンシャルが発生するだろう。

2) NNP-J.2-4 ; N : B A, N : C B P : C A

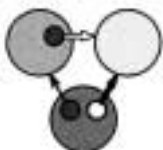


2行目のNrPrは、もっと理解しやすい。いじめっ子のBが私に意地悪をした(N : B A)としよう。そのBを今番長格のCが攻撃している(N : C B)とすると、私はCが私Aに好意をもって助けようとしてくれている(P : C A)ように感じる可能性が高い。この「予期」も、淡いかもしれない、から、きっとそうだ、それに間違いのない、まで確信度や強度は状況やループの回転速度によっていろいろでありうる⁴⁷⁾。

8.4.3.2 反射型NNP-H

1 . NsPs-H

1) NNP-H.3-1 ; N : B C, N : A B P : A C



今度は入出力の順序が異なる反射型のトリオンについて概観する。このトリオンは、BとCがはじめからネガティブな関係にある場合、AとBのあいだにネガティブな動作が入力されると、AとCのあいだにポジティブな予期Pを出力する。

まず1行1列目である。Bが一方向的にCを攻撃しているのを目撃したとしよう(N : B C)。このとき、それを見たAが、Bに嫌悪や反感を感じた(N : A B)とすると、つぎの瞬間被害をうけているCに対する同情やいたわりの感情が発生する(P : A C)と考えられる。Aは一種の傍観者もしくはヤジ馬の立場にあり、はじめからBを憎んだりはしてい

47) この1-4と2-4が合体すると、図8.10bの1・2-4となり、攻撃されるとその敵対者に助けを求め、という依存的な期待動作が生まれる。誰かからいじめられたら、すぐその人と対立している人の保護や支援を求める、というトリオン動作のパターンである。泣き虫の弟がお兄ちゃんの助けをもとめる場合、銃をもたない市民が警官を呼ぶ場合、侵略された国が友国の救援を求める場合など、これもいろいろなケースが考えられる。BとCのあいだのN結合さえしっかりと(頭の中に)出来てしまえば、この世でBの迫害をうけながら、あの世でCつまり神の救済を信じる、ということもループの荷重ロジックからは可能となりそうである。

ない、という点が反射型のポイントである。

2) NNP-H.4-1 ; N : C B, N : A B P : A C



その下の4-1は、Cの方がBを攻撃している、という点がちがっている。3-1ではCが被害者、ここではBが被害者である。このちがいは大ちがいであって、見ている私Aとしては今度は、被害者であるBの方に嫌悪感をもちことになる。たとえば、弱虫のB君に嫌悪を感じたりする(N : A B)と、その反作用のように、強者のC君につき声援を送ったりする(P : A C)かもしれない。ボクシングなどを観戦している場合にはよく見られる風景である⁴⁸⁾。

2 . NrPs-H

1) NNP-H.3-2 ; N : B C, N : B A P : A C



2列目3-2は、BがCを攻撃している(N : B C)までは3-1と同じだが、それを傍観していた私Aが攻撃者Bから攻撃を受ける(N : B A)という点が異なっている。いわゆる「とばっちり」攻撃を受けたわけだ。おそらく、私Aのなかには同じ被害者としてCに連帯の手をさしのべたい気持ちが湧いてくるだろう(P : A C)、というのがこのトリオンの動作である。

48) ふつうの人は、攻撃されると反撃する。売りことばに買いことばのように、負の応酬がつづいた結果どちらがどちらを攻撃しているのかわからなくなったのがBC合成パターン図1・2-1である。そんな場合、観衆がどちらかに反感をもつと、他方に好感をもつことになる、というのがこのNNPトリオン動作のポイントである。同じようなトリオンであるPNN(50頁)では、順序が逆になってどちらかに同情や加勢のような正の感情をもつと、他方にたいして負の感情が生まれることになる。闘っている側としては、いかに被害を強調して観衆の同情を引くか、あるいは逆にいかに相手に汚い手を使わせて第三者に反感を抱かせるか、が勝負になる。メディア社会では、最初にヤジ馬(視聴者)に反感をもたれた方(政府や政治家)が敗北する。

どちらか一方に嫌悪や反感が向けられ、他方に加勢あるいは同情が固定すると、否定結合を媒介にして、荷重の振幅増幅現象が発生する。先に48頁の注でも述べた現象で、Bにたいする罵声とCにたいする声援が次第にエスカレートし、はじめは何のかわかりもなかった観客や野次馬が熱中して布団やビンが飛んだり、ついに入り乱れて乱闘になったりするのは、この反射性のNNP変換の増幅振動による、と言える。

このトリオンの増幅メカニズムは、デモと警官隊の衝突やゲリラと政府軍の戦闘を街頭や茶の間で見物している民衆のなかでも働いている。どちらがどちらを先に殴ったのか、どちらが卑怯な手を使ったのか、もともとの原因は何なのか、一般にそれぞれの言い分もちがうし、第三者が目撃した場面もちがうことが、紛争問題を複雑で困難な「藪の中」の「多重現実」にしてしまう。

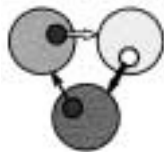
2) NNP-H.4-2 ; N : C B, N : B A P : A C



その下のトリオン4-2では、Cの方がBを攻撃している(N : C B)。Bからとばっちり攻撃を受けた(N : B A)私Aは、それまで好意をもっていたわけでもないCを応援したくなるだろう(P : A C)。Bの私Aに対する攻撃は、Bの勘ぐりや思い違い、あるいはなにかの偶然とかいろいろありうるが、私にとっては理由のない不当な攻撃としてとらえられる。しかし、いったん私AがCに味方すると、私がCと結託しているというBの勘ぐりは現実となる。つまり、「予言」は成就されやすい。

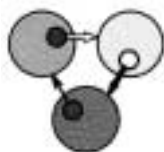
3 . NsPr-H

1) NNP-H.3-3 ; N : B C, N : A B P : C A



3列目NsPrタイプに移ろう。BがCを攻撃しているとき(N : B C)それを見た私AがBに対して反感をもったとしよう(N : A B)。その理由は、Bが強すぎるとか、卑怯だとか、ただ気に食わないとかいろいろありそうだが、AはBを攻撃しながら、Cから感謝されてもいいような気がしてくるだろう。攻撃者Bを攻撃する私Aは、犠牲者Cから感謝や尊敬の感情を期待⁴⁹⁾あるいは要求する、ということはこのトリオンは示している。

2) NNP-H.4-3 ; N : C B, N : A B P : C A



4行目のNsPrでは、BとCの関係が逆になっている(N : C B)。このトリオンでは、BはCの攻撃のターゲットであり、私Aは攻撃されている方の犠牲者Bを攻撃することになる(N : A B)。私Aは、Bを攻撃しながらCの顔をうかがい、そこに自分にたいする好意の色が浮かんでいることを期待する(P : C A)かもしれない。ちなみに、Aにとっての攻撃の理由は、Bがみっともない、とか泣き虫だとかいろいろでありうる。攻撃の種類も、アカンベエだったり悪口だったり、迫害だったり反対に抗議だったり、程度も種類もさまざまである。

49) この期待が目的になると、Cからおくられる尊敬や名誉のために、攻撃者Bと闘うことになる。ループが一巡して、時間順序としてはPNNに近づいたのである。犠牲者Cがすでにこの世に亡い場合もあって、加害者Bを倒すと、Cの霊が「浮かばれる」ような気がするのも、おそらくこのトリオンの働きである。BとCは否定結合を介して荷重のシーソーを形成しているからである。

4 . NrPr-H

1) NNP-H.3-4 ; N : B C、N : B A P : C A



4列目は全受動型NrPrトリオンである。たとえば、酒癖の悪い男Bが妻のCさんにひどい暴力をふるっている(N : B C)としよう。近くでおろおろしていたら、今度は私Aにナベが飛んできて怪我をってしまった(N : B A)。やさしいCさんがお見舞いに来てくれるかも(P : C A)といった期待がベッドで寝ているAの枕もとで生まれるかもしれない。Bは警官隊、Cはデモ隊とおいても同じようなシミュレーションができる。

2) NNP-H.4-4 ; N : C B、N : B A P : C A



この4-4のトリオンでは、攻撃されているのはBで、攻撃しているのはCである(N : C B)。その巻き添えになって無関係の私AがBに攻撃されたとしよう(N : B A)。おそらく、私Aのなかには、Bより強いCが私を助けてくれるだろう、くれるべきである、といった予期(P : C A)が生まれる。場合によっては、Cにお見舞いを期待したり、被害補償を要求したりするかもしれない。Bが加害者の少年、Cはその子に体罰を加えた親や教師といった場合が考えられる⁵⁰⁾。

8.4.3.3 誘導型NNP-Y

1.NsPs-Y

1) NNP-Y.5-1 ; N : A B、P : A C N : B C



最後の誘導型を簡単に検討しよう。これは、AB間が前提の入力となって、対辺BC間が予期出力となるようなトリオン動作の類型である。まず、1列目のNsPs全能動型1行目のトリオンで、AがBを憎悪して(N : A B)、Cを愛していたとする(P : A C)。このとき私Aのなかには、嫌いなBが大切なCに敵対して危害を加えるのではないかと不安もしくは疑念が発生しうる。ひょっとしたら、という不安から、きっとまちが

50) 合成するとBCが否定結合をした反射型のトリオンができあがる(図8.10b)。NrPr受動型は、Bから害を加えられたとき、じっとCの救済を待つ信仰の精神と通じるものがあるかもしれない。Nr : B Aが受難の試練で、Pr : C Aが救済と救済、そしてもちろん、Bが悪魔もしくは異神、Cが主神である。もちろん、BとCの関係をどうとらえるのか、によって異なった解釈がいろいろと可能である。Bは神に衝突く魔物、魔女かもしれないし、父なる神に呪われた者かもしれない。そもそも神の反対物、つまりその否定が神であるような荷重体ということもありうる。このばあいも、BとCの関係は、指向する意識-私にとって「外部」であり、私からは見えない文字通りの他者性の回路、暗い回廊(socio-bridge)である。

いなく、という確信まで、その予期の確度が状況や学習によって異なるのは他のトリオンの場合と同じである。

2) NNP-Y.6-1 ; N : A B, P : A C N : C B

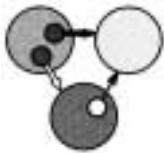


6列目はCからBへのネガティブな動作が予期出力となる。私Aは昔からBが大嫌いで(N : A B) 最近Cさんが好きになった(P : A C)。CさんにもBさんを嫌いになってほしい(N : C B) という私のこころのなかに発生する思いがこのトリオンの生み出す予期である。一種の意地悪であるが、これは嫉妬によるものではない。3項関係の論理動作によるものである。私がBに不信を抱いているとき、友人のCに、Bを信じてはいけな、と忠告するのは誠実な態度でありうる。Bと闘おうとするときに、Cをおだててけしかけるのもよくある策謀のひとつである。

上のトリオン5-1は、出力が愛している者にたいするネガティブつまり破壊的動作の予期なので脅威や懸念が生まれ、6-1は憎んでいる他者Bにたいする否定動作の予期なので、ポテンシャルは期待や歓迎というポジティブなモードで生きられる、と考えられる⁵¹⁾。

2 . NrPs-Y

1) NNP-Y.5-2 ; N : B A, P : A C N : B C



2列目のトリオンNrPsは、入力受動型でAとBの関係の向きが反対になっている。たとえば以前からBから意地悪されていた私Aは(N : B A) 私が好きになった友だちのCちゃん(P : A C)にもBが意地悪するのではないかと心配したりするだろう。マフィアのBは私をひどい目にあわせた、このままでは家族Cも何されるかわからない、といった不安や脅えがこのトリオンの出力する予期である。

51) 5-1と6-1が合体すると、図8.10bの5・6-1になる。これはたとえば、自分が大嫌いな人Bと大好きな友だちCは、犬猿のなかであってほしい、あるべきである、といった予期をうむトリオンで、この予期がしばしば本当に余計なおせっかいというべき意地悪を誘う原因となる。不信を抱いている人Bと、信じている人Cが信頼しあっている、というようなことは、大人のトリオンにとっても矛盾であり、不安定な動作となる。かわいい息子Cに、おまえはイカサマ教祖Bにすっかりだまされてる、と言ったり、どうしても仲を裂かなければ、と思ったりする親のこころの動きもこのトリオンで説明できるだろう(第2論文を参照)。

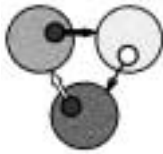
2) NNP-Y.6-2 ; N : B A、P : A C N : C B



6-2は、BとCの関係が逆になる。Bちゃんが私Aをいじめる(N : B A)。私はCちゃんが大好きだ(P : A C)。Cちゃん、お願いだからBちゃんを懲らしめて！(N : C B)というタイプの「嘆願」がこのトリオンの出力である。Cが先生なら、Bにいじめられた私Aは、先生に叱ってもらおう、とBのしたことを「言いつけ」るかもしれない⁵²⁾。

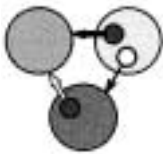
3 . NsPr-Y

1) NNP-Y.5-3 ; N : A B、P : C A N : B C



3列目NsPr、2列目のNrPsと、AB、ACの受動能動がちょうど反転している。私Aは先輩のBさんが嫌いだ(N : A B)。後輩のCちゃんは私を慕っている(P : C A)。私に嫌われたBは、私をしたうCに意地悪するかもしれない(N : B C)。この不安がトリオンの予期出力である。Aが母、BとCが兄弟とするともっとわかりやすい。お兄ちゃんは信用できない、きっと弟をまたいじめるにちがいない、といった猜疑が出力である。

2) NNP-Y.6-3 ; N : A B、P : C A N : C B



6-3は、BとCのあいだのN動作が逆になる。Bはひどく憎たらしいやつだ(N : A B)。Cさん、もしアナタが私を愛しているなら(P : C A)。Bの首を切ってください(N : C B)などという意地悪なそそのかしは、このトリオンの動作によるものである。サロメのトリオンとも呼ぶべき、かなり普遍的な動作パターンだろう⁵³⁾。

52) この上下の合体したトリオン5・6-2では、BとCのあいだがこじれて敵対関係になっている。Cの身を案じたAはBの悪意ある攻撃の可能性をCにささやき、またCを頼ってBへの復讐をけしかける。攻撃を受けてだれかのもとに逃げ込むNrPsタイプの人、自分を攻撃する人と自分が信頼をよせる人が敵対することが当然である、とトリオンのなかで思い込み、そのようにトライアドの運命の歯車を回す舞台回しの役割を演じるのかもしれない。

53) Bが憎たらしい、という私の能動型N動作(N : A B)は、Bは性悪で私に敵意をもっている(N : B A)というN受動型トリオン6-4へ(Aの頭のなかで)反転しやすい。私を愛しているなら、Bをやっつけてください、と王妃がいうとき、このABの能動・受動が勝手に合成されて、どちらが悪意をもっているかわからなくなっているのだろう。
王妃やサロメの感情のあふれる頭のなかのループでは、悪者のBを王であるCに攻撃させる、という誘導動作(N : C B)も方向が反転する。きっとあの家臣Bは王様Cにも謀反を企てています(N : B C)。本人が否定してもそうにちがいません、謀反人のだれが本心を明かしますか、という「論理」のループが回るに違いない。この疑心暗鬼の荷重ループが頭のなかでいったん回りはじめると、後は(しばしば王といっしょに!)トリオンの生み出す裏切りの「予期」に囚われ、それを文字通り「リアリティ」として生きてしまう可能性がある。サロメをはじめ、数々の「讒言」の背後には、トリオンの双結合によって強化されるそれなりの主観的真実がある、というべきだろう。

4 . NrPr-Y

1) NNP-Y.5-4 ; N : B A、P : C A N : B C



5行4列目NrPrは全受動型のトリオンである。たとえば、Bは私を憎んでいる(N : B A)、私に近づくと(P : C A)、貴方もBに狙われるかもしれない(N : B C)だから、私のことはかまわないで、という哀しい思いを生み出すのが、このトリオンである。私Aが「逃亡者」で、Bが「刑事」、そしてCは暖かいところをもった未知の市民、といったシナリオも書けそうだ。私は警察Bに追われている身だから、私を匿ったりすると貴方にも累や危害が及ぶ、でも私はアナタが.....というダイオンとトリオンの干渉が予期の振動を生んでドラマを盛り上げる⁵⁴⁾。

2) NNP-Y.6-4 ; N : B A、P : C A N : C B



最後、6行目の受動型トリオン6-4は、負がBからCへではなく、CからBへ送られている点がちがっている。Bは人でなし、ひどい人です(N : B A) もし私を愛して信じてくれるなら(P : C A) どうかBを懲らしめて下さい(N : C B) という一種の「祈り」を生み出すのがこのトリオンである。Bを凶暴な敵、私Aをその犠牲者とする、この動作は、愛国者の青年やゲリラ戦士を「立派に戦え」と戦場へ送り出す激励のトリオンに相当するだろう⁵⁵⁾。

54) 「逃亡者」という60年代アメリカと日本で高視聴率を得たテレビドラマがあった。無実の妻殺しの罪で執拗な刑事ジェラードに追われる中年の医師リチャード・キンブルが、逃亡先でたまたま出会う市民の善意で、毎回辛くも追及をかわしていく筋立てである。真犯人を探し出すための孤独な逃亡をつづける医師は、毎回のようになだれか(多くは女性)と出会い愛と信頼が生まれるが、「私は貴方への愛をもつが、ふたりで幸福に生きることはできない。私は刑事に追われる身であり、私を匿うと貴方に危害が及ぶ、」と、結ばれない愛の絆を断ち切り孤独で困難な逃避行がつづけれ、ふたたび新しい都市へ逃亡の旅にでる、というパターンである。結ばれようとするダイオンの愛が、トリオン動作の干渉によって不可能となるところが毎回の山場であり、ドラマのソシオンの核心部である。ふたりの愛の不可能性にもかかわらず、孤独ながらも自立しようとする市民にたいする信頼と友愛への希望のようなものが視聴者の胸に残される、という点で、(今思えば)どこか「葛飾のトラさん」とつながるところがある筋立てであった。

55) Bが植民地主義者、Aが原住民、Cが国際世論としても同じような「論理」が成立する。私Aは差別主義者のBによって人権を剥奪蹂躪された。もし貴方が弱い立場にある者を尊重しようと思うのなら、Bに対して抗議の声をあげ、断乎としてBと闘うべきである、というおなじみの論理である。Bを軍国主義者、私Aを今にもその軍靴によって踏みじられようとしている平和、Cを平和を愛する市民、と置いてもおなじようなシミュレーションが成立する。

戦争と平和、権力と民衆、差別と人権などといった2項のあいだに決定的な否定関係・N結合を前提条件として挿入すると、被害者のトリオンが生み出す荷重論理から脱出することは極めて困難、むしろ原理的に不可能となる。苦しみを負う犠牲者私Aは、ヒューマニズムという宗教の負性の神となる。虐げられた私の苦しみを痛ましく思う者Cは、私Aへの尊い愛の名において、冷酷な敵Bと戦いの火蓋をひらけ!という荷重論理が、やさしいヒューマニストたちのところを捉えて離さない。ヒューマニストを無情な戦士へと変換する驚異のトリオンであり、20世紀の革命と戦争の多くは、このトリオンによって点火され、最終的に東西冷戦という分裂結合のデッドエンドに至った、と簡単に言うことができよう。弱者である私Aは、ヒューマニスト市民Cにたいして軍神となる。邪悪なる帝国主義者にして凶暴な差別主義者である階級敵Bにたいする容赦ない戦いの進軍ラッパが、この負性の神(の代理人をもって任じる司祭・インテリゲンチヤ)によって吹き鳴らされたのである。その負性の神の名は、マルクスとエンゲルスによって(失うべきものは鉄鎖しかない)「プロレタリアート」とよばれた。今日ゆたかな国々において祀られる「人権」はその孫、あるいはむしろ老いたる祖父である。

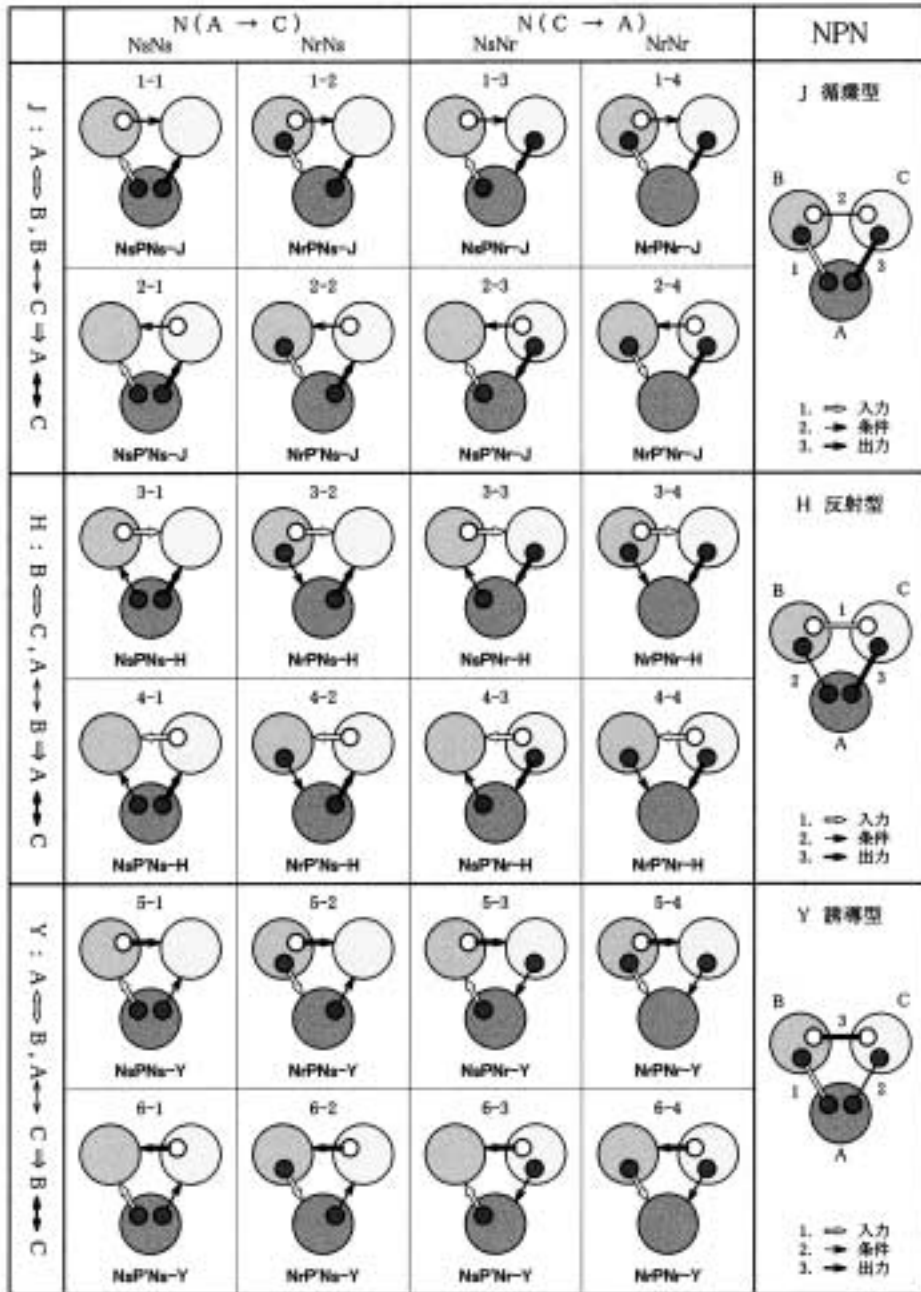


図 8.11a NPNトリオンマット

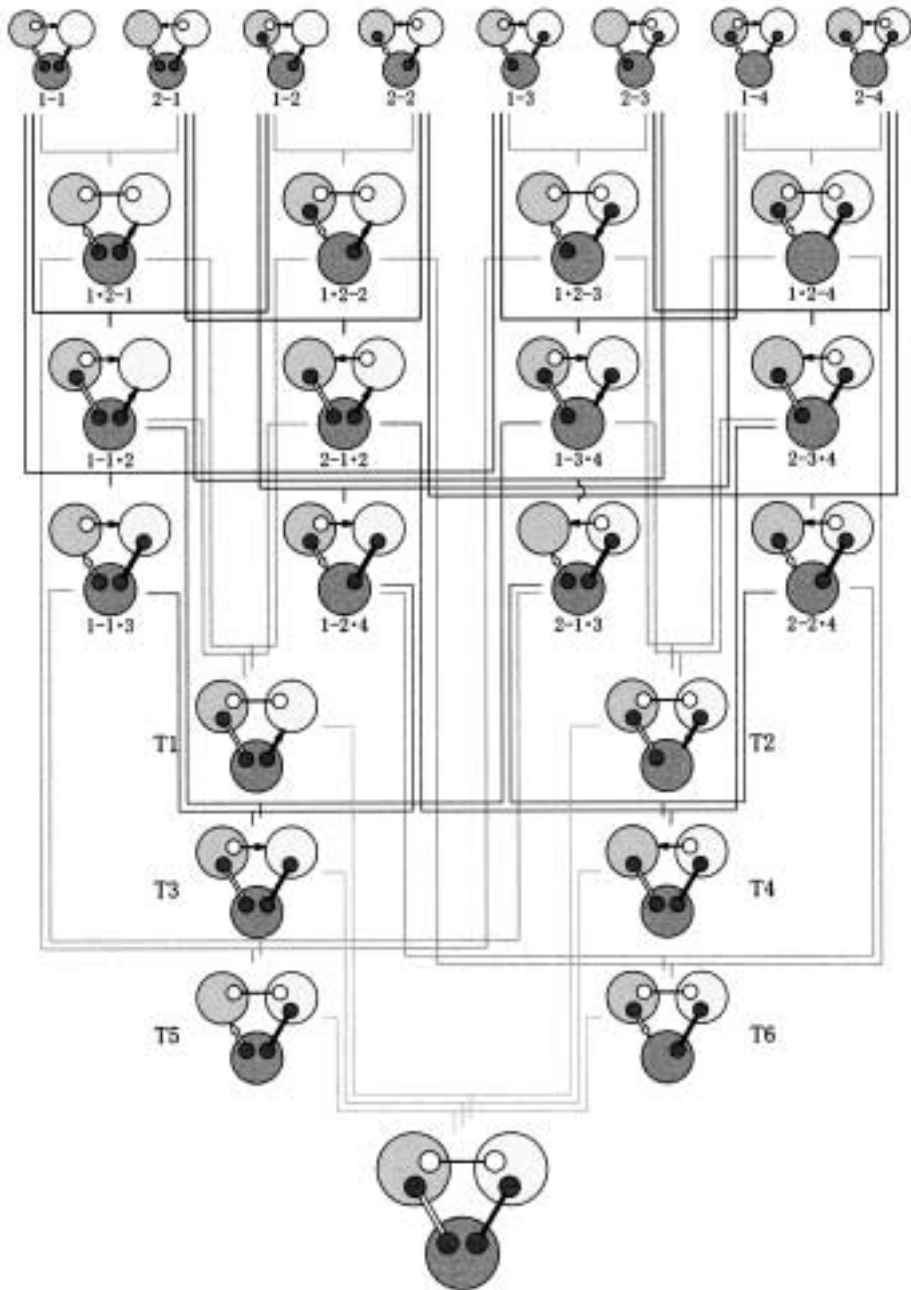


図 8.11b NPNトリオン合成

8.4.4 NPNトリオン

最後に、NPN型のトリオン変換について整理しよう。基本となるのは、ABが負、BCが正である場合は、ACが負になるという変換（1循環型J）である。すこし順序を変えて、BCが正であるとき、ABが負であれば、ACが負である、という変換（2反射型H）も考えられる。あるいは、ABが負、ACが負であれば、BCは正である、という変換（3誘導型Y）もある。NPNトリオンは、敵の味方は敵である(J)、あるいは敵と敵は結託する(Y) といった予期を生成する。

8.4.4.1 循環型NPN-J

1. NsNs-J

1) NPN-J.1-1 ; N:A B, P:B C N:A C



まず循環型の能動タイプNsNsである。私AはBを嫌悪している、あるいはBに不信をもっているとしよう（N:A B）。このとき、BがCを誉めたりすると（P:B C）、今度はCに対する不快感や不信感が私のなかに生まれる（N:A C）、というのがこのNPN変換である。もっと単純に、私AはBが嫌い、その嫌いなBが好きだという人や食べ物は何んでも嫌い！といってもいい。坊主憎ければ袈裟まで憎い、ということわざは、このトリオン動作に対する洞察を表現している。もちろん、Aと直接何の関係もないCは、このNPNトリオンによって、謂れのないN動作をAから浴びることになる。悪意の到来を説明あるいは理解するうえで重要なトリオン類型である。

2) NPN-J.2-1 ; N:A B, P:C B N:A C



同じ能動性のNsNsであるが、対辺がCからBへの逆動作になっている並列型のトリオンである。私AはBが大嫌いである（N:A B）。このBは野球チームでも人でも国でもいい。そのBをCは大好きだ、という。それを知った私は、自分がこれほど嫌いなものを好きだといってはばからないCを嫌悪の目でみる可能性が高い。信じられないことをいう人間だ、と不信感すらもつかもしい。この嫌悪感あるいは不信感を生み出すのがこのNPNトリオンである。自分Aと意見や趣味のちがう人Bを排除あるいは隔てる効果がある。パーティでは政治の話は禁物とされるゆえんである⁵⁶⁾。

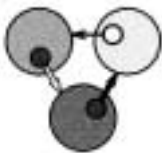
2 . NrNs-J

1) NPN-J.1-2 ; N : B A , P : B C N : A C



2 列目NrNsは、最初にAがBから嫌われる攻撃受動型のトリオンである。まず1行目の1-2は、私を嫌う人が好きな人は嫌い、という変換である。たとえば同僚のBさんが私Aを批判したとしよう。単純な私はこの批判を悪意の非難とうけとってしまった(N : B A)。その後、BさんがCをほめたり賛成した(P : B C)とすると、私AはそのCを貶したり反対したくなるだろう(N : A C)。Cは人でも意見でも同じである。私Aを叱ってばかりいる先生Bに可愛がられているCさんは、私の自然なトリオンにとっては、憎たらしい人なのである。

2) NPN-J.2-2 ; N : B A , P : C B N : A C



2 行目NrNsは、BとCの動作が逆転する。私Aを嫌う人Bを好きな人Cは嫌い、という変換でループのなかに逆ベクトルがない分だけ素直なトリオンである。B先生は私を批判した(N : B A)。CさんはそのBの肩をもった(P : C B)。私はCが気に食わない、もういっしょにご飯なんか食べたくない(N : A C) というようなトリオン動作は、子どもでなくても経験する。子どものように素直で単純なトリオンが大きな大人にも保存されていたのである⁵⁷⁾。

3 . NsNr-J

1) NPN-J.1-3 ; N : A B , P : B C N : C A



3 列目はBを攻撃するとCから攻撃されるかも、という脅え、というより抑止力を生み出すトリオンである。まず私AはBが嫌いである(N : A B)。そのBはCを慕っている(P : B C)ので、Bにひどいことをすると、Cが仕返しをするかもしれない(N : C A) という予期生成のパターンである。私Aが嫌っているBさんから好かれているCさんは、私を嫌っ

56) 上下の欄を合成すると、BCが相互結合した図8.11bの1・2-1となる。私Aが嫌いな人と仲のいい人は嫌い!という能動嫌悪のトリオンであり、この動作パターンにとりつかれたり病みつきになったりすると(周りの人には)厄介な人になるかもしれない。しかしBが本当に警戒すべき危険な人間や組織あるいは敵国であるばあいには、Aにとって必要な免疫機能動作となるだろう。怒れる戦士のなかの攻撃トリオンである。

57) 上下合成してみよう。図8.11bの1・2-2である。私がBから謂れのない攻撃を受けたとする。そのBの仲良しを私は憎悪するかもしれない。すくなくとも、警戒したり不信感をもつことはありそうである。Bがいじめっ子で私Aがいじめられっ子である場合、このトリオン動作はかなり重要である。つまりクラスの向こうで仲良くBと談笑しているクラスメイトたちCは、Bの一味であり、孤独な私にとって警戒と嫌悪ひいては憎悪の対象となる理論的可能性があることをこのトリオンは教えている。

ているような気がする。子どもたちはある時期、トリオンの投射するこうした不安におののきながら、それなりに乗り越えて大きくなる、と考えられる。

2) NPN-J.2-3 ; N : A B, P : C B N : C A



2行目の $N_s N_r$ は例によってBCのあいだが反転する。私AはBがきらいだ(N : A B)。CさんはBが好きだという(P : C B)。私はCにきらわれるかもしれない(N : C A)。ちいさな心配だが、おおくの日本人がもっている心配を生み出すトリオンである。もっと能動的に、私がBを非難攻撃した、としよう。そのときCはBを助けようとした、あるいはBの肩をもった。こんどはきっと私がCから攻撃されるあるいは叱られる番だ、という「予期」は、確度が高いほどAのBへの攻撃を抑止させる力として作用するだろう⁵⁸⁾。

4 . NrNr-J

1) NPN-J.1-4 ; N : B A, P : B C N : C A



4列目は全受動の $N_r N_r$ 変換で、敵の友は敵、の受動版である。Bちゃんは私Aにいつも意地悪をする(N : B A)。そのBちゃんがCちゃんと遊んでいる(P : B C)。どうせCちゃんも私に意地悪をするにちがいない(N : C A) などという僻んだ予期を生み出すのはこのトリオンである。あるいは、私Aを非難するB君からは悪意が感じられる。そのB君は最近C部長のご機嫌をとりはじめた。そのうち私はC部長から何か言われて飛ばされるかもしれない、といった風な妄想風の予期もこのトリオンの産物である。この受動バージョンのNPNトリオンは、広場や職場の片隅で、案外広い範囲でうごめいているのではないが、ひとつ冷静に考えてみる必要があるようだ。

58) 上下合成すると、図11bの1・2-3パターンができる。BとCの関係が双方向的で、P結合している。私Aが誰かBを攻撃した場合、その同盟者Cの反撃を食らう可能性があることを、このトリオンは知らせてくれる。Bをいじめると、その仲良しのC君から仕返しされるかもしれない、というわけである。他人の悪口をいうと、いずれそれは自分に帰ってくる、というのもこのトリオンである。ネクロンのブーメラン効果とも呼んでおこう。もし自分をはじめにブーメランを投げた、つまりBを傷つけたことに気づかなければ、このネクロンの帰還は、たたりや因縁として説明され、納得されることになりそうである。

この類型はすし興味深い思考実験を与えてくれる。ここでもし、はじめのAからBに対するN動作が禁止・抑圧されて意識から消去されたとしたらどうなるだろうか。ソシオンAの意識は、どこからともなく滲みだしてくる負性のベクトルにさらされることになりはしないだろうか。つまり、いわゆる「強迫神経症」の多くは、抑圧されたこのN動作(N : A B)によってポンプアップされた荷重が、トリオンの回廊(ソシオブリッジ P : B C)を通して、見えない他者性のネクロンと化して誰か何か、特定できないCの方から私Aへと襲来するトリオン性の病理である、と考えることができそうである。「症状」はこのネクロン荷重の意識できないうねりが何で、もしい何かシニフィアンCをとらえた時に発症し、その本来恣意的な対応づけが防衛的に固着したものであろう。

なんと、フロイト以降、人類の科学的探求の目を惹きつけて来た「無意識」とは、意識から排除された(しかし現に荷重ポテンシャルとしては現に出口を求めて、あるいは淀んだり、ときに煮え立ったりしている)トリオンの回路動作であり、主体によって否認され、隠蔽されたトリオン回路の影の部分であった可能性がある。

2) NPN-J.2-4 ; N : B A, P : C B N : C A



2行目の受動型NrNrトリオンである。たとえばB議員が私Aを論難した(N : B A)、そのB議員をC君が尊敬しているらしい(P : C B)、C君は私に反対票を投じるかもしれない(N : C A) などという推測もこのトリオンの生み出す予期のひとつである。もっと単純に、私を嫌いだといったBくんのところへ駆けていったCちゃんは、もう私とは遊んでくれないかもしれない、といった不安もこのトリオンの出力である。⁵⁹⁾

8.4.4.2 反射型NPN-H

1 . NsNs-H

1) NPN-H.3-1 ; P : B C, N : A B N : A C



反射型のトリオン動作について簡単に調べる。姉のBちゃんは妹Cちゃんをいつも可愛がっている(P : B C)。私Aは、Bちゃんのことを嫌いだとおもったら(N : A B)、Cちゃんも嫌いになってしまった(N : A C) などという場合が考えられる。あるいは、私Aを妹だとして、ふくれた私が、お姉さんがいつも大切にしている縫いぐるみCを放り投げたりするのも、このNsNsトリオンの動作である。もちろん、Cちゃんと縫いぐるみにとってはとんだ災難である。2者関係で推論するかぎり、何でそんな目に会うのかわからないだろう。

2) NPN-H.4-1 ; P : C B, N : A B N : A C



今度はCの方がBへP動作を送っている。たとえば、妹Cはいつもお姉さんのBに引っ付いている(P : C B)、私Aは、Bちゃんを大嫌いになった時期があるが(N : A B)、そのときは妹のCも憎たらしく思えてしょうがなかった(N : A C)。Bが先生で、Cが先生を慕う

59) 上下を合成したのが図11bの1・2-4である。この受動型NPNトリオンは、確かに被害妄想のトリオンである。Bから害されたAは、Bの仲良しと聞いただけで、その友人(つまり一味)のCからあらたに危害を加えられることに脅える。BとCはたまたまのふたりの出会いと友情を楽しんでいるかもしれないにもかかわらず、である。この受動性のNNトリオンを刷り込まれると、他者の楽しそうな交友が、自分に対する迫害の相談のように見えてくる可能性が高い。それは、子どもから大人まで、遊び場から職場まで、社会の片隅でかなり広範囲に生息しているかもしれない不幸なトリオンである。

ふつうの人は害されたと思えば敵愾心がわいてくる。つまり、能動型のNNトリオン動作へシフトする。そのとき、この被害妄想は、加害性のNN妄想へ転化するかもしれない。私Aは、私を虐めたBを許さない、そして幸せそうなBの友人たちCも許さない、Cは私を冷笑し、私の苦しみを傍観したのだから・・・といった推論がリアルな感情をともなって駆け巡り、そのループの暴走を止められない場合には、結構な確率で暴力的な行動を誘発することがありそうである。

ちなみに、自分(たち)を政府権力の被害者である、と考えると、大臣と料亭で歓談するすべての人は、私た

よい子だとして。なにかの拍子で先生に反感をもった私Aは、よい子のBちゃんをイジメたくなるかもしれない。これもN能動型のNNトリオン動作である⁶⁰⁾。

2. NrNs-H

1) NPN-H.3-2 ; P : B C、N : B A N : A C



この2行目は、BからAへN動作が送られるトリオンで、AにとってはN受動つまり被害型である。まず、兄Bはいつも弟Cを可愛がっている。私Aは兄にイジめられた(N : B A)ので、弟の方をイジメ返してやった(N : A C)といったケースが考えられる。弟Cが、人間ではなくハトや持ち物である、といったこともよくありそうである。

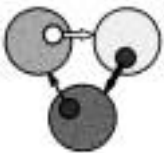
2) NPN-H.4-2 ; P : C B、N : B A N : A C



その下の4-2は、BとCの荷重動作の向きが反対になっている。兄弟の例でいくと、弟Cの方がいつもお兄ちゃんBの金魚の糞になっている。この場合も、Bが私Aをイジめたら、私はCの弟の方を憎たらしく思うかもしれない。Bがクラスの担任の先生だとすると、先生に叱られてばかりいる(N : B A)私Aは、先生を慕うクラスのよい子たちC(P : C B)に意地悪をしたくなる(N : A C)かもしれない⁶¹⁾。

3. NsNr-H

1) NPN-H.3-3 ; P : B C、N : A B N : C A



3列目NsNrは、AB入力が能動Nで、AC出力が受動Nであるような変換のパターンである。BはCを頼っているから、Bを攻撃したら、Cから復讐されるのではないかと、という恐れがこのトリオンから生まれる。たとえば、泣き虫のBちゃんは兄C君を慕い頼りにしている

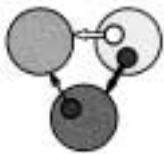
ち貧しい民衆の敵になる。被害者根性がうみだすこの野合と癒着の妄想論理は、気づかないうちに、民主派を自認するやさしい人びとを乗っ取っている可能性がたかい。いったんトリオンに乗っ取られると、サブスペースの次元が退化して、見えるものも見えなくなる。義憤と僻みと嫉妬のあいだは名づけ方のちがいによる薄い仕切りしかないのである。

60) 上下合成すると、図8.11bの1・2-1と順序はちがうが同じパターン³・4-1になる。BとCどちらがどうに関係なく、仲良し2人組の一方をきらいになると、もう一方もいけ好かない感じがしてくる、という感情動作で、人間として狭量な、しかしトリオンとしては自然な動作である、といえよう。

61) 2列目の3行目と4行目の欄を合わせると、図8.11bのパターンT1となる。BとCはたがいに仲の良い友人や兄弟の関係である。このばあい、どちらか一方から意地悪をされたり、攻撃を受けたりしたら、その仲良し同盟のもう一方に意地悪のお返しをしたくなる、というのがこのトリオンの予期動作である。もちろんCにとっては一種のどばっちり、攻撃転嫁の巻き添えである。下層であえぐ人びとはより下層に差別意識をもちやすいという観察やデータがあるが、これもこのトリオンによるものかもしれない。

(P : B C)。そのことを知っているのに、私AがついBちゃんをまた泣かせてしまった(N : A B)。Bちゃんはきっとお兄ちゃんにいつけるから、今度は僕がお兄ちゃんCに仕返しをされるかもしれない(N : C A)。どうしよう、大変だ、といった「予期」を生み出すのがこのトリオンである。

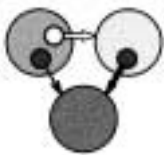
2) NPN-H.4-3 ; P : C B、N : A B N : C A



4行目の4-3では、BとCの関係が逆になる。Cがお母さんでBはお母さんがかわいがっているカナリアだとしよう(P : C B)。私Aがカナリアの首をひねってしまった(N : A B)。きっとお母さんにひどく叱られるだろうナ(N : C A)。という心配がこのトリオンの予期出力である。その結果、私Aは、死骸を隠すかもしれないし、正直にいうかも知れない。お母さんに知られてもなにも叱られないと、このトリオンの抑止力は学習されず、CのBに対する愛情の信憑性が疑われることになるはずである⁶²⁾。

4 . NrNr-H

1) NPN-H.3-4 ; P : B C、N : B A N : C A

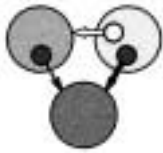


4列目は全受動型の NrNr トリオンである。BちゃんはC君が好きでいつも一緒にいる(P : B C)。そのBちゃんに僕Aは悪口を言われた(N : B A)。C君もどうせ僕をイヤなやつだとおもって意地悪するに違いない(N : C A)。このトリオン動作によって、AちゃんはC君の何気ない挙動を必要以上に意識するようになるし、自分から声をかけることもしにくくなるだろう。その結果じっさいにCはAに、変な奴などという印象をもちかねない。このトリオンは、しばしば人間を被害妄想的に孤立させる可能性をもつトリオンである。

もっとももしBがヤクザで、それに絡まれたのだとしたら、今度は兄貴分のCがゆずりにくるかもしれないので、必要な警戒心を生み出す働きをもっていることも忘れてはならない。

⁶²⁾ 合成バージョン3・4-3 (図8.11bの1・2-3)では、BとCはお互いに愛情の絆で結ばれている。このとき一方を攻撃すれば、当然他方から反撃があるだろう。もしBとCが本当の信頼の絆で結ばれていれば、かならずそうなるはずである、とトリオンは告げるはずだ。万一、か弱いB(少女や動物)を殺害したりしても兄C(母も父も)が怒らないとしたら、CはBを愛してもいないし、保護する気もない、つまりみんな自分の安全だけを考えているだけだ、とこの少年Aが考えたとしても不思議ではない。これは明らかに社会の崩壊というより解体の論理である。それが論理であることに注意を促したい。

2) NPN-H.4-4 ; P : C B、N : B A N : C A



B先生はクラスの皆Cから好かれている (P : C B)、今日僕Aは先生からしかられた (N : B A)、明日学校にいったらみんな僕のことをバカにするんじゃないだろうか (N : C A) といった予期を生み出すのがこのトリオン動作である。Bがヤクザの例でいうと、今度は子分Cが尻馬に乗って私にたかりにくるのではないが、といった不安が生まれる。警戒モードのNrNrトリオンは、感度が上がると妄想化しやすいのかもしれない。あらゆることが新たなCの攻撃の予兆のように思えてくる可能性がある⁶³⁾。

8.4.4.3 誘導型NNP-Y

1 . NsNs-Y

1) NPN-Y.5-1 ; N : A B、N : A C P : B C



さいごにNPN変換の誘導型について検討しよう。左右の辺ABとACの関係がネガティブに規定されたばあい、対辺BCの間にポジティブな予期が生まれるのがこの誘導型トリオン動作である。まず、AはBが大嫌い、Cも嫌いだとしよう。BはCと陰でいいことをしているにちがいない、といった予期がこのトリオンの出力である。もし私AがBの人間性に不信をいただいている、とすると、もっとまともなシミュレーションになりそうだ。私AはBだけではなく (N : A B) Cにも疑問を感じはじめた (N : A C)。BはCと裏で手を組んだのではないか (P : B C) といった類の疑念が私のなかに湧いてきても不思議ではない。

63) BとCの関係が双方向化した合成バージョン3・4-5にもふれておこう。一般に、ミンナ「仲良し」で「私だけが除け者」にされている、という疎外感、このトリオンの産物だろう。自分が除け者にされた理由に思い至らないあるいは至れないばあい、この疎外感に能動性の攻撃感情NrNsに転化する。それは、フン、今に見ていてごらん、私だって、と奮起させるエネルギーになる場合もあるし、ときにマイナス方向に鬱屈して、そのうち毒を盛ってやる! というような「呪い」のオペレーションへと潜在発展するかもしれない。舞踏会に招かれなかった魔女は、魔女だから招かれなかったのではなく、招かれなかったので魔女に変身していった、と考えるほうがより科学的なもの見方である。

思考実験をつづける。1998年に発生した「毒入りカレー事件」に着想をえているが、基づいているわけではない。ご近所のBさんとCさんは仲良しでいっしょによく立ち話をしている。私AはBさんからゴミの捨て方で嫌味をいわれた。Cさんもきっと私のことを悪く思っているにちがいない、と思いはじめるとどンドンそう思ってきた。そういえばさっき私が庭にでたら、Cさんは窓を開けた・・・といった想念がいったん生まれたら、あとは窓は開けても開けても意味は同じである、「ミンナ私をきらっている!」こうなったら、すべての目配せや咳払いまでが能記(シニフィアン)となって、幸せそうな祭の輪から排除された不幸な私という負の荷重を所記(シニフィエ)とする意味作用が発生する。

このトリオンの暴走、というよりちょっとした空転から、被害妄想的想念(「妄想気分」「関係念慮」「異常意味顕現」などなど)まではほんのひと息である。「そうではない!」と言ってくれる信頼できるアナタの保証以外、その暴走を止めるものはない。

もし私がすでにアナタを(毒をもったり密告したりして)裏切っている場合は決定的である。アナタがいくら否定しても、そのアナタたちはトリオンの向こう側、私には直接見えないBCの暗がり(ソシオブリッジ)で「きつと結託しているに違いない!」のだ。いくら隠しても、私には見え見えだ、と思ひこむ、というより体験

2) NPN-Y.6-1 ; N : A B、N : A C P : C B



AB、ACは同じだが、BとCのあいだの関係の向きが逆転しているパターンである。私は同僚のBが大きらい(N : A B) 後輩のC君とも馬があわない(N : A C)。C君はきっとBの方へ靡くのではないか(N : A C) といった予測や勘ぐりもこのトリオンの産物である。暴君は民衆の団結をおそれ、いじめっ子はミンナがひとつになることをおそれる。つまり結託の疑念がAの頭のなかをリアルに駆けめぐりはじめる。背後(というより向こう側)の結託(P : B C、C B)に脅えれば、ますます攻撃と追及のN動作(N : A B、A C)を厳しくしめつけていくことになりやすい。子どもたちをみれば、何を影でこそそやっているのか!としかりつける厳しい教師は、臣下の集いをみれば陰謀を疑う権力者と同じように、このトリオンの罠に嵌りつつある⁶⁴⁾。

2 . NrNs-Y

1) NPN-Y.5-2 ; N : B A、N : A C P : B C



2列目NrNsは、まず私AがBから嫌われる、あるいは攻撃される、というN受動型である。私Aは職場で突然Bさんに嫌味を言われた(N : B A) 私は部下のC君に小言をいってつい鬱憤晴らしをした。今度の会議でBさんがCを助けて肩をもつのではないかと、いった疑念や心配を生み出すのがこのトリオンである。Bが母親、私Aがお兄ちゃん、Cが弟という例も考えてみよう。お母さんに叱られたお兄ちゃんは、腹いせに弟をいじめた。どうせお

するほどに、トリオンの生み出す予期はリアルなのである。ここから、自己保存にむけての見えない敵との孤独な闘いがはじまるが、それがさらなる不信と疑惑と陰謀のうねりを自己実現的に増幅していくであろう、ことは容易にみてとることができよう。「呪い」と呼ばれてきたものはまさに、そのような不幸な状況(「等終局性!」)へ人や人々を誘い込む「呪われた力」のことなのかもしれない。

なお、トリオンは、もし筆者の妄想でなければ、結託 孤立 陰謀といった社会的次元だけでなく、神経症的不安をふくめた、より精神病的な次元の「妄想」の発生をも説明するように思われるが、その展開はまた後の課題である。

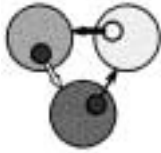
64) 合成したパターンが5・6-1である。BとCは私の見えないところで、あるいは私の手の届かないところで仲良くしている、つまり結託しているのではないかと、という不安や疑念は、ダイオンがらみの嫉妬とは別種の次元を含んでいる。結託不安や陰謀妄想(史観!)は、主にこのトリオンの動作によって生み出され、しばしば相互行為のなかで実現される、と考えることができる。

ちなみに、すでに別の箇所でも述べたように、他者Bと他者Cのほんとうのところの関係は本来私からは見えにくい。実際、ふたりが相手を見つめるその目を私は直接みることができない。BあるいはCの語る言葉を信じてふたりの関係をつくるか、さもなければふたりの様子や挙動からふたりの間を推測するしかない。しかし、人間は自分が信じていない人の言葉を信じることはできない。いったん他者に対する疑念をもった人、基本的信頼を失った人、あるいはもてなかつた人は、その他者のかたる言葉を信じることはできないのである。つまり人の言葉自体がつねに一種の方便や嘘となる。

他者への信頼は私のリアリティのベースであり、世界の母胎である。このベースであり母胎である「基本的信頼」がなければ、私は世界ごと他者たちの挙動にふりまわされるだろう。そしてこの世界の揺らぎを止めようと欲すれば、身勝手な他者の自由を制約し、その気ままな行動や見えないところでの交際や友情を糾弾し(「何をかくれてこそこそと!」)、最終的には、もっともその愛を渴望する他者にむかって、在ルナ!と叫んで、その他者の自由を剥奪せざるを得なくなるだろう。

母さんは弟が可愛いんだ、とつぶやかせるのもこのトリオンだろう。お母さんは弟に駆けよるだろうから、この予言は実現することになる。

2) NPN-Y.6-2 ; N : B A, N : A C P : C B



6行2列目のパターンは、BとCの関係が逆である。私Aはお母さんBに叱られた。腹いせに弟Cをいじめながら、どうせおまえはおかあさんに言いつける気だろう、と思えてきたらこのトリオンの仕業である。告げ口する気だろう、といて責めるとますますそれに違いないと思えてくるところがポイントである。トリオン・ループの回転によって、予期のリアリティが増すのだ。ますます腹が立って、もっといじめたりすると、助けを求めて本当に「告げ口」してしまうだろうから、単なる主観的疑惑・勘ぐりからはいるこのループも、客観的に自己実現する可能性がたかい。⁶⁵⁾

3 . NsNr-Y

1) NPN-Y.5-3 ; N : A B, N : C A P : B C



私は兄A、Bはよく遊んでやる弟、Cは母ということにしよう。ちょっとしたことで弟Bを泣かせてしまった(N : A B)。つぎの日、お母さんの態度が心なし冷たいような気がする(N : C A)。あいつ、お母さんに言いつけたな！という「予期」(ポテンシャル)が感情をともなって兄の心に湧いてきたとき、このトリオンが回ったのである。よくもチクツタな、などといじめると、本当にお母さんに、おまえは悪い子だ、と嫌われてしまう可能性がたかい。つまり、「予言」(というより予期、推論)はここでも自己を実現する。Bは遊び下手で泣き虫のクラスメイト、Cは先生とすると、ちょっと粗暴で不器用なAは、こ

65) より深刻な一例として、Bをゲリラ、Aを政府軍、Cを民衆と考えてみよう。ゲリラの奇襲を受けた政府軍(N : B A)が、民衆を捕まえて(N : A C)。おまえはゲリラのシンパだな(P : C B)と責めている構図である。ゲリラを庇つつもりだろう(未来)というのも、ゲリラの手助けをしたろう(過去)、というもトリオンの出力(P : C B)という点では違いがない。このトリオンも、驚くほどの自己実現力をもつことが知られた。つまり、責めれば責めるほど民衆はゲリラのシンパとなる。

ふつう政府軍兵士は、ゲリラが民衆を誑かし煽っている(P : B C)と考える、あるいは吹きこまれる。このゲリラの煽動に乗せられて民衆自身が政府軍に叛旗を翻す、つまり反政府の運動や暴動に加わるのではないか、という予期も生まれる。こうして、最後に、BゲリラとC農民は夜になると密かに通じあっていて、実はむしろ一体ではないか、一体にちがいない、という強い予期が生まれ、疑惑は確信へと変わり、そのリアリティの強度を高めてくる。ふつうの村でゲリラに包囲されているような予感にとらわれた兵士に引き金を引かせるのは、おそらくこの双結合トリオンが生み出す強烈なリアリティの感覚、現実でも妄想でもありうるその他者性の強さである。その結果、ゲリラと民衆が固い絆で結ばれると、この妄想でもありうる「予期」は、じっさいにリアルな銃弾となって襲ってくる。こうして、NPNトリオンの歯車は、ますますオブジェクティブな自己実現へ向かって進んでいくのである。

のループのなかで邪悪ないじめっ子にされる、というより、実際にそうなる可能性
がある⁶⁶⁾。

2) NPN-Y.6-3 ; N : A B, N : C A P : C B



この図では、Bを泣き味噌のクラスメイト、Cを先生にしよう。私
AはBと遊んでいるうちに泣かせてしまった(N : A B)。次の
日、私Aは、みんなの前でC先生にひどくしかられた(N : C A)。
本当は先生を尊敬していてほめられたいと思っているAは、先生は
いつもBばかりかばう、えこひいきだ(P : C B) とむくれるかもしれない。そしていっ
たん先生に反感をもってしまうと、AはBと遊んでいただけだ、いじめたつもりはない、
事実もない、と言い張る可能性がでてくる。それを先生がきつく叱ると、Aはますますむ
くれて今度は絶対見つからないように、悪意をもってBをいじめるかもしれない⁶⁷⁾。

4 . NrNr-Y

1) NPN-Y.5-4 ; N : B A, N : C A P : B C



最後に、全受動のBC誘導型についてみる。NrNrで、私Aははじめ
から終わりまで被害者である。たとえば、まずB君が私に意地悪を
して消しゴムを隠した(N : B A)。そうしたら次の休み時間に今
度はC君が投げたボールが私に当たった(N : C A)。私Aは、もし
かしたら、BがCをけしかけたのかもしれない、(P : B C) と考えるだろう。いや、かも
しれない、ではなく、きっと私の知らないところで、BがCをそそのかしたにちがいない、
という推論まではひと息である。チェックポイントは、BなりCなりあるいはDなりへの信
頼、あなたは本当のことを言ってくれるという「基本的信頼」だけであって、タイミング
とある種の符合はトリオンの推論の妥当性を裏づけているように感じられるだろう。ここ

66) 6-2の例と同じように、Bをゲリラ、Cを民衆と考えると、ゲリラを叩いたら(N : A B) 民衆の暴動が強まった(N : C A)、などという場合に、このトリオンが当てはまる。つまり、政府筋は、ゲリラ勢力が民衆を煽って暴動へと炊きつけたにちがいない(P : B C)、と推論するにちがいない。なお、この民衆とゲリラのトリオンでは、先にゲリラを叩くか、それとも先にゲリラのテロにあうか、の違いで、5-3と6-2の違いが出る。ループの回転が右回りか左回りかで変わるだけで、互いに応酬が激しくなるとロックして、同一のトリオン類型となる。

67) ここでも、ゲリラと民衆のトリオンのように、イジメをなくそう、Bくんを助けよう、としてAを叱る先生Cの動作が、ますますイジメを強化し、潜伏させる、という厄介な悪循環のループが回る。そのような不幸な結果を求めた覚えもつもりもないA、B、C3人の当事者は、それぞれの憤激をかかえたサブスペースのなかで、自分の善意と正当性を護るために、データの選択的なたみ込みや改竄をおこなうだろう。こうして、不幸な予言が自己を実現するシステムロックが発生するリスクがある。真相は「藪の中」にはいり、それぞれのトリオンの動作に媒介されたネクロンの環が、怒りと悲しみ、祈りと憎しみだけをリアルに生み出しながらネットワークを回りつづける理論的な可能性がある。

から「妄想」へいたる道にストッパーはない⁶⁸⁾。

2) NPN-Y.6-4 ; N : B A, N : C A P : C B



6行4列目は、BとCの関係の向きが逆になる。追隨して攻撃したCの方が、Bに一種の秋波をおくっている、と考えると分かりやすいだろう。たとえば、書記局のBが私を批判した。なぜかC議員も私に反論した。CはBに追隨連合しよう、としているのではないか、といった疑念を生みだすのが、このトリオンである。Cが私Aへの反論をしながら、B書記にかすかな目配せを送った、ように見えたりすれば、結託仮説は確信と化して、次にAのくり出す実際の行為を規定するだろう⁶⁹⁾。

以上、96種類のトリオンの動作パターンについて、簡単な事例をあげて検討してきた。軽薄なものから重苦しいものまでいろいろな例が混交して、かなりアドホックな印象を与えたかもしれない。ともかく、演繹的に構成されたこれらの類型に、果たして経験的な対応物が見つかるかどうか、それを試すのがこの章の目的だったからである。

筆者としてはその思考実験の結果、理論の展開力と射程についていくらかの見通しを得

68) ここから、猜疑心や疑り深い性格の人は、この「基本的信頼」の欠如によって、BC間の関係に猜疑心が（自動的に！）働く、と仮定できる。アナタへの「基本的信頼」を十分に形成しそこなった人は、目の前のアナタに対してよりも、アナタとアナタの関係についてトリオンの猜疑にとらわれやすいのである。一般に3人関係が苦手であり、その分ますますダイオンのアナタへのしがつきと過剰負荷がかかるのかもしれない。しかもそのアナタへの強い負荷は、アナタとアナタの関係（の推測のゆらぎ）によって容易にPN反転する。自他ともに愛憎の反転に振り回されながら、ひとりのアナタとの深いかかわりを求めて、出会いと別離を反復する「境界例」的パーソナリティの問題点は、内在化されたトリオンにおけるこのBC不安定（それはおそらく両親の不和からくる一種の「刷り込み」である）にあるのかもしれない。

69) さて、このふたつの類型が重合すると、非常に頑なな不信のトリオンが誕生する。たとえば、私はこの世でどこへいっても皆に嫌われる、と悲しみに暮れたとしよう。不幸な私には、他者たちはトリオンの向こう側の辺BCでいかにも幸せそうにさんざめいているように感じられるに違いない。このとき、なぜ私が私だけがこのように他者たちから疎外され、このように孤独で、さみしく不幸なのか、という問いがほとんどの少年少女に生まれるだろう。その原因の探索、説明は、所属カーストや人種の運命から来て古来よりそれぞれの人類の最大の問題のひとつであった。ともあれ、もし私Aが、いわれなく不当に皆に虐げられたと確信したならば、その他者たちの幸せそうな交流と信頼の絆（P : B C, C B）は、一瞬にして結託と陰謀の疑惑、私に向けられた排除の絆に反転するだろう。BもCもミンナぐるむになって、私だけが除け者にされている、私だってミンナと遊びたいのに！ どうして?! ミンナひどい！ と激しい思考と感情のポテンシャルが自己増幅的にトリオンによって紡ぎだされる。回転があがるほどに、悲しみと屈辱と渴望のなかで、「もうアナタたちを許せない！」という高荷重状態が能動型に反転する、ということはありうることはないだろうか。私を不幸にしたのは、幸せそうな向こう側の結託であるとするれば、私Aの怒りは、だれでもいいだれか向こう側の幸せそうな人や家族や学校の校庭や祭りの食卓に向けられるのもそれなりに論理的なのである。

これはなにも一部の少年や不幸な犯罪者に限った問題ではない。もし私たちの貧しさが、不幸が、向こう側から私たちを抑圧し、弾圧する権力者と、その権力と野合/結託する財界/資本であると仮定するというより確信すれば、あとはこの結託を破壊し粉砕炎上することによってしか、無辜の民であるはずの私たちが幸福になる道はない、という革命や暴動の論理に大人も思想家もとらわれてしまったのも無理ではなかったのである。料亭の密談もホテルのパーティも支配階級の怪しい結託と闇取引の場としてしか感じられない私たちが、クラスの向こう側の笑顔と笑い声の歓談交流が、私を虐めて排除するための陰謀にしかみえないほどにいじけてしまった少年少女とトリオン動作としてはたいしてかわらないことを知るべき時であるのかもしれない。すくなくとも、この後者は、私たち前者が生み出した私たちの子どもである。より不幸な人びとへの愛によって担保されない人権思想、自分をこの世でもっとも不幸な被害者としてその苦しみを絶対化し、ひたすら自分を、自分（だけ）の苦しみをあたかも負性の神であるかのように祀り上げるこの宗教は、すなおな子供たちのところを舞踏会に招かれなかった魔女の呪わしい心へとただれさせていっている可能性がある。これもまた、トリオンの生み出す他者性の畏のひとつ、もっとも気づかれにくい畏のひとつである。

ることが出来たと考える。

要約しよう。ソシオンのサブスペースで構成される3項連結の荷重表象システムをトリオンとよぶ。トリオンはPPP、PNP、PNN、PPN、NPN、NPP、NNP、NNNの8つの結合パターンが区別できる。トリオンは、その否定連結部分で荷重ポテンシャルの正負変換機能をもつ($P \times P$ P $P \times N$ N $N \times P$ N $N \times N$ P)と仮定すると、{PPP、PNN、NNP、NPN}の4つのパターンがループ動作にたいして安定性をもつ。{PNP、PPN、NPP、NNN}は、ループ動作で正負が反転し、不安定となる。

これら4つの安定パターンは、それぞれの関係動作の方向のちがいがいによって8種類の基礎パターンに分解できる。

さらにトリオンを構成するAB、BC、ACの3辺の動作順序に注目すると、J循環型、H反射型、Y誘導型の3種類の動作パターンが区別される。循環型Jは{AB、BC AC}という順序で、反射型Hは{BC、AB AC}の順、誘導型Yは{AB、AC BC}の順序で荷重動作が生起する。PPP、PNN、NNP、NPNの各トリオンについて、それぞれ $8 \times 3 = 24$ 種類のパターンをトリオグラフに図示して一覧表(ソシオマット)に表わし、そのすべてのパターン($24 \times 4 = 96$ 種類)について簡単な動作例を挙げて検討した。

トリオンのダイナミックな動作特性をみるため、それぞれの安定トリオンについてBC間を双結合で固定して、AとB、AとCの関係(能動 受動、正 負)に注目すると、16種類のパターン(PPP {PsPs, PrPs, PsPr, PrPr}, PNN {PsNs, PrNs, PsNr, PrNr}, NNP {NsPs, NrPs, NsPr, NrPr}, NPN {NsNs, NrNs, NsNr, NrNr})が識別できた。それぞれループの記憶を内蔵した対人関係の接合特性であり、荷重記憶が予期に転化することで対人的な対応を規定する一種の社会的性格を表現している、と考えられる。

さらに、トリオンの少なくともひとつの関係が対称的に双方向化した相互結合のパターンが、循環型で19種類、それに反射型や誘導型の順序のちがうものを入れると $19 \times 3 = 57$ で57種類ある。PPP、PNN、NNP、NPNの4パターン全部あわせると、228種類の対称結合のトリオンが識別できることになる。これらはいずれも8つの基本パターンの合成によって順次導くことが出来る。合成図はそれぞれのトリオンが対称化されていく様子をフローチャートで示したものである。最上部に8つのユニット・パターンがそれぞれ対応するパターンと2個づつ合成されると、双結合を1個もつ(たとえば相思相愛の)トリオンができる。2、3、4行にその1個の双結合をもつトリオンを12個示した。

その下の5、6、7行は双結合が2個のトリオンである。それぞれ上部のトリオンをさらに合成することで6個のトリオンが導かれる。結合度のつよいトリオンでは、2辺が相互結合で決定されると、のこる1辺はPかNかに決定される。双結合がふえるにしたがって促進性も高まり、変換による予期の不確定性が縮減され、出力荷重値の確定性（PかNか）が高まる。すなわち、関係についての主体の選択性は低減する、というより失われる。この選択性の消滅をソシオンは感情論理的な「必然性」、あるいは端的な「自明性」として意識し、それにもとづいて思想と感情の論理を紡いでいる可能性が高い⁷⁰⁾。

9. ソシオス

9.1 ソシオスの形成

9.1.1 ソシオカテゴリー

ヒトの脳に内化されて備給をうけることのできるソシオンの数は、せいぜい数十から数百に限られる。しかも、そのなかで実際にサブスペースで荷重オペレーションの対象となる生きた（というより生きられる）ソシオンの数はせいぜい数個にかぎられる。ループの数と、変換パターンは容易に数十から数百、そして数千のオーダーに達するので、人間はたかだか数個/頂のネットワーク規模でしか、荷重変換をふくむ複雑なダイナミクスを思考できないのである⁷¹⁾。

おそらく、限られたソシオンの視界をネットワーク近傍の時空的な限定から解き放ち、

70) これらPPP、PNN、NNP、NPNの4つの双結合のトリオンの合成フロー図は、それぞれの図面上の対応する位置で、同じ動作方向や順序をもつトリオンとたがいに照応する。これらの間にNがひとつしかない不安定トリオンも加えると、全体として可能なトリオンの全パターンを網羅したトリオンの状態空間（とりえずトリオンスペース、あるいはトリオンブックとでもよぼう）を概念することができる。このトリオンブックは各ページ上で各パターンが合成の経路で結ばれている（その合成図が8.8b、8.9b、8.10b、8.11bのとりにえず4枚である。これは基本形の循環型に限られているので、さらに反射型と誘導型を加える必要がある）だけでなく、各ページのあいだにPNパターンシフトを可能にする経路がそれぞれ対応するトリオンをタデにつないでいる。

その経路は、トリオンマットの各コラムを垂直に貫いて、六角形のリング状に連結している。トリオンの状態は、いわば安定不安定あわせて8層のトリオンマットを積層したこの超空間のなかを、六角形のシフト経路を走り抜けるようにPとNの変換動作を重ねながら（比喩的にいうと）上下に移動し、双結合を増やしあるいは減らすにつれてマット面を手前へ（図では下）あるいは奥（図では上）へと移動している、と考えることができる。この状態空間に非対称な双結合も加えると、相当複雑でしかし精密なトリオンの全状態空間を論理的に構成できると思われるが、そのモデルの構築はまた後の課題である。

71) レヴィ=ストロースがいうように、トーテムは食べるためにはなく、関係について考えるために、あるいはむしろ生きた関係を「生きる」ためにつくられたのだ。クラス対抗やサッカーリーグでの熱狂は、まさにそのカテゴリー・レベルの荷重オペレーションが現に生きられていることを示している。

一般に、デキゴトへの予期が（恐怖や希望として）高まる極限状況では、荷重変換動作は、行為としてオブジェクティブに外化実演される傾向がある。生贄や供儀、肅清や魔女狩りは、強度に備給された象徴を梃子にした、身体や生命を巻き込んだのカテゴリー性のトリオン変換である、といえる。なお、生贄のような身体/生命の変換（危害）を伴わずに、代理象象（シンボル）に対する荷重動作を行うのが、象徴儀礼であり、人類はヒューマニズムの進展とともに、荷重変換を実行為からサブレベルの象徴行為へと、さらに理性によるメタレベルでの思考操作へと昇華させてきた、と概観することができるだろう。

より大きなソシオネットを形成するために人間が発明した技術が、トーテミズムのような存在(備給)のカテゴリー体系へのたたみ込みであったと考えられる。表象を用いてソシオンを束ね、より上位のソシオネットへと階層を順に積み上げていくことで、複数のソシオンをひとつの表象へと束ねて備給することで、より上位次元で集合的な荷重動作が可能になる。個人から家族、親族、クラン、トーテム、敵、味方、さらに野球やサッカーのリーグといった社会的カテゴリーの積み上げは、ソシオンの制約された荷重動作能力のなかで、ネットワークを最大限規模に展開するための圧縮と多層化の技術である可能性が高い。

ソシオンのつくる社会的ネットワークは、圧縮によって階層化された多層複合ネットワークであり、ネットワーク自体が階層入れ子構造を形成している。そして、それらの階層を縦断するように、どのカテゴリーレベルにも共通して、トリオンのパターンとトリオンの動作のメカニズムが存在する。社会システムの多くがこのトリオン動作の積層によって構成・駆動されており、国家の外交も隣人どうしのつき合いも、同じトリオンの回路力学による説明がある程度まで可能であると思われる。

以下では、たかだか数個のソシオンのネットワークに発生するトリオン複合の力学について簡単に概略を述べておきたい。社会システム論への詳細な展開は次号で試みる予定である。

9.1.2 連結ユニット

図9.1はソシオネットを編みあげるユニットとして、いくつかの主要なトリオンを配列したものである。1aから1dまでは共有並列結合、1eと1fは直列結合のトリオンである。同位のソシオンをA、B、Cの記号で、共有の対象となるソシオンをX、Yで表記してある。

1aと1bはソシオンXを共有してPPP並列結合を形成している。1aが能動型で、たとえばA、BともにXを崇拜・称賛している。1bは矢印つまりポジオン荷重のふり込みの向きがその逆の受動型で、ABともにXの庇護あるいは恩恵を受けている。ABはいずれもXとの関係を共有することで、プラスの相互結合を形成する。能動的な崇拜と受動的な庇護がセットでXとの関係が対称化され双結合のユニットとなる。

1cと1dは、ネクロン性の並列結合を形成している。1cは能動型でYを排斥することにおいて互いに結束している。結束して排除攻撃するばあいもあるし(PNN)、攻撃しているうちに同志の団結が固まることもある(NNP)、結束排除、攻撃同盟型の結合ユニットである。

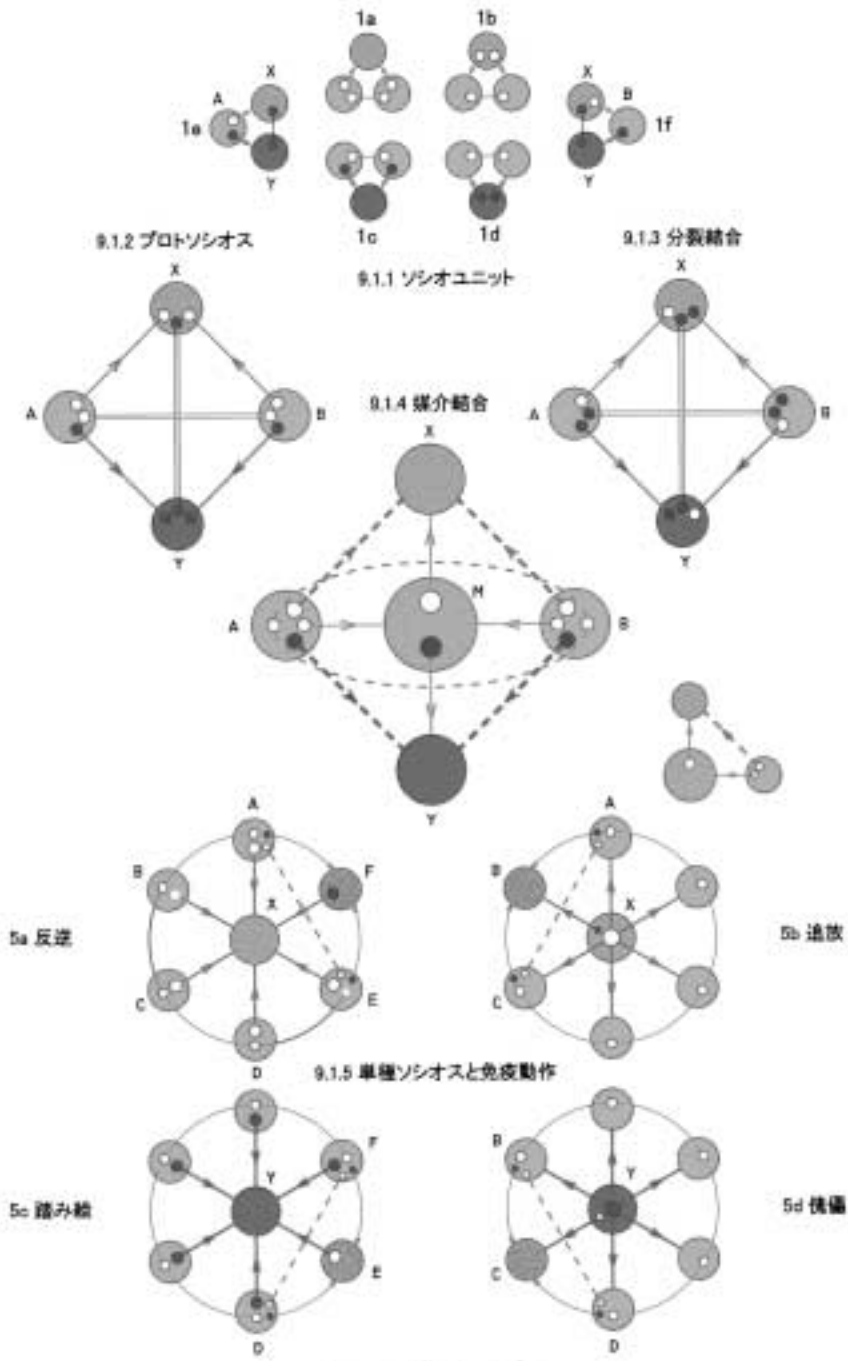


図9.1 プロトソシオス

1dはYの攻撃を受けることで互いに団結・連帯している。被害者の助け合いに代表される連帯で、被害同盟とよぼう。両方を重ね合わせると、NNP双結合の安定並列ネットワークができる。

9.1.3 プロトソシオス

このP型、N型をもっとも単純なかたちで組み合わせたのが9.1.2 プロトソシオスである。これは4つのソシオンからなるネットワークで、P、Nふたつの極を備えた双極ソシオスである。この双極性のプロトソシオスは、すべてのループがPPPもしくはNNP (PNN、NPN) からなり⁷²⁾、XY以外のすべてのソシオンがXとYをめぐるループを共有している、という特徴をもつ。

P型N型ふたつの並列結合を結びつけるのは、9.1.1eのトリオン・ユニットと9.1.2fのトリオン・ユニットのNNP直列動作である。どちらもXとYのあいだがN結合になって、スーパーソシオンどうしが否定対立関係にある。

1eはYへの攻撃によってXへの愛を実現する勇者のタイプ、あるいはXへの愛の名においてYを攻撃する志願兵のタイプである。1fは、Xからの依頼・命令によってYを攻撃する徴兵タイプ、あるいはYへの攻撃によってXから報償や感謝をうける傭兵タイプの戦士である。

このどちらも、XY間のN結合によって、Yへの攻撃性(ネクロン)がXへの愛の荷重(ポジオン)へと変換される。あるいは、Xへの愛が、Yへの攻撃動作へと変換される。前者はNNP直列、後者はPNN直列の変換で、この2つの間で振動することで、A、BのX、Yにたいする荷重備給の量が同位レベルのソシオンにはない強さまで増幅され高められる。

プロトソシオスが、共有結合を3者以上に拡大し、一定の閉じた境界をもつシステムとして自己を構成・保全することが可能になったとき、これをソシオス(socios)とよぼう。ソシオスは、一種の免疫メカニズムをネットワーク内部に形成することによって、外部にたいして内部を選択的に防衛する閉じたネットワークであり、団結と戦闘行為を特性にす

72) 排除と攻撃の運動によってのみ連帯の絆を確認するソシオスは、不良グループから「憎悪の宗教(hate religion)」とよばれるカルトやKKKなど人種差別結社まで、じっさいに存在するし、これからも形成されるであろうことを軽く見てはならない。生き物としてのヒトにとって、愛よりも攻撃性の方がより容易に操作・起動できるのはそれなりに合理的である。

多数派、主流派の意見に異を唱える少数派は、常にこの排除と攻撃の対象になるリスクを背負っている。異端排除はほとんどの場合、まさにXへのポジティブな礼拝だけではネットワークの連帯が保持できなくなったところにXの敬虔な信者たちによって発動されることに注意したい。

るヒトの群れ集団の原型である。

9.1.4 ソシオス

中心に1個のソシオンを共有する並列結合のネットワークを単極ソシオスとよぶ。単極ソシオスには、まずPタイプのソシオスと、Nタイプのソシオスの2種類が区別される。P型ソシオスは、中心にプラスの荷重体をおいて周囲を並列結合のPネット、つまり連帯の環がとりまく形態をとる。図9.1.5はそれを表わしている。5aと5bはP型、5cと5dはN型で、ともに核となる共有ソシオンを1個だけでもつ単極性のソシオスである。

P型ソシオス

多くのばあい、異質分子の侵入・侵害に対して、すこしあとでふれるような排除免疫機能を発動する。図では中心のソシオン（スーパーソシオン）に対し、環の中の一個のソシオンだけが皆とは反対の荷重をふりこんでいる。周りから排除の攻撃をうけているのはそのためである。その免疫発動部分を除いて、このP型ソシオスは、すべてのソシオンのあいだの関係がPPPトリオン動作で編まれている。中心Xに忠誠を誓いさえすれば、この連帯の環は数万数億へと比較的容易に発展拡大する。そのとき、中心にたいする賞賛や崇拜の感情がつよいほど、連帯の絆もつよくなるだろう。

N型ソシオス

N型ソシオスは、これに対し、中心に負の荷重体をおいて、これを並列に結合したソシオンの排除の連帯の環が取り巻いたシステムである。それぞれのソシオンは中心の負体にたいし、ネガティブな荷重を振り込むことで連帯する。5cでも、環の右方に排除行為に加担しないソシオンを描きいれてあるが、これも他のソシオンから連帯をみだす者として排除される。いわば踏絵のコーナーである。このN型ソシオスでも、一緒に石をなげたり拳をふりあげれば数千の群集から、数億の民衆まで、連帯のスクラムにはいることができる⁷³⁾。

73) 愛と攻撃性のトリオン制御は、ヒトというサル科の動物にとって、ソシオスとよぶ個々の集団にとって、さらに文明の形成にとってつねに最大の主題であった。ヒトは何を愛し、何を憎むべきか、わからないままにネットワーク上に産み落とされるのである。「歴史」は、それをくり込むためのそれぞれのソシオスの「物語」である。

双極ソシオス

ソシオスにおいては、複数のソシオンがスーパーソシオンを中心にひとつの共通したループを構成する。いったん成立したループ複合は、個々のサブスペースに構成された主観的な現実には還元できない独自の現実性を獲得する。それは、個々のソシオンの参入や離脱を超えて超個体的にある種の同一性を保存する。そこで構成された表象と荷重のネットワークは、集約的なレベルで個々の「くり込み くり出し」変換を制御することによって、ネットワーク全体を一定の方向に誘導する超個体的な力を発生する。個々のユニットの死や誕生を超えて一定の荷重ループが保全され、それぞれの意図の揺らぎや逸脱をダイナミックに吸収する力をもった一定の社会構造が生成する。内部の要素である個々ソシオンの交代や変異を超えてそれ自身の構造を超個体的に生成・保存するある種の「自己性」をもったソシオンのネットワーク、つまりソシオスの誕生である。

9.1.4 は、中心に正負ふたつの荷重体をもつ双極性のソシオスである。正のスーパーソシオンと負のスーパーソシオンが、たがいに否定結合している。水平面で隣のソシオンと並列にP結合した各ソシオンは、これと垂直に走る否定結合の中心軸を通して、スーパーソシオンXおよびYと、NNPあるいはPNNの直列結合のループを形成する。ふつう、P型スーパーソシオンXは神や正義、N型は悪魔あるいは邪悪な犯罪などに対応する。

双極ソシオスでは、正と負のスーパーソシオンを否定結合 ($N : X \quad Y$) によって連結した中心のPN変換回路によって、すべてのソシオンに振動増幅の道が開かれる。負の荷重体Yを否定することが正の荷重体Xを肯定することになり ($N : X \quad Y, N : A \quad Y$ $P : A \quad X$)。逆に正のスーパーソシオンXを敬愛することは負のスーパーソシオンYを憎悪する⁷⁴⁾ことになる ($N : X \quad Y, P : A \quad X \quad N : A \quad Y$)。中心にPN振動増幅子を内蔵した双極ソシオスは、自己励起性のつよいソシオスであり、一般に単極型より高荷重になりやすい。

74) これがいわゆる共同主観性、あるいはデュルケームが「集合表象」とよんだ社会的意味意識の核心であり、社会システムにおけるこの「世界観」、解釈図式のプライマシーは、イデオロギーや宗教の運動をみれば明らかである。聖化された集合表象は、しばしばオブジェクティブな現実よりもっとリアルな現実として、なによりもそのために生命をかけて捨てても惜しくない高次のリアリティとして、焼けつくようなポテンシャルのもとで生きられることがしばしばである。

しかしながら、ソシオンはサブスペースに情報的に構成された予期 / 可能性を行為として選択的に外化しつつ、それぞれの生存をそれなりの物理的・生物学的現実性において構成しているのは端的な事実であり、第1階層における人間の生存の基底的事実性をうたがうことはできない。物質・エネルギーの次元は、生物学的実在を構成するまさにマテリアルであって、その次元を無視することは、いうまでも無いことだが、物理的・資源的な枯渇と滅亡を意味する。

一般に、生か死かの瀬戸際に立ったとき、ソシオンは恐怖と希望のあいだで振動を起こす。ソシオスもまた、存亡の危機にたつと、PとNのスーパーソシオン、光と闇のあいだで激しく振動しはじめる。救済の希望と破滅の恐怖のあいだで、怯えと祈り、愛と憎悪のあいだでソシオンが集散的にPN振動を起こし、高圧の荷重ポテンシャルが自他と構造の差異を溶解して「アル」という存在感情を超日常的なレベルまで励起増幅する⁷⁵⁾。

高荷重のもとでは、人間は一種の思考停止に陥る。つまり疑う能力を失い、純粹にトリオンの生み出す強い荷重の流れにしたがう傾向がある。トリオン拘束とでも呼ぶべき自由度の乏しい状態にはまり込むのだ。聖なる荷重の奔流と、おぞましい負圧の磁場のなかで、理性が機能を停止するのである。しかし、それは無意識であるわけでも、狂気であるわけでもない。むしろ、激しい生(と死)の意識であり、日常よりもはるかにリアルな現実性の体験として生きられる。X、Yをスーパーソシオンとよぶ所以である。

ちなみに、ナクなるな、アレという思いは、恋人であれ祖国であれ家族であれ、無くなる時、失われそうな時に高まる。とりわけ、何者か他なる者、たとえば「敵」の汚い手によって聖なる中心の荷重体が亡きものにされようとするとき、そのアレという思いの強さは、なぜナクするのか、という怒り、破壊者への憤激によって増幅強化される。「愛」によって「憎しみ」の炎が燃えあがり、「憎しみ」によって「愛」(のシャドー)が光り輝やく。敵を憎むことは味方を愛するための秘儀であり、トリオンの政治学である。魔女の火炙りは青白い神を礼拝する祈りであり、反革命の肅清はかげりかけた革命の理想にささげられた生贄であった可能性が高い。

9.1.5 排除と免疫

図9.1.4はソシオスの免疫とでも言うべき自己防衛機構を説明するものである。円周上に上から左まわりに同位のソシオンがABCDEFと並んでいる。周囲のソシオンから排除・攻撃されるメカニズムを黒い色に塗りつぶされたソシオンで示している。

サブレベルで安定トリオンが紡ぎだすリアリティは、いかに共同主観化され聖化されようとも、あくまでサブジェクティブなものであって、オブジェクティブな事実はまだ別の次元の現実性をもつ。その次元を無視してアルものをナイと言ったり、ナイものをアルと言ったりするサブワールド(意味世界-semios/semio-net)は、ソシオネットごと崩壊・消滅の憂き目にあう。20世紀最大のイデオロギー国家の崩壊や、いまだに後をたたないカルトの集団自殺などにその典型例をみることができる。

75) このことを社会学の重要な問題として取り上げたのは、「聖なるものの両義性」や「集散的沸騰」の問題に言及したデュルケームであった。彼が、犯罪は社会の健康に取って必要であると語ったのも、犯罪への憤激(N動作)が人命の尊さの感覚(P荷重)を生み出す、という点に注目してのことである。

9.1.5a 反逆

まず、5aをごらんいただきたい。中心のXがミンナの崇拜の的になっているスーパーソシオンである。ミンナが礼賛崇拜しているソシオンXにソシオンFが不敬を働いたとしよう。ソシオンA(その他も)は、私の尊敬するXに無礼を働く者Fは許さない($P:A X$ 、 $N:F X$ $N:A F$)というPNN変換で、Fを非難・攻撃することになる。これにたいし、ソシオンEに対しては、内回りのループAXEのPPP変換で友愛が形成される($P:A X$ 、 $P:E X$ $P:A E$)。と同時に、もうひとつのループAFEで、Fを共同で排除することでNNP変換による連帯が生まれる($N:A F$ 、 $N:E F$ $P:A E$)。Fの方としてはXを攻撃・非難したばかりに、いわばミンナから不敬・冒の罪を問われて排斥されることになる。

9.1.5b 追放

その右5bは、おなじく排除の憂き目に遭うのは、Xの不興を買ったソシオンBである。B自身はなにも能動的なことはしていないのだが、ソシオスの犠牲となる。Aの視点から整理しよう。Bは、私Aを慈しむ中心の偉大な王Xの怒りを買ってしまった。PNP変換($P:X A$ 、 $N:X B$ $N:A B$)で私AはソシオンBに近寄らないようにするだろう⁷⁶⁾。自分の身の安全のために、石を投げるかもしれない。一種の村八分型の排除である。もともとAとCは父なるソシオンXによって愛される同胞として仲良しであるが($P:X A$ 、 $P:X C$ $P:A C$)、ここでも、もしソシオンCが私Aと一緒にBに石を投げれば、私はCにあやしい友情を感じるだろう($N:A B$ 、 $N:C B$ $P:A C$)。神に追放されたカイン、先生に疎んじられた弟子、親にひとりだけ嫌われた子どもなどがこのかわいそうな生贄Bの立場にいる。

9.1.5c 踏み絵

5cは、ソシオンEがターゲットである。Eは、ミンナが同列に嫌悪している負性の存在、悪魔のスーパーソシオンYにひとりだけポジティブである。Dの視点から整理しよう。私Dが嫌悪しているYを愛好あるいは崇拜するEは、NPN変換($N:D Y$ 、 $P:E Y$ $N:D E$)で排除される。敵の捕虜と恋に落ちた娘、悪魔を崇拜する者などがEの例である。いじめられっ子Yを救おうとしたやさしいEがみんなから排除の憂き目にあうのもこのケ

76) 1950年代のアメリカのマッカーシーによる「赤狩り」などが典型で、いったんマッカーシー委員会から喚問を受けた人からはそれまで親しかった友人たちがすべて遠ざかっていった、という。そうして離れていった人々は、新しいパーティでアイツははじめから怪しかった、などと悪口を言い合って連帯感をもとうとしたことだろう。

ースである。なお、Fについては、私の嫌いな者Yを嫌う者は私の仲間、というNNP変換(N:D Y, N:F Y P:D F)によって基本的な連帯が形成されるが、さらにその連帯はYに好意を示したEへの制裁リンチなどでいっそう結束が強められる(N:D E, N:F E P:D F)と考えられる⁷⁷⁾。

9.1.5d 傀儡

さいごの5dは5cと能動 受動が逆になる。ミンナが恐ろしいYの攻撃を受けているとき、ひとりCだけがYの保護を請けた場合である。Bの視点からは次のように整理されるだろう。私BをいじめるYによって可愛がられるCは、NPN変換(N:Y B, P:Y C N:B C)で、Yの手先として排除攻撃の対象となる。侵略者の支援をうけた傀儡などに対する反感などがその一例である。BとDのあいだには、もともとYの攻撃の被害者としての連帯感がある(N:Y B, N:Y D P:B D)が、もしDもいっしょにCを排斥すれば、防衛的な団結の絆としてBの信頼を勝ち得るだろう(N:B C, N:D C P:B D)。ミンナを叱ってばかりいる怖い先生に好かれてしまった優等生の「受難」もこの免疫動作の一例である⁷⁸⁾。

9.1.6 分裂結合

図9.1.3のネットワークは、X、Yに対するA、Bの荷重が正負逆転しているようなネットワークで、「分裂結合」と名づけた。興味ぶかいことに、この4頂ネットワークもすべてがNNP, PNN, NPNの安定ループからなりたっており、極めて高い安定性をもつと考えられる。ただ、PPP結合のループが一個も無いという点が、左のプロトソシオスとのおおきな違いである。

(しかし、そうした裏切り行為は、アンケートやインタビュー調査では正直に答えられることはまず無い。本人自身忘れたい負性の記憶だからである。ここに、調査実証主義のネック問題に対する限界がある。)

77) KKKなど、人種差別的な結社の団結は、ターゲットの人種に属するYへの攻撃だけでなく、規律違反をした仲間へのリンチによっていっそう強化されるだろう、と推測できる。敵のみならず、味方同朋へのそうした制裁攻撃はカルトやセクトなど、閉鎖性をもった(これからもとうとする)集団に共通した特質である。

排除されるソシオンの立場からは、5aは中心のソシオンに負を能動的に振り込んだことによる排除でいわば嫌う罪NsNr、5bは中心から負を振り込まれることでミンナから排除されるパターンNrNrで、嫌われる罪(もしカインのそれが罪であるとして)5cは負性の中心にプラスを送り込むことで排除されるケースで、いわば愛する罪PsNr、5dはなんと中心からプラスを送り込まれることで排除されるPrNrで、愛される罪である。もちろん本人の人間としての誠実さや真正さとは基本的に無関係な、ネットワークの事情と都合からくる攻撃糾弾で、本人にとっては謂れない罪に問われることになる。行った行為によって罰せられるとすれば、他者を受することによって罰せられたり、愛されることによって迫害されたりする、というこのドラマは、まったく人間の主体的選択と責任の帰属を超えた排除のドラマであって、それそのものが社会(ソシオス)をつくる人類の原罪であり、社会自体の罪であることはいうまでもない。

78) 宗教戦争から、階級闘争、ウチゲバとよばれたセクト抗争、労使対立、さらには職場やコミュニティの派閥抗争まで、ヒトのつくる群れに族生して消えることのない大小さまざまな対立の共通の構造がこのパラソシオスのモデルでかなり見えてくるように思われる。この分裂結合ネットワークでは、それぞれの愛が憎悪を強化し、憎しみが愛の感情を強めるという致命的なシステム・トラップが発生する。

図から見てとれるように、AはXとP結合($P:A-X$)していて、YとはN結合を形成している($N:A-Y$)。Bは反対にXとN結合($N:B-X$)、YとはP結合($P:B-Y$)を形成している。トリオン安定の法則($P:A-X, N:B-X, N:A-B$)によって、AはBと対立し、憎悪の関係にはいる。Bの側も同様で($N:B-X, P:A-X, N:B-A$)となる。

また、スーパーソシオンYにたいする荷重関係においても、トリオン変換($N:A-Y, P:B-Y, N:A-B$)によって、ソシオンAはBに対して負性の感情、嫌悪や憎しみをもつことになる。Bの側から見ても事態はまったく対称的で、($P:B-Y, N:A-Y, N:B-A$)となる。つまり、この分裂結合をした擬似ソシオス(病理的という意味をこめてパラソシオスとよぼう)では、ABそれぞれが自分の信仰を強めていくと、それに比例して互いに相手にたいする不信と憎悪が強化されていくことになる。信仰や愛、崇拜の念が絶対の域に近づくほど、同位の相手つまり同類の人間にたいする憎悪も絶対不信と不寛容へ近づいていくだろう。しかも、ここでも互いに相手を攻撃するほどに、自身のまつる神、スーパーソシオンに対する信仰の念も昂揚していく、という荷重の循環が発生する⁷⁹⁾。

希望と愛をもとめる当事者のポジティブな意図と誠実な否定の努力が、ネガティブな方向へとシステムを駆動して、まさに正反対の不幸な結果を生みだし、保存し、さらに増幅することになるこのシステムの罫をトリオン・ロックとよぼう。

親と子

ふたたび小さな思考実験をこころみよう。AはBの父親で、学歴や世間体Xを崇拜し、胡散臭い宗教Yを嫌悪している。Bは世間的な価値Xに疑問と不信を抱き、ある教団Yを信仰しはじめている。そのようなばあい、トリオン動作によって衝突は避けられない。それぞれの好みあるいは信仰は人それぞれなので、尊重しよう、あるいは口を出さないようにし

最後にはボルボト政権下のカンボジアのように、オブジェクティブな鞫體の列と、サブスペースに否定のシャドウとして生まれる(共同)主観的愛の熱狂(の記憶)だけが残るが、その残響もまもなく廃墟のなかに消えていくだろう。ちなみに、それ自体としては弱者へのいたわりと人類愛に導かれて誠実極まりないかたちで生きられながら、最終的に屍の山を築くことになった共産主義コートピア思想のたどった運命を、明晰な論理のもとで説明・理解することは、現代社会学の最大のテーマであるべきである。

79) このインターロックを解くには、第5のソシオンの登場が待たれるようである。次善の策として、BがいくらXに不敬をはたらいたとしても、Aの側としては $P:A-B$ で、Bを、Bの試行を信頼していることを示すことくらいであろう。Bのトリオンは、逆になぜ、とひそかにおもうだろうし、なによりも反対効果による否定増幅は避けられるからだ。(なお、カルトをめぐる親子のトリオンの複合については本号の別の論文で渡が詳述する。)

さらに思考実験をひとつ。Yを凶悪な犯罪を犯した少年、あるいは破壊行為を企てたカルト宗教の信者($N:Y-X$)、Xを檢察権力($N:X-Y$)、Bをいわゆる「人権派」($P:B-Y$)のグループとすると、この問題はかなり微妙に興味深くなる。つまり、普通の市民であるAは、凶悪な犯罪を犯した(としよう)少年Yや教団を嫌悪し恐怖し、排除しようとするが、また(その限りで)警察を応援するだろう($N:A-Y, P:A-X$)。ここで、この少年や教団の「人権」を護ろう($P:B-Y$)と参入したBたとえば弁護士は、加害者Yとともに孤立することになる。

しかし、である。ここが肝心だが、人権派弁護士にとって、「人権」は「権力」と闘うことによってはじめて護ることができる(と信じられている)ものであり、何をあいても護られなければならない「聖なるもの」なのである($P:B-Y$)。なぜなら、権力は本来邪悪であり人権を抑圧する装置であって($N:X-Y$)、権力の行使に反対することはもちろん、その存在自体を否定することが人権を護ること、ひいては人間を権力の抑圧から解放

よう、というのが個人主義の発想であり方法であるが、それはすでに述べたように、事後的に学習される思考習慣である。もともと人間は生まれながらにして個人なのではない。大切な人や身近な人とはトリオン結合を形成するのがおそらく自然なのである。

父Aと息子あるいは娘Bがお互いに一種の分身つまり家族であるがゆえに、たとえば次のようなトリオン動作が発生する。すなわち、「どうしてアナタBは、私Aの評価する道Xに進まないのか、私のいうことに背くのか」とAはBに言い、BはAに「なぜアナタAは私の師Yを疑いの目でみるのか」といった疑問と不満をぶつける。こうして親しい仲に不信と疑念が生まれ渦巻く。父Aにしてみれば自分の愛する子どもならば、自分が尊重するXをBも敬うべきである(P:A B、P:A X P:B X)からである。Aのトリオンの予期がP:B Xであるにもかかわらず、Bの選択がN:B Xであることが「おかしい」のであり、「あってはならない」ことなのである。それゆえAはBを責めるだろう。もしXを敬わずYに誑かされつづけるならば、Aは息子を信頼するに値しない馬鹿者として見捨てることになる(N:A B)。

Bの側からすると事情はちょうど反対になる。たとえば信頼も尊敬もできない名誉や学歴を崇めよるこぶ父Aは尊敬できない(N:B X、P:A X N:B A)。しかもその父Aが私がやっとめぐりあった人生の師Yを、イカサマ師だとか詐欺師だとか悪し様にいう(P:B Y、N:A Y N:B A)。

上のXから回っても、下のYから回っても、このループはN:B Aになるようにしか回らないのである。分裂結合ではソシオネットは2派に分かれて対立しながら安定状態にはいる。この対立にもかかわらず安定する、のではない。対立ゆえに安定するのである。中心のX-Y対立が、AとBの対立を深め、A-XとB-Y結合を強化する。そして強化されたA-XとB-Y結合がこんどは、X-Y対立をいっそう先鋭にし、A-B対立を妥協の余地のないものにする。しかも、すべてのループがNNPもしくはPNN、NPNで、回転するほどにそれぞれの対象にたいする荷重備給を保存・強化するのである⁸⁰⁾。

することにつながるからである(N:B X P:B Y)。ここでは、それぞれの愛と正義の闘いのなかで、いくつかのトリオンが多重につぶれ込んで「分裂結合」のトリオン・ロックを起こしている。それぞれの人としての誠実さや理想の高さにもかかわらず、あるいはむしろそれゆえにこそ、思考と感情が分裂し、ネットワークが引き裂かれる。しばしば最初の犠牲者の存在は忘れられたままで。

80) 洞察をもたないトリオンの情熱は、ある種のシステムロックのなかでは、かえって悲劇を増幅再生産することになる。その力学は、ゲリラと政府軍の、あるいは嫁と姑の関係とほとんどちがわない。いかに悪性の「分裂結合」を回避するかは、人類のすべての社会と文明にとってそのネットワークの大小を問わず、最大級の課題である。

9.1.7 中心の媒介者

超越荷重体

最後に、ネットワークの中心に媒介するソシオン＝メディウムが位置するソシオスについてふれよう。図9.2に示したのは、中心に媒介者が介在して、超越荷重体を指し示す、という構図である。もし中心の媒介者Mが私たちA、B、C・・・の誰よりも物知りで、しかも信頼できる人や組織であったとすれば、私たちはその媒介者メディウムが「アル！」と断言する当の荷重体、つまり大変なデキゴトをもたらし得る力を備えたおそろしいもの、あるいはありがたいものの存在について素直に信じるにちがいない。こうして、まだだれ

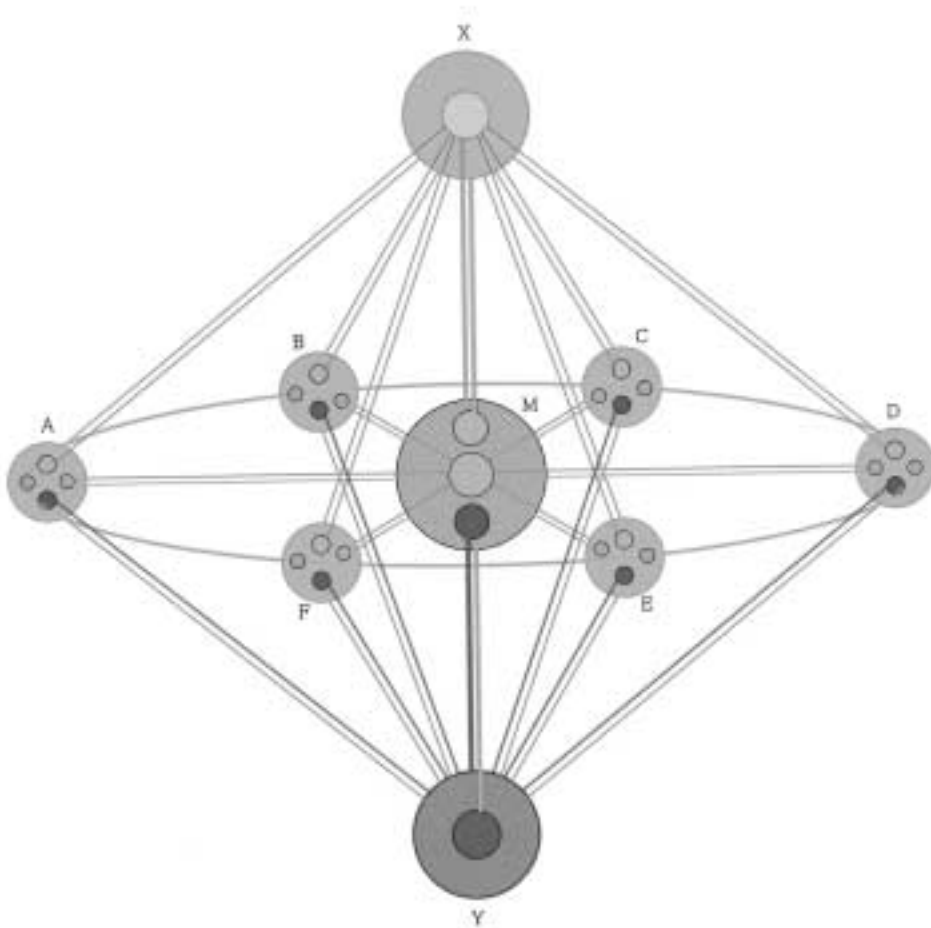


図9.2 ソシオス

も見たことのない偉大なスーパーソシオン、超越荷重体がサブスペースに出現する。それがもたらしうるデキゴトの予期ポテンシャルは、この世で私たちの知っているもっとも信頼できるソシオンMの直列媒介によって、知りうるこの世界を超越するレベルまで増幅強化される。人類が「神」と呼んできた存在は、この超越の域へ高められた予期ポテンシャルの物象化された表象であった可能性が高い。

禁止

大いなる他者が存在すると触れ回る者は、媒介するシャーマンや預言者、司祭や王、教会や書物、知識人、党書記局やマスメディアなどであり、超越ソシオンの存在は、彼らの媒介コミュニケーションによって保証されており、その信憑性は、それをアルという者にたいする信頼の関数である。である以上、「それがアル！」と言い切って、それには会えない、見られない、知りえない、と主張すれば、だれも会えないこのソシオンのなかに無限大の荷重を封印することができる（木村 1999a）。

タブーによってアクセスを禁じられ、海や山や時間の壁で到達を不可能にされたその謎のスーパーソシオンは、媒介者Mのコミュニケーションによって無限大にまで高められた純粋荷重を吸ってリアリティに輝き、超越的な存在として崇められあるいは畏れられるようになる。神XはMの指し示しによって生まれ、説教や礼拝のコミュニケーションによって増殖し、禁止によってまもられた予期ポテンシャルの熱い塊であり、デキゴトを選択的にもたらしうるその超越的力と意思の物象化されたシンボルである、と考えることができよう⁸¹⁾。

悪魔祓い

しかも、媒介者M、メディウムは、Xに対立する負の荷重体Yの存在を語る事ができる。悪魔的なもの、邪悪なもの、この上ない禍をもたらすものの出現あるいは到来の予言は、Mに信頼をよせるソシオンの群れ、信者や国民に十分にリアルな予期を起ち上げるだろう。「最後の審判」であれ、「鬼畜米英」であれ、未知であり検証不能であるような負体の予期つまり恐怖は、明かされない希望よりもつよく人びとを逃走へと動機づける。

このときもし、メディウムMが、神を護るためには今ただちに起って悪魔と戦い、悪を滅ぼさなければならない、と教宣すれば、明るい理想を信じるP型の人、暗い恐怖におののくN型人間も、この世を暗闇の到来から、悪魔の襲来から守るために、正義の戦いへと出征していこう。中心の媒介者Mを絶対的に信じる限り、そのMが確信をもって語

るその「対立」はトリオンにおいて絶対であり、この悪魔と神の絶対否定のN連結を前提にするかぎり、しかもその絶対否定の定立がオブジェクティブに妥当かどうか、本当か嘘か、あるいはまた間違いなのかを検証するすべが奪われているとすれば、この善と悪のシンボリズムのPN振動によって極限まで励起されたソシオンは、ソシオスの戦いへとまなじりを決して出撃するしかないのである。コミュニケーションによって現実を構成するしかないヒトの悲劇的な運命を、単なる集合的狂気と呼ぶのは、一種の作話であり、もうひとつの神話にすぎない⁸²⁾。

82) この媒介者Mによって宣教された絶対的否定対立は、ちいさな民族の神々ととどまらない。神と悪魔、キリスト教と異教徒、異端あるいは魔女、文明人と野蛮人、革命と反革命、ブルジョワジーとプロレタリアート、平和主義者と軍国主義者・・・人類の流した血のかなりものは、この絶対矛盾の否定結合、おそらくヒトの脳内中枢に構成されるトリオン回路の励起暴走によるものではないだろうか。本稿の仮説は、大胆に仮定して精密に思考することを要請している。

ちなみに、ソシオン理論はこれまで主題の展開の便宜と筆者の記述能力の限界によって、「権威」つまり荷重ポテンシャル場の物象化された特異点(意味とリアリティの湧出点)から「真实性」を引用することを避けてきたが、本稿の最後に、この注を若干の引用で埋めることをお許しいただきたい。

「ヒトが生物であると認めることは、ヒトがすべての生物に対して敬意を示すべきことの基本である。」とは人類学者レヴィ=ストロースの言葉である(『はるかなる視線1』三保元訳 みすず書房 1986 33頁)。彼は、また、次のようにも述べている。「人間は前もって人間の側の貯蔵タンクと神の側の貯蔵タンクとの間を導管でつないでいたのであるから、神の貯蔵タンクの方が自動的に空所を埋めて、人間があてにしている恵みを施すことになるはずである。供犠を図式化すれば、非可逆的操作によって、別の面において同じ非可逆的な操作(神の恵み)をひきおこすことである。第2の操作が起こる必然性は、同じ高さがない2つの「容器」を導管でつないでいたことによって生じる(『野性の思考』269-270)」。まさにこの「容器の中身」こそ、本稿の仮定する「荷重」、「予期ポテンシャル」である、と主張したい。

「インプリンティング」の研究で知られる動物行動学者のK. ローレンツは、ヒトにおける愛と攻撃の問題について明快な議論を展開している。「もし攻撃という本をもう一度書くとするならば、私は人間における集団的攻撃を、旧書で行ったよりもずっとはっきりと普通の殴打行動から分離するでしょう。集団的攻撃は、確かに殴打行動を前提にしており、それと共通の、自分の強さを印象づけるための行動などの一連の運動様式を含んでいますが、普通の殴打行動にはない運動様式をも含んでいるからです。つまり感激という主体的現象を伴って現れるいろいろな行動様式です(NNP変換! 引用者)」「国歌の斉唱が呼び起こす感激、すべての高貴なものや尊いものが私たちの心に惹き起こす感激、それは人々を、とりわけ男たちをどう抗いようもなく捉え、姿勢を正させ、顎を突き出させます。そのとき彼の背中を聖なる戦慄が走ります。しかもその戦慄は、それを感じたことのある人はだれでも私に賛成してくれると思いますが、よくよく注意すると、背中だけでなく腕の外側にも走ります。チンパンジーが自分の家族を守るための戦いの列に加わったとき、腕を曲げた恰好で張り、毛を逆立てるのを見たことがあるなら、みなさんは、自分の感じる聖なる戦慄は、人間がもはやもっていない退化した毛皮の逆だつ現象であることを確認できるでしょう。この反応は視床下部から発するものであり、したがって本能的なものです。視床下部が叫ぶるとき、大脳皮質は沈黙します。・・・あるウクライナの諺は、そのことをうまくこう表しています、「軍旗がはためくとき、分別はトランペットの中」と。(ローレンツ 1986 427-429、太字は引用者)

文献(抄) (詳細文献は次号)

- ヴァレリー, P., 1983 「邪念その他」『ヴァレリー全集 4』(増補版) 清水徹・佐々木明訳, 筑摩書房
[Paul Valéry : *Mauvaise pensées et autres*, Gallimard, 1942]
- ウェーバー, M., 1968 『社会学の基礎概念』(改版) 阿閉吉男・内藤莞爾訳 角川文庫 [Max Weber: *Soziologische Grundbegriffe (Grundriss der Sozialökonomik, Abteilung, Wirtschaft und Gesellschaft*, Verlag von J.C.B.Mohr, Tübingen, 1921-1922)]
- 木村洋二 1982 「笑いのメカニズム 笑いの統一理論をめざして」思想 1982.11, 701号, 『笑いの社会学』世界思想社 1983
- 1993 「欲望のソシオン理論 ソシオンダイアッドにおける差異と欲望の力学と感情のキューブモデル」 関西大学社会学部紀要 25巻2号
- 1995 『視線と「私」 鏡像のネットワークとしての社会』弘文堂
- 1999a 「禁止と欠如と意味の誕生」『社会学への誘い』満田久義・青木康容編著
- 1999b 「ソシオンの一般理論()」関西大学社会学部紀要 30巻3号
- 2000 「ソシオンの一般理論()」関西大学社会学部紀要31巻2.3号
- 木村洋二・藤沢等・雨宮俊彦 1990 「ソシオンの理論 ソーシャル・ネットワークへのシステム・ダイナミック・アプローチ」 関西大学社会学部紀要21巻2号
- 藤沢等・雨宮俊彦・木村洋二 1991 「ソシオンの理論(2) ダイアッドからトライアッドへ」関西大学社会学部紀要 22巻2号
- 雨宮俊彦・木村洋二・藤沢等 1993 「ソシオンの理論(3)」関西大学社会学部紀要25巻1号
- クライン, M., 1985 『メラニー・クライン著作集 4 妄想的・分裂的世界』小此木啓吾・西園昌久他監訳 誠心書房 [Melanie Klein: *The Writings of Melanie Klein vol.3 Envy and Gratitude and Other Works*, Hogarth, London 1975(1946-1955)]
- サリヴァン, H.S., 1976 『現代精神医学の概念』中井久夫・山口隆訳 みすず書房 [Harry Stack Sullivan: *Conception of modern psychiatry*, Norton, New York, 1945]
- ジンメル, G., 1994 『社会学(上・下)』居安正訳 白水社 [George Simmel *Soziologie*, Duncker & Humblot, 1908]
- スピノザ, B., 1975 「感情の起源および本性について」『エチカ』(改訳版) 畠中尚志訳 岩波文庫 [Baruch de Spinoza, *Ethica*, 1677]
- デュルケーム, E., 1974 『社会学講義』宮島喬・川喜多喬訳 みすず書房 [Emile Durkheim : *Leçons de sociologie : Physique de moeurs et du droit*, P.U.F, Paris, 1969]
- パーソンズ, T., 1980 『社会体系論』佐藤勉訳 青木書店 [Tarcot Parsons: *The Social System*, Free Press,

- New York, 1951]
- ハイダー, F., 1978 『対人関係の心理学』大橋保夫訳 誠心書房 [Fritz Heider: *The Psychology of Interpersonal Relations*, John Wiley & Sons, New York, 1958]
- バーガー, P. L., & ルックマン, T., 1973 『日常世界の構成』山口節郎訳 新曜社 [Peter L. Berger & Thomas Luckmann: *The Social Construction of Reality*, Doubleday & Company, New York, 1966]
- バタイユ, G., 1990 『至高性』湯浅博雄・中地義和・酒井健訳 人文書院 [Georges Bataille: *La souveraineté (Ouvrages complètes de Bataille,)*, Gallimard, Paris, 1976]
- 浜口恵俊 1977 『「日本らしさ」の再発見』日本経済新聞社
- フッサール, E., 1974 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元訳 中央公論社 [Edmund Husserl: *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, *Husserliana* Bd. , 1954]
- フロイト, S., 1970 『快感原則の彼岸』『フロイト著作集 6』小此木啓吾訳 人文書院 [Sigmund Freud: *Jenseits des Lustprinzips*, Vienna, 1920]
- ベイトソン, G., 1990 『精神の生態学』(改訳版) 佐藤良明訳 思索社 [Gregory Bateson: *Steps to an Ecology of the Mind*, Chandler, 1972]
- ベル, D., 1990 『20世紀文化の散歩道』正慶孝訳 ダイヤモンド社 [Daniel Bell: *The Winding Passage Essays and Sociological Journeys 1960-1980*, Abt Associates Inc., Cambridge, 1980]
- 正村俊之 1997 「社会秩序はいかにして可能か パーソンズとルーマン」『コミュニケーションと社会システム』佐藤勉編 恒星社厚生閣 1997
- マートン, R.K., 1965 『社会理論と社会構造』森東吾他訳 [Robert K. Merton *Social Theory and Social Structure*, Free Press, 1949]
- マルクス, K. & エンゲルス, F. 1971 『共産党宣言』大内兵衛訳 岩波文庫 [Karl Marx & Friedrich Engels: *Manifest der Kommunistischen Partei*, London, 1848]
- 安永浩 1977 『分裂病の論理学的精神病理』医学書院
- 吉田民人 1967 「情報科学の構想」『今日の社会心理学 4・社会的コミュニケーション』吉田民人・加藤秀俊・竹内郁朗 培風館
- 1991 『主体性と所有構造の理論』東京大学出版会
- ルーマン, N., 1990 『信頼 社会的複雑性の縮減メカニズム』大庭健・正村俊之訳 [Niklas Luhmann: *Vertrauen, ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität*, 2. erweiterte Auflage, 1973]
- レイン, R.D., 1979 『家族の政治学』坂本良男・笠原嘉訳 みすず書房 [Ronard. D. Laing: *The Politics of the Family and Other Essays*, Tavistock, London, 1969]

レヴィ-ストロース, C., 1976 『野生の思考』 大橋保夫訳 みすず書房 [Claude Lévi-Strauss: *La Pensée Sauvage*, Polon, Paris, 1962]

レヴィナス, E., 1990 『存在するとは別の仕方であるいは存在することのかなたへ』 合田正人訳 朝日出版社 [Emmanuel Levinas, *Autrement qu' être ou au-delà de l'essence*, Martinus Nijhoff, 1974]

ローレンツ, K., 1983 「人間行動の系統発生的基盤」『自然界と人間の運命』 谷口茂訳 思索社 [Konrad Lorenz: *Das Wirkungsgefüge der Natur und das Schicksal des Menschen, Gesammelte Arbeiten*, R.Piper & Co. Verlag, München, 1978]

(本研究をまとめるに際して国内研修の自由時間を活用した。記して感謝する。)

2001. 1. 10 受稿